

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

# 平和の架け橋

PEACE BRIDGE  
PROJECT 2014

in 東北



Project Report

2014

報告書

主催 NPO法人 聖地のこどもを支える会  
Organizer : NPO HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND

共催 中東のための ヨハネ・パウロ二世財団  
Co-organizer : JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

# 平和の架け橋

PEACE BRIDGE  
PROJECT

IN 東北

Project Report

2014

報告書

**主催** NPO法人 聖地のこどもを支える会

Organizer: NPO HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND

**共催** 中東のための ヨハネ・パウロⅡ世財団

Co-organizer: JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST

多くの犠牲者のご遺体流れ着いた大槌川  
Otsuchi-gawa River - a number of victims were washed ashore



## 目次 Contents

|    |   |          |
|----|---|----------|
| 謝辞 | Gratitudes  | 4        |
| 1  | プロジェクトの主旨と概要<br>Purpose and Outline of the Project                                  | 6        |
| 2  | 総括<br>Summary of the Project  | 8<br>15  |
| 3  | 準備 Preparations   |          |
|    | 1. 準備(日本とイスラエル/パレスチナで)<br>Preparations(in Japan & in Israel-Palestine)              | 21       |
|    | 2. 日本人参加者の事前研修<br>Preparatory Seminar for Japanese members                          | 23       |
|    | 3. イスラエル、パレスチナ人参加者の事前研修<br>Preparatory Seminar for<br>Israeli & Palestinian members | 27       |
|    | 4. チャリティーイベント Charity Event   | 28       |
| 4  | プロジェクトの経過<br>Daily Reports of the Project   | 30<br>34 |
| 5  | 収支決算<br>Balance Sheet   | 38       |
| 6  | 参加者の声<br>Feedback from the Participants   | 40       |
|    | 青年参加者の声 Voices of the Young Participants  |          |
|    | スタッフの声 Voices of the Staff  | 64       |
| 7  | 名簿<br>Name Lists  | 72       |

- 1 菜の花プロジェクトで河川敷整備に参加した後、大植川で一遊び。
- 2 計画中の避難路に植える花の苗をプランターに植える。
- 3 及川ご夫妻の家で記念撮影。温かいおもてなしにみんなの心はほっこり。
- 4 「南中そうらん」の練習風景。最後の決めポーズ成功!
- 5 大植町での「文化交流会」の後。一生懸命やりきったみんなの笑顔がすばらしい。
- 6 束の間の自由時間。東京見物を楽しむ。

- 1 Refreshed at Otsuchi River after working on a riverbed for Nano-hana Flower Project (planting field mustard).
- 2 Preparing flowers to plant alongside evacuation routes which construction is under way.
- 3 Photo taken with Mr. and Mrs. Oikawa. They invited us to their house and made us feel at ease with their warm hospitality
- 4 Practicing "Nanchu Soran" dance. Successfully struck a trademark pose at the end of the dance!
- 5 Big smiles, filled with a feeling of accomplishment, after the cultural exchange event in Otsuchi-cho.
- 6 Brief free time - enjoying sightseeing in Tokyo.



## 謝 辞

主催者：NPO法人 聖地のこどもを支える会と  
共催者：NGO ヨハネ・パウロII世財団(エルサレム)は、

イスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋 in 東北2014」プロジェクトの  
計画・実施に際し、あらゆる面で温かくご支援、ご指導くださった  
下記の団体及び個人、さらにすべての支援者に対し、  
心から感謝の意を表します。

独立行政法人 国際協力機構(JICA)  
駐日イスラエル大使館 駐日パレスチナ総代表部

大槌ベース(カリタスジャパン)スタッフの方々  
カトリック長崎管区教会 カトリック長崎教区 高見三明大司教  
聖パウロ修道会  
家田紀子氏  
フランストラベルセンター  
シャデイ・バシイ氏

NPO法人 聖地のこどもを支える会  
理事長 井上 弘子

ヨハネ・パウロII世財団  
理事長 イブラヒム・ファルタス神父



最後の「絆」ゲーム。イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちはこうして友情の「絆」を確認した。  
Final "Bond-building Game". Israeli, Palestinian and Japanese youth affirmed their bond of  
friendship through this game.

## GRATITUDES

NPO "HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND", organizer,  
JOHN PAUL II FOUNDATION (Jerusalem), co-organizer  
of this Project

ISRAEL/JAPAN/PALESTINE "LET'S MAKE A PEACE BRIDGE in TOHOKU 2014"  
Express their heartfelt gratitude to ALL THE SUPPORTERS,  
especially to :

JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY (JICA)  
EMBASSY OF ISRAEL IN JAPAN      GENERAL MISSION OF PALESTINE - TOKYO  
OTSUCHI VOLUNTEER BASE (CARITAS JAPAN), and the Staff

His Excellency Mgr. Mitsuaki TAKAMI, Archbishop of Nagasaki  
ECCLESIASTICAL PROVINCE OF NAGASAKI

Ms. Noriko IEDA

FRANCE TRAVEL CENTER

Mr. Shadi BASHIYI

For their most warmhearted and effective support for the realization of THE PROJECT.

NPO "HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND"  
President Hiroko INOUE

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST  
President Fr. Ibrahim FALTAS, ofm

# 1 プロジェクトの主旨と概要 Purpose and Outline of the Project

## 主旨

当法人は、中東和平の一助となることを願って2005年以来、イスラエル・パレスチナ・日本の青少年交流事業を広島、長崎、イスラエル、パレスチナなどを舞台に継続してきた。しかし2011年の大震災を機に、活動の地を東北に移して、今回で4回目になる。

目的は、イスラエル・パレスチナと日本の若者が、甚大な被害を受けた被災地のために、少しでもボランティア活動を行い、彼ら同士、また被災者との間に「平和の架け橋」を築き続けることである。また彼らが被災者とのふれ合いや奉仕の体験をとおして、「人間」「命」「平和」とは何かを考え、また共同生活での思いやりや助け合いの中で、相互受容と信頼のうちに対立や敵対心を乗り越えることを学ぶ。

## 概要

グループ構成：総勢 19 名

\*イスラエルとパレスチナの学生 各3名、

イスラエル国籍のアラブ人1名、

スタッフ 2名 計9名

\*日本の学生 6名

スタッフ 4名 計10名

プロジェクト実施期間は14日間。東北地方の東日本大震災被災地ではボランティア活動を行い、東京ではセミナー・報告会・交流会を実施する。企画・実施にあたっては、参加する若者たちに主体的に関わってもらい、彼らの「平和の働き人」としての成長を促す。

## 日程

2014年8月5日(火)～17日(日)【13日間】

## 活動地域

- 1) 東日本大震災被災地(岩手県・大槌町)
- 2) 東京：JICA 東京国際センター

## プログラム

1) 前半は、東日本大震災被災地(岩手県・大槌町)に滞在し、下記の活動を予定。

- オリエンテーションとアイスブレーキング
- 被災地視察(現状を知り、ボランティアとしての心構えを養うため)
- ボランティア活動  
大槌町の子供たちとの交流(学童保育支援)  
菜の花プロジェクト(大槌川河川敷の整備)  
ロックフェスティバルのお手伝い
- 仮設住宅訪問
- 文化交流会(大槌の伝統芸能、ダンス、音楽、イスラエル・パレスチナ料理などを通して、被災者の方々と交流する)

2) 後半は、JICA 東京にて分かち合いと報告会

- 分かち合い  
被災地での活動を通して感じたことや体験を共有し、「人間として生きるとは」という問いを軸に据えて、平和について考える。
- 報告会  
一般学生や支援者のために報告会を開催し、理解と交流を深める。「平和の架け橋」を築く者として、被災地やJICAでの活動を報告し、思いや決意を発信する。

## Purposes of our Project

Since the year 2005, our organization has carried out a series of exchange projects for Israeli, Palestinian, and Japanese youth with the purpose of helping to build peace in the Middle East, which used to take place in Hiroshima and Nagasaki, Israel, and Palestine. However, after the earthquake and the tsunami that damaged the northeast of Japan in 2011, we decided to change the location of the project to the Tohoku area, where we have been for the fourth time this year.

Our purpose is to build a “peace bridge” which connects to each other youths from Israel, Palestine and Japan, and that connects them to the survivors, through volunteer work for the disaster area. Besides, young participants think about the meaning of “Human”, “Life”, and “Peace” through the experience of volunteering and communicating with the survivors, and overcome the confrontation and enmity through conversation and cooperation in community life, fostering mutual acceptance and trust.

## Project outline

Group composition : Nineteen participants in total

\* Nine in total from Israel and Palestine—three students from each, one Israeli Arab, two staffs.

\* Ten in total from Japan—six students and four staffs.

For fourteen days - from August 4 to 17, 2014 - the participants will do volunteer work and exchange activity in the stricken area of Tohoku (Otsuchi, Iwate), and take part in seminars, briefing and the exchange session in Tokyo. This year the youth will have again an active role in the planning and implementation of the project. Through their work and preparation, we hope to see their growth as “workers for peace”.

## Schedule

(Mon) 5 ~ (Sat) 17 August [13 days]

## Place

1) The stricken area of Great East Japan Earthquake (Otsuchi, Iwate)

2) Tokyo : JICA Tokyo International Center

## Program

1) During the first half of the project, we will stay at Caritas Base camp in Otsuchi (Iwate) and will do activities as follows;

- Orientation meeting and ice breaking games
- Tour of the stricken areas (to learn the present situation and prepare for volunteering)
- Volunteer activities, exchange with the children in Otsuchi (helping the after-school care), Nanohana project (environmental improvement of a river side), helping at the local Rock Festival
- Visiting temporary housing
- Cultural exchange with the people in Otsuchi (communicate with the survivors and deepen the bonds with them, dance and music performances, and traditional Israeli and Palestinian food)

2) During the second half of the project, we will do sharing and hold briefing session.

- Sharing: Share feelings or experiences related to the volunteer activities and think about peace focusing on the question of “what is a life as a human?”
- Briefing session: As constructors of “Peace Bridges”, report the activities in the stricken area and at JICA, and convey thoughts or volitions of one’s own. Hold the briefing session for students and supporters, and deepen understandings and exchanges.



# 2 総括 Summary



## プロジェクトの総括

NPO法人 聖地のこどもを支える会 理事長 井上 弘子

English Translation : see P.15

### はじめに

東日本大震災後、イスラエル・パレスチナ・日本の若者と共に「平和の架け橋 in 東北」プロジェクトを実施するのは今年で4回目になる。岩手県大槌町に入るのは3回目だ。

「被災地のことを忘れないで！ たとえ小さな力でも、たとえ年に1回でも、遠い国から、しかも敵対している国から若者が継続的に来てくれるのは被災者の方々には嬉しいことだし、大きな励ましになるよ。」というある方の言葉に促されて、今年も実施するにいたった。

しかし越えなければならない大きなハードルがひとつあった。それはイスラエル・パレスチナで激しい暴力の応酬が始まったことだ。そのきっかけは、行方不明だった入植地の3人の若者が、6月末に遺体となって発見され、さらにその翌日報復としてパレスチナ人の少年が惨殺されたことである。暴力の応酬はエスカレートするばかりであった。ハマスによるガザからのロケット攻撃、イスラエル軍による空爆、日に日に増え続ける犠牲者の数・・・ こうして双方の敵対心、憎悪、不信感、恐怖感が増幅していった。

私たちのプロジェクトは、まさにそのまっただ中で実施することになったのである。パレスチナ人のビザ申請もままならなかったり、ベン・グリオン空港が数日閉鎖されていたり、一時は来日も危ぶまれた。何よりも心配したのは、イスラエル・パレスチナ人参

加者の心であった。このような状況にもかかわらず、それでも、「平和の架け橋」プロジェクトに参加する意義を見いだしてくれるのだろうか？ 日本に来てくれても、最後までやり遂げられるだろうか？

日本にいる私たちには、彼らの苦しみや危機感や複雑な感情などは、理解しきれるものではなく、どうしようもない無力感を味わっていた。

しかし、特に困難な状況下で行われた今回のプロジェクトは、何とか目的を達することができた。それを可能にくださった皆さまのご支援やご協力への感謝のうちに、その実施の過程を振り返ってみたい。

### 1. 準備

#### 始動

「平和の架け橋 in 東北 2014」実施は、2014年1月の理事会で決定し、4月に実行委員会を立ち上げた。実行委員は、今年度のスタディー・ツアーに参加した学生中尾有希と篠原双葉、事務局の浅野耕二、田制則子、福島貴和師、稲垣佐江子で、実行委員長は井上弘子とした。活動地は、昨年と同様、岩手県大槌町と決定。今までの2回の体験と大槌町の方々と結ばれた絆を大切にするためである。

#### 協賛と後援

**協賛**：今年もプロジェクト立ち上げ直後に、独立行政法人・国際協力機構（JICA）に協賛事業として名義使用の許可をいただき、JICA東京国際セン

ターの施設使用についても特別の便宜を図っていた  
だいた。

**後援:** 駐日イスラエル大使館と駐日パレスチナ総  
代表部も例年のように快く後援名義使用を承諾して  
くださった。両大使は、私たちの活動を評価し長年  
応援してくださっている。

## 現地との連携

2005年、平和のための「青少年国際交流事業」を  
ヨハネ・パウロ2世財団との協力で始めてから、9年目  
になる。今回も同財団の協力と連携のおかげで、参加  
者募集と選出、事前研修、航空券購入などが可能と  
なった。いつものように実戦力として精力的に働いて  
くれたステラ・ペドラツィーニ及びヤクープ・ガザウイ  
(2005、2007、2009、2013年のプロジェクト参加者)  
に感謝したい。

## 参加学生募集と選出

参加者は、4月からイスラエル・パレスチナと日本で、  
ホームページや Facebook、NGO 関係のホームペー  
ジの掲示板などを通じて募集を開始した。しかし、  
日本では震災後3年半を経ているせいでボランティ  
ア活動への関心が薄れたのか、応募者数が減少し、  
特に男子学生の応募が少なかった。選出は書類選  
考と面接で行った。日本人は大学生6名(男2名、  
女4名)、またパレスチナから高校生と大学生の3名  
(男2名、女1名)、イスラエルから社会人3名(男  
1名、女2名)で、兵役修了者もいた。さらに異色  
の参加者として、ユダヤ人とアラブ人共学の Hand in  
Hand 学院で学ぶ、イスラエル国籍のアラブ人の高  
校生1名(女)も選出した。したがって現地からは  
計7名である。

## 事前研修

**日本:** 6月21日(土)～22日(日)と7月21日(月)、  
2回にわたって JICA 東京国際センターにおいて事  
前研修を行った。目的は、

- ①東日本大震災の被災地でボランティアとして働く心  
構えを準備する
- ②イスラエル・パレスチナの紛争の実情を学ぶ
- ③「いのち」「平和」について思いを深める

であった。この研修のプログラム作りと実施には、  
事務局の浅野耕二、学生の中尾有希と篠原双葉が

あたった。

6月21日には、ちょうど事前研修のためにテルア  
ビブで集まっていたイスラエル・パレスチナの参加者  
グループとスカイプ(テレビ電話)で初顔合わせ、  
前もってコミュニケーションを取り合えたことは、良  
かったと思う。

7月21日も、個々にではあるが、来日する参加者  
と連絡を取ることができた。スカイプ中にもロケット  
飛来の警告サイレンが鳴って、シェルターに避難を  
余儀なくされるのを見たり、パレスチナからの参加  
者からも日常生活でどれほどの危険や恐怖を感じて  
いるかなどのお話を聞くことができ、緊張感がひしひ  
しと伝わってきた。日本の学生にとっては、現地の  
状況とともに、参加者それぞれに揺れ動く心情をか  
いま見ての貴重な学習となった。

**イスラエルとパレスチナ:** テルアビブやエルサレム  
に住む、ユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒の  
都合を合わせることはとても難しい。6月21日(土)  
にテルアビブで行った日帰りのミーティング1回だけと  
なった。2回目を予定していた7月19日(土)にはイ  
スラエル軍によるガザ空爆とハマスからのロケット弾  
の応酬が激しくなり、キャンセルを余儀なくされた。

セミナーでは、日本についての一般的な知識、東  
日本大震災の被害状況、ボランティア活動の心構え  
などを学んだ。

## 資金調達

支援金のお願いはホームページやパンフレットをと  
おして昨年より早く始めたためか、8月までの支援金  
総額は、昨年を少し上回った。

今年は助成金が全く期待できなかったもので、イ  
ンターネット上の支援金募集を試みた。専門のサイト  
「READYFOR?」を利用し、4月16日(水)にプロ  
ジェクトを公開、支援金の募集期間は3カ月とした。  
たくさんの人にこのプロジェクトに関心を持っていた  
だけのように新着情報を発信し続け、種々の努力を  
した結果、締め切り直前に目標額を達成することが  
できた。今回クラウドファンディングを可能にしてく  
ださったオーマ株式会社(READYFOR?の運営会社)  
と、ご協力くださった方々に感謝する。

7月19日(土)には、広報と資金調達をかねて、  
「イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ」を開

催し、イスラエル大使館から文化官のニール・ターク氏にもご出席いただいた。藤原歌劇団の家田紀子氏（ソプラノ）と瀧田亮子氏（ピアノ）、そして東京神田「アルミーナ」のシェフ、シャディ・バシイ氏のご協力により、素晴らしい歌とおいしいパレスチナ料理を、約100名の参加者の方楽しんでいただいた。折からガザ空爆が続いており、犠牲者のため、一日も早い停戦実現のために出席者全員で祈りを捧げた。また会場を提供してくださった聖パウロ修道会にも心からのお礼を申し上げる。

### ボランティア活動地・大槌町との調整

今年もカリタス・ジャパンの大槌ベースでグループを受け入れてくださることになった。大槌ベースは昨年、民家に移転している。以前の施設だったビジネスホテル「寿」は町の復興計画の一環である土地の嵩上げのため取り壊された。

新しい環境でグループの共同生活ができるか、またどんなボランティア活動が可能なのか。事務局の浅野耕二が6月23日に視察。今年度の活動は、仮設住宅訪問や学童保育の支援、ロックフェスティバルの手伝い、花植えなどができることがわかった。

今年も郷土伝統芸能やイスラエル・パレスチナの伝統ダンスや歌などによる文化交流イベントを催すことを決めた。

### 安全・健康面の配慮

例年のように参加者全員のためにボランティア保険に加入した。また、予想されていた猛暑に備えて熱中症予防の対処法などについて周知した。また各メンバーの宗教上の食物規定やアレルギーなどを考慮しつつ、栄養のバランスが取れるようにメニュー作りにも万全を期するようにした。

### 航空券購入と交通手段の確保

イスラエル・パレスチナ参加者8名の航空券を5月中にエルサレムで購入。

国内交通機関として、成田空港—東京往復の成田エクスプレス、東京駅—大槌町の新幹線と在来線、大槌町から東京への夜行バス、大槌町でボランティア活動に使うレンタカーなどの手配を、フランストラベルセンターに依頼した。

## 2. プロジェクトの実施

2014年8月5日早朝、成田空港にはイスラエル・パレスチナからの若者の元気な姿があった。現地の緊迫した状況で出国できるか心配していただけに、実際に彼らの笑顔を見て安堵した。

再会の喜びもそこそこに成田エクスプレスで東京に向かう。日本人若者たちは、東京駅のホームですこし緊張した面持ちで彼らを出迎える。しかし、国籍も人種も宗教も異なる若者たちが打ち解けるのに時間はかからなかった。これが現在紛争真っ最中のイスラエル・パレスチナから来た若者たちかと不思議に思うほどだった。

あとでわかったことだが、彼らは出発時、「日本にいる間は紛争や政治的問題については一切話さない」という合意をしてきたという。

記念写真を撮ったあと、すぐ新幹線と在来線を使って釜石に向かった。大槌ベーススタッフの片岡さん、亀岡さんと速見さんが駅で出迎えてくださり、温かい歓迎を受けた。

### 共同生活

大槌ベースでの共同生活は6泊7日。建物のすべてを私たちに開放してくださったスタッフの方々に感謝する。

滞在中の役割分担（清掃、洗濯、食事など）、シャワーの譲り合い、起床、就寝、分かち合い、時間厳守、それに集団生活のために決められた「生活の規範」など、ふだん自由に生活している若者たちにとっては、窮屈な面もあったに違いない。しかも2階の6畳と4畳半には男性7人、一階の8畳と6畳には、女性9人が雑魚寝をしたり、リビングもキッチンも十分な広さがなかったり、決して楽な生活ではなかったはずだが、新鮮な体験でもあったらしい。しかし、だからこそ、互いに助け合い、協力し合い、配慮し合う生活の中で、宗教や民族の違いを超えて、そして「紛争のことは心に秘めて」友情が育まれていったように思える。

しかし前述のように「紛争のことは話さない」という合意の上に成り立つ陽気な雰囲気だ。しょせん薄



8月5日来日したイスラエル・パレスチナの若者を日本人参加者が出迎えた。東京駅から新幹線でいざ大槌町へ出発。  
Japanese participants welcomed Israeli and Palestinian participants on August 5th. Heading for Otsuchi-cho from Tokyo Station by Shinkansen.

氷の上の絆でしかないのか、それが気がかりだった。

## 見学

大槌滞在第1日目、午前中に行った被災地見学は、テレビや報道でしか知らない3カ国の若者にとって非常に貴重であった。ガイドは、流暢な英語を話される神谷みおさん、復興のために町民の手で自発的に作られた一般社団法人「おらが大槌夢広場」の語り部ガイドとして活躍する方である。

見学地は、最初に、町長をはじめ多くの職員の犠牲者を出した旧町役場。その前には町民の手で慰霊の祭壇が作られ、新しい地蔵も安置されていた。そこで、私たちのスタッフの一人長野善光寺の住職、福島貴和師が慰霊のために経を読み、3カ国の青年たちも居あわせた町民の方も共に手を合わせて犠牲者の冥福を祈った。

次に町の中心部を見下ろす高台から、大津波当時の被害状況、また現在進行中の嵩上げ工事の模様などを説明していただき、その後、現在復興しつつある赤浜と港地区を見学した。

## ボランティア活動

震災後3年半、いわゆるボランティア活動の場は減ってきている。ことに数日しか滞在しない、しかも外国人を含む私たちのグループができることは限られていた。幸いベースのスタッフが前もって準備を

してくださったおかげで、下記の活動ができた。

1) **菜の花プロジェクトのための河原整備** (2012年も参加) 多くのご遺体が流れ着いた河原に菜の花をいっぱい咲かせようと頑張っておられる主催者の金山文造氏が手作りの紙芝居で語ってくださった。ご自身の壮絶な被災体験談は、若者たちの心に深く響いた。

2) **大槌町放課後児童クラブ** 小学校1~3年児童の楽しい「縁日」体験のお手伝いであった。外国人のお兄さん、お姉さんを迎えて子どもたちは大喜び!(若者たちも!)。中には、昨年来たヤクープの顔を覚えている子もいて、再会を喜び合っていた。いつでもどこでも子どもたちのエネルギーは爆発的だ!

3) **仮設住宅の訪問** まずラジオ体操で筋肉をほぐしたあと、仮設の方々と3カ国の若者たちが風船バレーに興じた。お年寄りの方々のパワーに若者たちもたじろぎ。楽しい笑い声や冗談が絶えなかった。

4) **ロックフェスティバルの手伝い** 全国から参加したロックバンドが盛り上げた「大槌ありがとうロック」フェスティバル、3カ国の若者たちはテントの設営や駐車場の整理などを手伝った。

## 大槌町の方々と交流イベント

今年の大槌町の皆さんとの文化交流会は、8月10日(日)桜木町保健福祉会館をお借りして行った。



カリタス大槌ベースで、ボランティア活動あとの分かち合い。  
Sharing after the day's volunteer activity at Caritas Otsuchi Base Camp.

昨年に引き続き3カ国の若者と大槌町の皆さんとの「平和の架け橋」をさらに築くためであった。あいにくその日は「避難所」が開設されるほどの豪雨で、来訪者は予定を大幅に下回って40～50人。

それでも前から出演をお願いしていた地元伝統芸能「向川原虎舞」と「白澤鹿子踊り」のグループは参加して下さった。日本の若者は「南中そうらん」を披露し、3カ国の若者は、東北応援ソング「花は咲く」を日本語、英語、アラビア語、ヘブライ語で歌った。それぞれの練習の成果はなかなかのものだった。

後半は若者たち全員に、ご寄付いただいたゆかたを着せることにしていた。外国人たちの着付を助けるために、桜木町の及川夫人が、ご近所のお友だちに応援をお願いして下さったことは本当にありがたかった。フィナーレは、いよいよお楽しみのパレスチナ料理、神田「アルミーナ」のシェフ、シャディさん、スタッフと学生たちが総出で、保健福祉会館の調理室で腕によりをかけて準備したものだ。残念ながら、大雨のために出席者の方は、帰宅を急いでおられたので、ゆっくりと食べていただけなかったのが悔やまれる。

最後に外国人も含めて全員が盆踊りを楽しみ、交流のひとときを締めくくった。悪天候にもかかわらず、ご協力下さった方々、ご出席いただいた方々に心から感謝している。

被災地での一週間は、3カ国の若者たちにとって素晴らしい体験となった。小さな大槌ベースで、み

んなが家族のように思いやり支え合った、「楽しい」共同生活をしたこと、ささやかでも力を合わせてボランティア活動をし、他の人々のために奉仕する喜びを味わったこと、被災地の方々の優しさに触れ、どんな状況にあっても笑顔を決やさず、たくましく、前向きに、忍耐強く生きておられる姿に感動したこと、大災害の悲惨さをビデオや体験談をとおして知り、心の痛みとともに被災された方々への深い共感を覚え、同時にかげがえのない「いのち」の大切さを実感したことなど、若者たちにとって、またとない大きな学びの場であったと思う。

若者たちの印象に最も残ったのは、及川ご夫妻のご親切とお人柄ではないだろうか。ご夫妻は2年前電車の中で偶然にお知り合いになったことがご縁で、今年はスタッフ3人とシャディさん(父娘)をご自宅に泊めて下さった。また遠いイスラエル・パレスチナから若者たちがボランティア活動に来たことをとても喜んで下さって、2度も全員をご自宅に招き、楽しい一時を過ごさせて下さった。さらに大津波の恐ろしさを生々しく伝える未公開のビデオや、お二人の被災当時の体験談にも若者たちの心は揺さぶられた。ある学生は言う。「お別れの時、玄関前の通りまで出て、雨上がりの虹が空にかかる中、私たちの姿が見えなくなるまで手を振り続けて下さったお二人の姿を忘れられない」と。

大槌滞在の最後に各参加者に聞いてみた。「この一週間をどう思う?」返ってきた答えは、皆似ていた。「生涯最良の日々だった。」「今までで一番幸せだっ



被災地見学。多くの犠牲者を出した旧町役場の前で説明を聞く。時計は津波に襲われた3時20分を指している。  
Visit to affected sites. Learned about the disaster in front of the former town hall where a number of victims were found. The clock pointed to 3:20p.m., the time the town was struck by the great tsunami.

た。」「どんな人とでも仲良くなれることが分かってとても嬉しい!」「人間はどんな大変なことでも支え合えば乗り越えることができるようになった。」

### 3. セミナーと報告会

6泊7日の大槌町滞在を終えて8月11日(月)深夜、グループは夜行バスで東京へ向かった。JICA 東京国際センターには5日間滞在した。

8月12日(火)の午前中は、参加者の要望に応じて、東京大空襲戦災資料センター(The Center of the Tokyo Raids and War Damage)を見学。研究員の説明や東京大空襲を生き延びた語り部のお話は、日本の若者たちには、戦争の悲惨さと愚かさを身近に感じる体験となり、イスラエル・パレスチナの若者たちには、現に紛争のまっただ中にある祖国の人々の苦しみを思い出す機会となった。

次の3日間は、ワークショップ、対話、シェアリングにあてられた。この段階で、私たちはプロジェクトの最も難しいデリケートな局面にさしかかる。

まずワークショップでは、意見や利害が異なる者同士が、どのように妥協点を見いだすか、またそれを調停し仲介する者はどう行動するかなど非常に真剣に考え合い、討論した。

そのあと、いよいよ紛争に関する彼ら自身の問題に取り組む時が来た。もちろん、彼らが来日前に紛争問題には触れないという合意をしてきたのは知っていた。だが、敢えて、「シェアリング」の時間を設

けて、それぞれが心の最も奥深く秘めている苦しみや悲しみ、不安や恐れなどを、「友だち」となった仲間たちと分かち合うように、さらに聴く側も心を開いて、「話し手」に対する共感と尊敬を持って耳を傾けるようにと提案した。相手の本音を聴き、その痛みを理解し合って初めて、真の心の絆が生まれるはずだからだ。

しかし、その提案を聞いて彼らの表情は一変し、笑顔は消えてしまった。心の奥にどれほど大きな、そして複雑な苦しみを抱えているかがかいま見えた。嫌々承知してくれたが、初めは重苦しい沈黙の時間が流れた。しかし、だんだんと心がほぐれたのか、一人、また一人と、紛争の中で生まれ育った苦しみを躊躇しながらも語り始めた。毎日の生活の中で、分離の壁や検問所によって自由を阻害され、将来の夢を絶たれていること、いつ銃撃や自爆攻撃の犠牲になるか分からないという恐怖感を抱いていることなど、イスラエル人もパレスチナ人も相手の口から直接そういう話を聞くのは初めてであった。ましてや日本人にとっては、そのような生の声を聞くのも初めてであった。互いに相手をありのままに受け止め、理解し、心のつながりが深くなるのを感じたのではないだろうか。

最後に、互いのつながりを目に見える形で表すために、「絆」ゲームをした。荷造り用の紐を準備し、全員が一つの輪になって、もし誰かが誰かに対して感謝や感動していることがあれば、理由を説明しながら、その相手に紐を渡し、また渡された人が他の

誰かに別の理由で紐を渡していくというものであった。こうしてだんだんと紐のネットワークができて、目に見える絆が紡がれていき、笑顔が戻ってきた。

報告会は8月16日(土)の午後に行った。出席者は40人程度、PR不足は否めない。

プレゼンテーションでは、ビデオやパワーポイントを使ってプロジェクトの成果を報告し、また各自の体験や感想などを述べた。しかしここではほとんど大槌町でのボランティア活動報告に終始し、肝心の紛争に関する話はほとんどなかった。

休憩後出席者を交えて4つのグループに分かれて、熱心な質疑応答を行われた。その時はイスラエル・パレスチナの若者は少しは本音で話せたのではないだろうか。

## 終わりに

今年の「平和の架け橋 in 東北」プロジェクトは、前述のようにイスラエル、パレスチナでは暴力の応酬のまっただ中という、特異な状況で行われた。

しかし、私たちの事前の危惧にもかかわらず、またイスラエル、パレスチナからの参加者の不安や躊躇にもかかわらず、例年と同じように目的を達成できたと思う。

被災地で彼らは、多くのかけがえのない「いのち」が失われ、計り知れない苦しみや悲しみを人々にもたらしたのは、自然の大災害だったことを見た。同時に、今まさに祖国で同じように多くの人々がいのちを落としつつあり、愛するものを失った人々の涙が

流れ続けている現実にも思いを馳せた。そして彼らは気づいた。その原因は、この被災地と違って人間同士の争いではないか。それなら、対話をし、譲歩し合い、ゆるし合うことによって、和解への道、平和への道が開けるのではないかと。

このプロジェクトで、イスラエル・パレスチナの若者は、少なくとも「平和共存」は可能だということ、相手を自分と同じ「人間」として理解し、信頼し、共感し、向き合えば、友情の絆を結ぶことができるということを体験し、将来への希望を持つことができた。日本人の学生にとっては、イスラエル・パレスチナの紛争はもはや遠い国の他人事ではなく、「友」の問題となった。友人ならば、安全や幸せを願わずにはいられない。

そんな若者たちの心に、確実に「平和の種」が蒔かれたと信じている。種には、生命力が宿っている。一粒一粒が、将来中東で、日本で、大きく成長し、実を結ぶことを心から願っている。

かつてプロジェクトやスタディー・ツアーを経験し、今回はスタッフ、そしてヤングリーダーとして力を尽くした若者たちの力は、今年も大きかった。「平和の若木」として、いっそうの成長に期待している。

私たちはこれからも、「平和の架け橋」プロジェクトを継続していきたいと願っている。

このプロジェクトを実施できるよう応援し励ましてくださった多くの支援者や団体の方々に心から感謝しながら、このささやかな活動を今後も温かく見守ってくださるようお願い申し上げます。



被災地見学。前方の土は嵩上げ工事のためだが、ヒ素が含まれていることが分かり、使われないことに。

Visit to affected sites. The soil in front was originally prepared for embankment, but it turned out later that the soil was arsenic-contaminated and then it was decided not to use the soil.

# A Summary of the Project

Hiroko Inoue  
Chairperson of Non-Profit Organization "Helping Children in the Holy Land"

## Introduction

This year marks the fourth time that we have conducted the "Peace Bridge in Tohoku" project with youth from Israel, Palestine and Japan since the earthquake and tsunami in the Tohoku region. This year is the third time we have worked in Otsuchi-cho, Iwate Prefecture.

"Don't forget the stricken area. Even a little help, even only once a year, is a joy for the victims... that young people from distant countries, especially from countries fighting one another, continue to come here is a great encouragement for us." Moved by these words, again this year, we decided to go ahead with the project.

We had, however, a great hurdle to overcome: the increasing exchanges of violence which had begun again in the Middle East. The conflict began when three young men missing from an Israeli settlement were found dead at the end of June and when, in retaliation, a Palestinian boy was cruelly murdered next day. The exchange of violence was constantly escalating. Rockets fired from Gaza by Hamas, air raids by the Israeli Army, the number of victims growing higher and higher... This is how enmity, hatred, distrust and fear were amplified.

It was in just these conditions that our project was to begin. There were problems in obtaining visas for the Palestinians and Ben Gurion Airport was closed for some days, we were concerned that the participants could not come to Japan. Our greatest concern was psychological condition of the Israeli and Palestinian participants. In such circumstances, would they be able to find the meaning in the "Peace Bridge" project? Even if they come to Japan, would they be able to carry the project through to the end?

It was difficult for those of us living in Japan to understand their sufferings, their sense of crisis, and their complicated emotions these engendered.

We, however, managed to achieve the goals of the project, even though it had to be carried out in very difficult circumstances. With gratitude to all those who made it possible, I would like to look back on the process of the project.

## 1. Preparation of the Project

### The Project Starts

The Board of Directors decided to go ahead with the "Peace Bridge in Tohoku 2014" project in January 2014 and the Executive Committee was formed in April. The Executive Committee's members were Yuuki Nakao, Futaba Shinohara, the students who had participated in this year's Study Tour, Koji Asano, Noriko Tasei, Rev. Kiwa Fukushima, and Saeko Inagaki, project office members, and Hiroko Inoue, Executive Committee Chairman. We decided to select Otsuchi-cho, Iwate Prefecture, again as the site of volunteer work, following last year, in order to value the past experiences over the two years and relationships built with the people in Otsuchi in these years.

### Sponsorship and Assistance

**Sponsorship:** We received the sponsorship from the Japan International Cooperation Agency (JICA) again this year, at the beginning of the project, and also obtained a special permission for the use of their Tokyo International Center.

**Assistance:** We received the assistance of Embassy of Israel and General Mission of Palestine as in the past years. Both ambassadors have appreciated our activities and supported us for years.

### Cooperation with Israel and Palestine

Nine years have passed since we created the International Youth Exchange Project in 2005, in cooperation with the John Paul II Foundation. Thanks to their continued cooperation and coordination, we were able to recruit and select participants, to organize prior training sessions and to buy airline tickets. I am especially grateful to Stella Pedrazzini and Yacoub Ghazzawi (participant in 2005, 2007, 2009 and 2013) who worked energetically as usual for this project.

### Recruitment and selection of participating students

Recruitment began in April in each of the three



countries through Internet website, Facebook, our NGO's bulletin boards, etc. In Japan, applicants, especially male students, were very few, presumably because interest in volunteer work has waned as three and a half years have passed since the disaster. The participants were selected through a written application and an interview. The participants from Japan were six university students (two men and four women), those from Palestine were three high school and university students (two men and one woman), while those from Israel were three adults (one man and two women). A few of them had finished their military service. As an extraordinary participant, we chose one female high school student, an Arab with Israeli nationality who attends to Hand in Hand Academy where both Jews and Arabs study together.

### **Prior Training**

**Japan:** Prior training was conducted from the 21st to the 22nd of June and again on the 21st of July at the JICA Tokyo International Center. The goal of these sessions was 1) to mentally prepare the participants for volunteer work in the disaster-affected area, 2) to learn about the reality of the conflict between Israel and Palestine and 3) to reflect deeply on life and peace. The preparations and implementation of the training sessions were conducted by project office member Koji Asano and two students, Yuuki Nakao and Futaba Shinohara.

On June 21st, we had a video conference via Skype with Israeli and Palestine participants who met together in Tel-Aviv. It was good for us to meet one another.

On July 21st, some of us individually talked with the participants via another Skype call. During this video call, we heard the sound of air raid siren after rockets had been fired and saw the people forced to evacuate to shelters; we also learned from Palestinian participants how much they feel fears and dangers in their everyday's lives. It was a precious opportunity for the Japanese students to have a glimpse of feelings of Israeli and Palestinian participants and the local circumstances.

**Israel and Palestine:** It was very difficult to accommodate the schedules of the Jewish, Muslim and Christian participants living in Tel-Aviv and Jerusalem, and so, we held only a one-day meeting in Tel-Aviv on June 21st. The second meeting planned for July 19th had to be canceled because of Israeli air raids and Hamas rocket fires in Gaza. In this seminar, the participants learned some general

things about Japan, conditions in the disaster area and some of the basics of volunteer activity.

### **Fund-raising**

Donations to August from the general public were slightly greater than those we received last year, perhaps in part because we began fund raising earlier through our website and pamphlets.

Because, this year, we could not expect subsidies we had received in previous years, we tried using crowd funding called READYFOR? for the first time. On April 16th, we published our project on READYFOR? website and opened a three-month fund raising period. With various efforts such as keeping updates of the project to attract people's attention, finally we reached our goal shortly before the deadline. I am very grateful to READYFOR? for the chance of the crowd funding and to all the people who collaborated.

On July 19th July, we held the "Israel, Palestine and Japan Friendship Night" as a fund raising and publicity event. We had Mr. Nir Turk, Chief of Cultural Affairs of the Embassy of Israel. Thanks to the collaboration of soprano Mrs. Noriko Ieda and pianist Mrs. Ryoko Takita, both of the Fujiwara Opera Company, and chef Shadi Bashiyyi of restaurant "Almina" in Kanda, Tokyo, approximately one hundred people participated in the event and were very satisfied with the wonderful music and delicious Palestinian foods. With all the participants, we prayed for the victims of the continuing air raids and the earliest cessation of hostilities.

### **Coordination with the Caritas Japan Otsuchi Base Camp**

We decided to work as volunteers in Otsuchi-cho again this year, as Caritas Japan Otsuchi Base Camp was pleased to accept our group. Last year, Otsuchi Base Camp moved to a small house from the previous site, business hotel Kotobuki, where we stayed in past years, because the hotel was torn down for part of reconstruction of the town, to increase the height of ground to prevent tsunami. On June 23rd, Koji Asano, project office member visited to see if we could create a community life in this new place and also to see what kind of volunteer activities we might engage in there. We realized the needs such as visiting people living in temporary housing and visiting a school to help taking care of school children outside of school hours, as well as helping at a rock festival and planting flowers.

Again this year, it was decided to hold an intercultural event including local traditional dances and Israeli and Palestinian traditional dances and songs.

### **Health and safety considerations**

We arranged for volunteer insurance for all the participants to be covered as in the past. We carefully prepared a nutritionally balanced diet, taking into consideration all the members' religious dietary restrictions and their allergies.

### **Flight tickets & transportation**

In Jerusalem, in May, we purchased flight tickets for the eight participants who were coming from Israel and Palestine.

In Japan, we made transport arrangements through France Travel Center for Narita Express from Narita Airport to Tokyo and back, Shinkansen and regular railway between Tokyo Station and Otsuchi-cho, the night bus from Otsuchi-cho to Tokyo, and rental car for transportation for volunteer work in Otsuchi-cho.

## **2. Implementation of the Project**

### **A. Volunteer Activities in Otsuchi-cho**

Early in the morning of August 5th, after a long journey, the Israelis and Palestinians arrived in Japan. After having been very worried about their departure from Israel because of the tense situation, I was greatly relieved to finally see them smiling in front of me. We immediately boarded the Narita Express for Tokyo. At the platform in Tokyo Station, the Japanese youth were waiting for them a bit nervously. However, it did not take much time before all of them - youth from different countries and of different religions - were being open with each other. We wondered if these were really youth who had come from Israel and Palestine, nations now in the midst of conflict.

I came to know later that, before leaving the airport, they had decided not to talk about conflicts or any political matters while in Japan.

After having taken a group photo, we hurried to catch the Shinkansen and the regular train for Kamaishi Station. At the station, we were welcomed by Mr.Kataoka, Mr.Kameoka and Mr.Hayami, members of Caritas Otsuchi Base Camp.

### **Community life**

We lived together at the Otsuchi Base Camp

for six days and six nights. I am very grateful to all members of the Base Camp who opened the building to us.

It certainly must have been difficult for these young people, who usually live lives of complete freedom, to live all together with so many rules: the Base Camp schedule, house cleaning, laundry, meal preparation, wake-up and curfew time, daily sharing, meal times, a shower schedule and punctuality. It surely could not have been a comfortable life, for example, sleeping all crowded together, seven boys in two small rooms on the second floor, one is six-tatami room and another is four and half-tatami room, and nine girls in two rooms on the first floor, one is eight-tatami room and another is six-tatami room. Living room and kitchen was not big enough. It, however, seemed to be a new experience for them. And so, through helping one another, collaborating and being considerate of each other, the differences of religion and language were overcome and, hiding their feelings about the conflicts, friendship was able to grow.

As I have mentioned earlier, this was a cheerful atmosphere created under their agreement not to talk about the conflicts as much as possible. I was concerned that this would mean the creation of only superficial bonds among them.

### **Field trip and experiences of the disaster area**

On our first day in Otsuchi, a visit to the disaster area in the morning proved to be a precious experience for the young people. Until then they had only seen and heard of it through the television and news media. Mrs.Mio Kamiya, who speaks fluent English, was a good guide to the "We are the Dream Plaza of Otsuchi", an association established by residents of the area to work together for the reconstruction of Otsuchi-cho.

The first place we saw was the deserted City Hall, where many municipal workers, including the mayor, had lost their lives. In front of the ex-City Hall, an altar for memorial services has been erected, as well as a new Jizo, the guardian deity. At the end of our visit, Rev. Kiwa Fukushima, chief priest of the Nagano Zenkoji Buddhist temple, one of our staff members, read prayers in memory of the victims, and the youth from the three countries together with other people who happened to be there at that time prayed for the souls of the victims.

After seeing the old City Hall building we went to a hill top which affords a view of the center of the city and there we received an explanation of



被災地見学。「おらが大槌夢広場」の語り部ガイド神谷みおさんの流暢な英語で説明を聞く。

Visit to affected sites. Mrs. Mio Kamiya, the guide of "We are the Dream Plaza of Otsuchi", an association established by Otsuchi residents, told a story about the disaster and Otsuchi fluently in English.



大きな船が民家の上に乗りに上げた赤浜で。写真の説明を聞いてみんなびっくり。

Akahama Beach where the big ship was swept away up to the rooftop of a house by tsunami. Everyone was stunned.

the damage done by the tsunami and of the work in process to raise the levee. We then visited the Akahama Beach and the Port, both of which had been destroyed by the tsunami and are now being rebuilt.

### Volunteer activity

Three and a half years have passed since the earthquake, and opportunities for volunteer activities have become fewer. What we could do was limited, especially for a group of young people including foreigners being able to stay in Japan only for a short time period. Thanks to the Base Camp staff, we were able to work as volunteers in the following ways:

1) The preparation of the riverbed for the Nanahana (Field Mustard) Flower Project. We also participated in this project in 2012. The picture card show made by the promoter of this project Mr. Kaneyama and based on his own experience of the disaster greatly moved the young people.

Mr. Kaneyama wants to plant the riverbed where the bodies of so many victims of the tsunami were washed away in field mustard flowers as a memorial to them.

2) Visiting a summer school. We helped with the Green Day activities of the first to third graders of the local elementary school. The children were very happy to receive the help of foreign "brothers and sisters", and our young people also enjoyed the experience. Some children were excited at reunion with Yacoub who had participated in this same activity last year - energy of children is explosive anytime, anywhere.

3) Visiting people living in temporary housing. After having stretched their muscles with popular radio exercises, senior people from the temporary housing had fun playing balloon volleyball with young people from Israel, Palestine and Japan. The youth were overwhelmed by the power of these senior people. Laughter and jokes were never lacking.

4) Helping at the Rock Festival. Many rock bands from all over Japan came to animate the "Otsuchi Thank You Festival". The young people from the three countries helped with the installation of the tents and worked as car park attendants.

### A Cultural Event with the People of Otsuchi-cho

On August the 9th, we held a cultural exchange with the residents of Otsuchi-cho at the Sakuragi-cho's health and welfare hall. We held this event to further strengthen the "Peace Bridge" that was created last year between the young people of the three countries and the Otsuchi residents. Unfortunately, because of heavy rainfall - so strong it even forced some people into emergency centers - only about forty people participated, significantly fewer than the we expected.

Nevertheless, the local traditional performance art groups, Mukaigawara Tiger Dance and Usuzawa Deer Dance, whom we had asked to perform, joined the event. The Japanese youth played Nanchu Soran and the youth from all three countries sang a song for Tohoku affected area called "Flowers will bloom" in Japanese, English, Arabic and Hebrew. Thanks to their hard practice, the song turned out to be wonderful.

At the last part of the event, we decided to have the young people wear yukata we had received. It was wonderful that Mrs. Oikawa, a Sakuragi-cho resident whom we asked for help to dress the

young people in the yukata, called on her neighbors to help us.

The finale of the event was a Palestinian meal prepared by Mr. Shadi, the chef from Almina, restaurant in Tokyo, who prepared Palestinian meals together with our staff and students in the health and welfare hall's kitchen; all did their very best. It was regrettable that the participants had enough time to enjoy the meal because they had to hurry home due to the heavy rain.

Finally, all the participants, including the foreign youth, enjoyed dancing Bon Odori (Japanese traditional dance), and the cultural exchange was brought to a conclusion. I want to express my deep gratitude to all the people who collaborated and joined in the event despite the bad weather conditions.

The week lived in the disaster area resulted to be a great experience for the youth from the three countries. The "fun" experience of living as a family collaborating and supporting each other in the small Otsuchi Base Camp, the happiness they felt through serving each other and putting their energy into volunteer activities, the emotions they felt in touching the kindness of the victims and seeing them always smiling, strong-minded, positive and patient, feeling the importance of irreplaceable "life", and at the same time, feeling sympathy for the heart-broken victims through watching a video of the tragedy of the disaster and listening to the experiences of the victims, became for the young people an unrepeatably learning experience.

I think that the greatest experience that will remain in their hearts would probably be the kindness and personalities of Mr. and Mrs. Oikawa. We got to know them in the train two years ago by coincidence. This year, they let our three staff members and Mr. Shadi and his daughter stay in their house. They were pleased that that Israeli and Palestinian young people came there for volunteer work from a distance, and they invited all of us twice to their house and we really had a good time, thanks to their warm hospitality. Moreover, the young people's heart was shaken by their first-hand account of the disaster and by the unpublished video showing vividly the horrors of the tsunami. One student said, "I will never forget how, at the moment of our parting, as a rainbow after the rain appeared in the sky, they came out the front door and waved us out of sight."

On the last day of our stay in Otsuchi-cho, we asked the participants, "What did you think of the

past one week?" Their responses were almost all the same: "The best days of my life," "The happiest moment of my life," "I am very happy to have known that I can be friends with everyone," "I realized that people we can overcome the most difficult things by supporting each other."

### **3. Seminar and Briefing Session in JICA, Tokyo**

After our six days of volunteer activities in Otsuchi-cho, we returned to Tokyo by the night bus on August 11th. We stayed at the JICA Tokyo International center for five days.

On the morning of the 12th, in response to a request of the participants, we visited the Center of Tokyo Raids and War Damage. The presentation by the researchers and the experiences shared by the survivors of the Great Tokyo Air Raid made the Japanese students sympathize with the misery and folly of wars, and gave Israeli and Palestinian youth an occasion to recall the sufferings of their own countries now in conflict.

Over the next three days, we had many types of workshops, dialogues and sharing sessions. At this point, we came to the most delicate phase of the project.

First, in the workshops, we had serious exchanges of opinions and debated on how people with different opinions and interests might find a common meeting ground, how they could negotiate and how the mediator should proceed.

After these activities, we were finally ready to talk about their own war related problems. We, of course, knew that they decided not to talk about the conflicts before coming to Japan. But now, having an opportunity of sharing, we suggested to the participants that they would share their own deepest sufferings, anxieties and terrors and also that they listen to one another with sympathy and respect, opening their hearts, as now they all became friends. Only by listening to another's true voices and understanding his/her pains, true heart-bond can be born.

As they heard this suggestion, the smiles disappeared from their faces at once. At that moment, we had a glimpse of how great and complicated their sufferings are. They reluctantly accepted our suggestion, though at first only an oppressive silence could be heard. Perhaps it was because the tension began to ease but, one after another, hesitantly, they began to talk about the suffering of having been born and grown up under

the fire of war. For the first time, the Israeli and Palestinian youth were able to hear in one another's own words the sense of terror at having their freedom obstructed by walls of separation and checkpoints, the agony of having their dreams cut off by the fear of becoming victims of shootings or suicide bomb attacks without any warning. Needless to say, it was the very first time for the Japanese young people to hear such words. I think that as they began to understand and accept one another they were able to feel the bonds among their hearts grow stronger.

In the end, to help them see concretely the ties among their hearts, we played the "Bond Game". After having prepared a number of long cords, the game consists in all the participants forming a circle and then one person taking a cord and giving it to someone in the circle to whom they were grateful, or by whose words or actions they had been moved, while explaining the reason. The person receiving the cord would then do the same, and so on, one after another. In this way a visible network of connections is formed among the participants; their smiles appeared again.

The briefing session took place in the afternoon of August the 16th. There were only about forty people present, due to our lack of publicity.

We made a presentation using videos and PowerPoint to show the fruit of the project and to talk about our own experiences and impressions. This first part of the briefing consisted mostly of reports on our volunteer activities in Otsuchi-cho, with virtually no mention of conflict, the most important thing.

After a break, we divided into four groups and had a serious question period. On that occasion, I think that the Israeli and Palestinian youth were able to speak honestly.

## Conclusion

As I mentioned earlier, this year's "Peace Bridge in Tohoku" project was carried out in the midst of very complicated situations, especially the violence and retaliations in the Middle East. However, in spite of our misgivings and anxieties, and the hesitation of the local participants, I believe that, as we did last year, we reached our goals.

In the disaster area, the participants saw that it was a natural disaster that took many innocent lives and caused people immeasurable suffering and grief. At the same time, they could not help but

have present the great suffering, many tears shed for lost loved ones, the countless victims being caused by war in their own countries. And at that moment, they realized something very important: the cause of these situations, while so similar in their effect of creating suffering, was very different. The suffering of the victims in the Tohoku region had been caused by a natural disaster, while that of those in the Middle East by a conflict between people. And so, might they not dialogue, make compromises and forgive each other and so open a road toward reconciliation and peace?

In this project, the youth from Israel and Palestine were able to experience that peaceful coexistence is at least possible if one can accept, trust, sympathize with and face the other, the opponents, as a human being the same as oneself. They were able to experience that bonds of friendship can be made, that there is hope for the future. For the Japanese students, the conflict between Israel and Palestine was no longer someone else's concern, but the suffering of their own friends; and for the safety and happiness of a friend, how not to pray?

I believe that a "seed of peace" has surely been sown in the heart of each of the participants. This seed contains a wonderful vitality. I truly hope that each of these seeds, whether planted in the Middle East or in Japan, will grow up and bloom in wonderful flowers and bear fruit in the future.

I think that the project became for each participant an important experience capable of changing the course of each of their lives.

The help of the young people who, having already experienced our projects and study tours, worked tirelessly as staff members and youth leaders, was great. It is with joy that we look forward to seeing them continue to grow as young trees of peace.

From now on, I hope to continue with the "Peace Bridge" project to link Israeli, Palestinian and Japanese youth.

From the bottom of my heart, I thank all the groups and individuals who encouraged and supported us to make our project possible, and your continued support will be highly appreciated.

Thank you.

# 3 準備 Preparations

## 1. 準備 (日本とイスラエル/パレスチナで)

| 実施月               | 準備活動の概略                        |  |
|-------------------|--------------------------------|--|
| 2月                | プロジェクト<br>実施決定                 | 東日本大震災3年目を受けて、NPO法人理事会においてプロジェクト実施を決定。共催団体は例年のとおり、ヨハネ・パウロⅡ世財団。   |
| 2～8月              | 支援金募集                          | プロジェクトのポスター、チラシを作成。支援者や各支援団体へ送付。   |
| 3月                | 協賛の申請<br><br>宿泊・交流会会場<br>などを予約 | JICA地球ひろば、駐日イスラエル大使館、駐日パレスチナ総代表部の協賛を得る。<br><br>カリタス大槌ベース(8月5～11日)<br>大槌町桜木町保健福祉会館(8月10日)：交流会のため<br>JICA東京国際センター(8月12～17日)：宿泊、セミナールーム、報告会会場 |
| 3～5月              | 参加者の<br>募集と選定                  | インターネット、口コミなどで募集。海外から招聘する若者をヨハネ・パウロⅡ世財団と協力して選定(7名)、日本の学生も書類審査、面接を経て選定(6名)。   |
| 6月                | 交通手段の<br>準備                    | 航空券、国内交通手段《成田エクスプレス、東京～釜石の新幹線を含むJR団体券、大槌町～池袋の夜行バス切符購入、現地でのレンタカー予約》を確保。   |
| 6～7月              | ビザ手続き                          | パレスチナ人の日本入国ビザを取得するための書類作成、エルサレムへ送付。テルアビブの日本大使館へ数回訪問。現地の緊迫した状況のため難航。  |
| 6月21、22日<br>7月21日 | 事前研修<br>(日本)                   | JICA東京国際センターにて事前研修を実施。被災地でボランティア活動をする心構えを準備、イスラエル・パレスチナ紛争の理解を促進。   |
| 6月19日             | 事前研修<br>(イスラエル・パレスチナ)          | テルアビブにおいて実施。日本についての学習。東日本大震災の被災状況、ボランティア活動の心構えなど。(情勢緊迫のため、実施は1回)   |
| 6月23日             | 大槌町訪問                          | スタッフ浅野耕二が大槌町を訪問。移転後のカリタスジャパン大槌ベースを視察。ボランティア活動の状況、可能性などについて情報収集。  |
| 7月19日             | チャリティー・<br>イベント                | 家田紀子氏、瀧田亮子氏、シャディ・バシイ氏のご協力を得て「イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ」を開催。(約100名参加)  |
| 8月上旬              | 直前準備                           | 現地での活動に使用する食料品、医療品、雑貨などを購入、大槌町に送付。Tシャツ、旅のしおり、名札などを作成。  |



プロジェクトのロゴタイプ入りユニフォームTシャツ。  
Uniform T-shirts with logotype of the Project.

## 1. Preparation (in Japan & in Israel-Palestine)

| Month/2014           | Heading  | Detail   |
|----------------------|--|--|
| February             | Decision to carry out the project  | Decision of the executive committee to carry out "Peace Bridge in Tohoku 2014" which would include youth from Israel, Palestine and Japan. Decided "JOHN PAUL II FOUNDATION" as the co-organizer.  |
| February - August    | Fundraising  | Made posters and leaflets to collect funds, started distributing material to supporters and supporting organizations.  |
| March                | Application for approval<br><br>Reservation of accommodation, rooms and location | Obtained approval from JICA Global Plaza, the Embassy of Israel and the General Mission of Palestine.<br><br>Caritas Otsuchi Base(5-11 August) Otsuchi-cho, Sakuragi-cho Hoken Fukushi Kaikan (10 August) : for the exchange event.<br>JICA Tokyo International Center (12-17 August) : accommodation, seminar rooms and location for the symposium. |
| March - May          | Recruitment  | Recruitment of young members through internet as well as NPO's network. Selection of seven members from Israel and Palestine with the co-organizer "JOHN PAUL II FOUNDATION" and selection of Japanese members through resumes and an interview.   |
| June                 | Reservation of transportation  | Purchase of plane tickets for Israelis and Palestinians, reservation of transportation in Japan: group tickets of JR lines including Narita Express and Shinkansen from Tokyo to Kamaishi, tickets of the night bus from Otsuchi to Ikebukuro and rent a car in Otsuchi).  |
| June - July          | Application for VISA   | Preparation of documentation to obtain Palestinians' entry VISA to Japan through the Embassy of Japan in Tel Aviv. The process was particularly hard this time due to the tense situation in Israel and Palestine,   |
| 21,22 June<br>21July | Preparatory Seminar (for Japanese)   | In JICA Tokyo International Center, Japanese participants prepared for the volunteer activity in the disaster area and learned about the conflict between Israel and Palestine.  |
| June19               | Preparatory Seminar (for Israelis and Palestinians)                              | Participants learned about the situation of The Great East Japan Earthquake, prepared for the volunteer activity in the disaster area and learned about Japan. Due to the situation, only one seminar was organized.   |
| June 23              | Visit of Otsuchi   | Staff member Mr. Koji Asano inspected Otsuchi-cho in order to visit the new base of Caritas Japan, update the information about the situation and the possibility of volunteering.   |
| August               | Last purchases and arrangements  | Purchase of food, medical supplies and other items necessary for the activities and sent them to Otsuchi. Made T-shirts, itineraries and nametags.   |

## 2. 日本参加者の事前研修

大場 夏希

### 事前研修

6月21、22日の2日間及び7月21日の2回的事前研修をJICA 東京国際センターにて実施した。

### スケジュール

6月21日(土)

午前 自己紹介

NPO及びプロジェクト説明

未来へのおくりものスペシャル(DVD)鑑賞

午後 昨年度参加者によるプロジェクトのプレゼンテーション

参加者によるプレゼンテーション

(中東の歴史/分離壁/入植地/和平交渉/国際社会の反応)

ディスカッション「ボランティア活動の意義」

福島貴和師(実行委員・長野善光寺住職)

による講演「いのち寄り添う」

6月22日(日)

午前 震災ドキュメンタリー映像視聴

カリタスジャパン大槌ベースの方より現地状況のご説明(テレビ電話による)

参加者によるディスカッション

「3カ国学生が集う意味、日本人参加者の役割」

午後 英会話・英単語

イスラエル・パレスチナ参加者とのテレビ電話

交流会出し物の検討・決定

復興応援ソング「花は咲く」練習

### 研修の経過

#### 1日目

参加者は自己紹介をし、なぜこのプロジェクトに参加するかなど、相互の理解を深めた。その後、井上弘子理事長が、NPO発足～現在のプロジェクト形態に至るまでの経緯を紹介した。映像資料を見ながら一同、プロジェクトの意義に対する理解を深めた。

その後、平和の架け橋 in 東北 2013 プロジェクトの参加者より、大槌町の様子や1年前に行われた活動の様子が伝えられた。

昼食後は、事前に割り当てられていたテーマについて、各参加者がプレゼンテーションを行った。春のスタディー・ツアーに参加した者は、経験談や現地の写真をはさむなど、実体験に基づく発表を行った一方、スタディー・ツアーに参加しなかった者からは資料に基づく発表があり、相互補完的で有意義な学習となった。

その後、参加者がそれぞれの思うボランティア活動の意義と問題点について意見を交換し、議論した。ボランティアとは、与える者と与えられる者がいるのではなく、ボランティアとして活動する側も多くのことを学ぶという意味で双方向のやりとりが発生するものだという結論で一致した。

最後に、福島貴和実行委員による、「いのち寄り添う」というテーマの講演を拝聴した。ここでも、「寄り添う」という語に込められた双方向性が強調された。

#### 2日目

JICA 東京国際センターに1泊した翌日は、導入的な学習であった昨日の内容から更に踏み込んで、私たち参加者を主体として、プロジェクトをどのようなものにしていくかという点に重きが置かれた。

午前中には、岩手県上閉伊郡大槌町の被災状況について、映像資料により理解すると共に、カリタスジャパン大槌ベースの片岡さんとテレビ電話を用いてお話しをした。片岡さんより、最近の街の様子や仮設住宅の住人が直面する問題についてお話しいたき、参加者からもプロジェクトとしてどのような関わり方が可能かなど活発な質問が出た。

その後、再びディスカッション。今回は、イスラエル・パレスチナの学生と関わるうえでの心構えや、第三者である日本人として両紛争当事国の学生たちの「仲介者」となる可能性、そしてその意義に焦点が当てられた。話し合いの結果、日本人としてどちらにも肩入れせず、彼らの声に耳を傾けることの大切さを再確認



した。また、被災地でのボランティア活動を通して、同じように犠牲者が出る悲しい悲劇でも、東日本大震災とイスラエル・パレスチナの紛争では「天災」と「人災」という観点では大きな違いがあるということ、すなわち、イスラエル・パレスチナで起きていることは人の手で止めることができるという可能性を感じてもらいたいという、積極的な合意が参加者の間で生まれた。

午後には、プロジェクト中に使う可能性の高い、平和・紛争関係の専門用語などの英単語を確認し、より密度の濃いコミュニケーションをとれるよう準備した。

さらに、同日テルアビブで事前研修を行っていたイスラエル・パレスチナの参加者とテレビ電話により、顔を見ながら自己紹介をした。

最後に、大槌町での交流会及び JICA での最終報告会にて行う日本文化を象徴する出し物を話し合い、ソーラン節を踊ることに決定した。

7月21日(月)

午前 前回不参加だった参加者を含めた自己紹介  
ソーラン節練習

午後 イスラエル・パレスチナの現状確認  
「花は咲く」練習  
イスラエル・パレスチナ側参加者とテレビ電話

第2回目の事前研修では、第1回研修に参加することができなかった参加者を含め、改めて顔を合わせた。

ソーラン節について、フォーメーション変化など、より複雑で完成度の高い踊りを発表できるよう、改めて時間をとり練習をした。

午後には、当時、日々状況が悪化していた両国間の紛争の様子を確認し、プロジェクトが無事に実施できることを祈った。

また、日本語、英語、アラビア語、ヘブライ語で歌う予定の復興応援ソング「花は咲く」を2部に分かれて合唱練習を行った。

最後に、イスラエル・パレスチナ側参加者の数名と個別にテレビ電話で会話し、安全を祈っている旨を伝

えることができた。

## 事後研修

プロジェクトが終了してから約一カ月経った9月13日(土)に事後研修を行った。

午前 近況報告

プロジェクト振り返り

午後 現地スタッフ・ステラによるプレゼンテーション  
イスラエル・パレスチナ参加者とテレビ電話  
来年以降のプロジェクトを良くするための提案

プロジェクト終了から約一カ月が経過し、事後研修が開催された時期には、それぞれが新たな学期や活動を開始していた。そのため、時間が経ってから客観的にプロジェクトでの経験を振り返った結果や、その後にした別の経験によって発展させた思いを発表し合うことができた。

最終報告会での発表に用いた動画を改めて視聴し、プロジェクトの活動内容を振り返った。各プロジェクトについて、良かった点、改善すべき点など、率直な思いを話し合った。

昼食後は、現地に4年間居住した経験のあるスタッフのステラがここ数年のイスラエル・パレスチナ間の紛争状況についてプレゼンテーションをした。プロジェクト中、明るく振る舞っていた、いまや家族のような彼らが実際にはどれほど辛く、厳しい状況の中で生きているのかを詳細に理解したことで、日本側参加者一同、今回のプロジェクトの成功に改めて感謝の念を抱いた。

その後、時差の関係で朝を迎えたばかりのパレスチナ参加者とテレビ電話を繋ぎ、1カ月ぶりに顔を見ながらの会話を楽しんだ。

最後に、今年度のプロジェクト運営に関し、参加者の視点から改善すべき点などを率直に意見交換がなされた。ここで挙げられた意見は、来年度以降のプロジェクトの改善に活かされる予定である。

## 2. Preparatory Seminar for Japanese members

by Natsuki OBA

Two pre-seminars held in Tokyo, on June 21-22 and on July 21 at JICA Tokyo International Center.

### The first preparatory seminar in June:

#### Saturday, June 21, 2014

Morning : Self-introduction;  
Explanation of the NPO and the Project;  
DVD about past years' projects.  
Afternoon : Presentation by a participant from the proceeding year's project;  
Presentation by participants about Israel and Palestine;  
(History of Middle East / Separation Wall / Settlement / Peace Negotiation / Perspectives of International Society);  
Participants' Discussion "What is the meaning of volunteering?"  
Brief lecture by Mr. Kiwa Fukushima, Chief Priest of Zenko-ji Temple and part of the committee of the project.

#### Sunday, June 22, 2014

Morning : Documentary about the Great Earthquake in 2011;  
Skype with a staff member of Caritas Otsuchi;  
Participants' Discussion:  
"Why do we have a project with participants from 3 different countries?"  
"What's our role in the project as Japanese?"  
Afternoon : English conversation practice;  
Skype videoconference with Israeli and Palestinian participants;  
Discussion on the Exchange Event in Otsuchi-cho;  
Song Practice.

#### Day 1 :

At first, we had an ice-break moment when all the participants introduced themselves and talked about what made them decide to join the project. Then, Ms. Hiroko Inoue, our president, explained about the inception of the NPO and the process through which the project reached the current form. DVD helped the participants deepen the

understanding of the project.

After the introduction part, Ms. Futaba Shinohara, a former participant, made a presentation and explained the activities done the previous year. She also mentioned how all the participants were able to build a close relationship.

After the lunch, each participant made a presentation on a topic, which was assigned before the seminar. Those who had been to Israel and Palestine during the spring project "Study Tour" showed some pictures they took and explained what they learned in the tour. On the other hand, those who had not been to the two countries showed their points of the presentations from a rather academic point of view.

Then we moved to the discussion, trying to find a common answer to the question regarding the meaning of volunteering. Our diverse thoughts converted into the following answer: volunteering can never be done in one way, but it is an act that gives something to both volunteers and those who the volunteer work is dedicated.

At last, Mr. Kiwa Fukushima held a lecture on what it means to help each other. His talk even emphasized the point on which participants agreed in the previous part.

#### Day 2 :

On the second day, our learning went deeper to the point of what we can do as main subjects of actions in the project.

In the morning, we talked on Skype about the current situation of the disaster area with Mr. Kataoka from Caritas Otsuchi.

Then, we discussed the role of Japanese participants, who could possibly be mediators between Israelis and Palestinians. Active opinion exchange led us to a conclusion: Japanese participants need to be neutral in terms of the antagonistic situation in the Middle East. We also hoped that Israeli and Palestinian participants could recognize the difference between two tragedies: the Great Earthquake in Japan and the conflictive history of Middle East, considering that the latter could be stopped by our own effort.

In the afternoon, we learned English technical

terms used in Israel and Palestine, so that we could have deeper and more fruitful conversations.

Then, we had an opportunity to talk to Israeli and Palestinian participants who were having a pre-seminar session in Tel Aviv on the same day via Skype.

At last, we talked about the performance for the exchange event in Otsuchi-cho, and decided to perform Soran dance as representative of Japanese culture.

## The second seminar in July:

### Monday, July 21, 2014

Morning : Self-introduction;

Soran dance practice.

Afternoon : Update about the situation of the Israeli-Palestinian conflict;

Song Practice;

Individual Skype videoconference with Israeli and Palestinian participants.

At the second pre-seminar, some participants joined the group for the first time. After the ice-break talk, we practiced Soran dance once again to make our performance more accurate.

In the afternoon, we updated our knowledge on the situation in Israel and Palestine, which was deteriorating day by day at that time and prayed for the success of the project.

We also practiced the memorial song of the Great Earthquake "Hana-wa-Saku – the flowers will bloom" in Japanese, English, Arabic and Hebrew.

At last, had another Skype conversation with some of the Israeli and Palestinian participants individually.

## Post-Seminar

On September 13, after almost a month since the end of the project (on August 16), we held the post-seminar.

### Schedule:

Morning : Update of participants' life after the project;

Reflection about the project

Afternoon : Presentation of the past conflicts between

Israel and Palestine by Ms. Stella;

Skype with Israeli and Palestinian participants;

Suggestions for the improvement of the project in the future.

It had been almost a month since the project officially ended when we reunited for the post-seminar on September 13. Since the participants got involved in different activities and the new semester had started for some of us, we could reflect about our project with fresh eyes. The video with the pictures of the project helped us look back at what we achieved and learned from those two weeks.

After lunch Ms. Stella, who used to live and work in Israel and Palestine for four years, made a presentation to explain the conflict. We could appreciate once again the success of the project and that our Israeli and Palestinian friends looked very happy and cheerful during the project in Japan, despite the hard life in their countries.

Then, we enjoyed the conversations over Skype with Israeli and Palestinian friends.

At last, the participants made some proposals for the improvement of the future projects. The opinions shared here will be fully considered by the committee of the project next year.



大槌川河川敷で、菜の花プロジェクトの金山さんが、手作りの紙芝居で、被災当時の壮絶なそして感動的な体験を話してくださった。  
At the riverbed of Otsuchi River. Mr. Kaneyama told his horrific experiences at the time of the disaster and touching episodes with his handmade picture story show.

### 3. イスラエル、パレスチナ人参加者の事前研修

ステラ・ペドラッツィーニ

イスラエル・パレスチナ参加者のための事前研修は、2014年6月19日テルアビブで開催された。

参加者たちは、テルアビブ・ヤッフォの聖ペトロ修道院に9時45分に集合、10時にセミナーを始めた。

まず初めに、「平和の架け橋 in 東北」プロジェクトの概要、NPO「聖地のこどもを支える会」および「ヨハネ・パウロ2世財団」について説明し、そのあと、ビデオや写真やパワーポイントを使って、プロジェクトの詳細について話した。

1. プロジェクトのスケジュール: 集合場所、出発到着、東京から大槌町往復の交通機関、ボランティア活動、分かち合い、ワークショップ、報告会など。
2. 東日本大震災のあらまし: 犠牲者数、被害状況、復興状況
3. 東日本大震災の写真: ロサンゼルス・タイムスの写真による瓦礫撤去前と後
4. 大槌町の状況: 被災前と後の町の状況、地域、経済、漁業、工業
5. 2011年8月のプロジェクトのスライドショー
6. 2012年8月のプロジェクトのスライドショー
7. 2013年8月のプロジェクトのスライドショー  
パワーポイントによるプレゼンテーションの後、参

加者たちは2つのグループに分かれ、日本の震災の状況について、第一印象を語り合った。

昼食後、参加者たちのために、NPO法人の組織と、プロジェクトの詳細(航空券、交通機関、ボランティア活動、ベースでの生活、東京でのスケジュールなど)について質問時間を設けた。また、子どもたちや仮設のお年寄りたちを楽しませるため、また文化交流会のためにどんなプログラムを提案するかなどを一緒に考える時間も作った。

彼らは、テレビ電話を通して、初めて日本の参加者たちに会うことができた。そしてパレスチナ人も、イスラエル人も日本人もそれぞれが自己紹介をしたり、互いに個人的な質問をしたりした。

4時に事前研修は終了。

エルサレムで7月19日に予定されていた第2回目の事前研修は、当時のイスラエル・パレスチナ情勢のために行うことができなかった。緊迫した情勢や、多発する衝突、エルサレムとテルアビブの間を往来する時に予測される危険、参加者自身と家族たちの不安と心配などのために、NPOのスタッフは、セミナーをキャンセルせざるを得なかった。したがって、追加の情報は、各自にEメールで送られた。

### 3. Preparatory Seminar Israeli & Palestinian members

by Stella PEDRAZZINI

The first preliminary seminar was organized for Israeli and Palestinian participants on Saturday 21st of June 2014 in Tel Aviv.

The participants gathered at 9.45 a.m. to start the seminar at 10 o'clock in the hall of Saint Peter Monastery in Jaffa – Tel Aviv.

After explaining about the "Peace Bridge for Japan" project in general, about the NPO "Helping Children in the Holy Land" and about the Foundation "John Paul II", an overview of the

project was made thanks to the support of videos, pictures and a power point presentation:

1. Project schedule: meeting point, departure, arrival, transfer Tokyo - Otsuchi, volunteer activity, transfer Otsuchi - Tokyo, sharing and workshops, Symposium.
2. General Overview of the Disaster: casualties, damages and recovery.
3. Japan earthquake and tsunami: before and after

the cleanup. Photographic reportage published by the Los Angeles Times.

4. Situation in Otsuchi-cho: information about the town, society, economy and industry before and after the disaster. Video shot during the tsunami from Mt. Shiroyama in Otsuchi-cho.

5. Photo slide show of the project held in Sendai in August 2011.

6. Photo slide show of the project held in Otsuchi in August 2012.

7. Photo slide show of the project held in Otsuchi in August 2013.

After the power point presentation, the participants were divided into 2 groups and shared their feelings and first impressions about the video and the situation in Japan.

After the lunch break, the participants had time to ask questions regarding the organization and the details of the project (Flight, transportation,

volunteer activities, life in the base camp, time in Tokyo, etc.) and to think together about which kind of activities they could propose for entertaining children, for elderly people living in the temporary houses and for the cultural exchange event.

The participants met for the first time their Japanese friends through a Skype video call. All the participants – Japanese, Israelis and Palestinians – introduced themselves and answered some personal questions.

At 4 o'clock the meeting ended.

Due to the ongoing situation in Israel and Palestine it was not possible to have the second seminar as scheduled, on the 19th of July in Jerusalem. The clashes and the tension that characterized that period, the potential danger of moving between Tel Aviv and Jerusalem and the concerns of the participants' families, made the NPO's staff call off the seminar. All the additional information was sent to the participants by email.

## 4. チャリティーイベント

浅野 耕二

### イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ ——音楽とビュッフェのつどい

7月19日、「平和の架け橋 in 東北」プロジェクトのためのチャリティー・イベントとして、東京の四谷で「イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ」を開催した。まず初めにイスラエルとパレスチナ双方の犠牲者の為に全員で黙祷を捧げた。即時停戦が行われ、暴力の連鎖と流血が止まりますように。当日は駐日イスラエル大使館の外交官がご出席くださり、またイスラエルやパレスチナの方も来て下さった。

イベントのプログラムとして、ソプラノ歌手の家田紀子さん、ピアニストの瀧田亮子さんによる素晴らしい演奏が披露された。華麗なソプラノとピアノの演奏で心を解きほぐされ、感動のひとときを過ごした。コンサートの後には、パレスチナ料理店「アルミーナ」のオーナー・シェフ、シャディさんによる美味しいビュッフェ。イスラエル・パレスチナでの定番料理のファラフェルやフムスを始め、日本では珍しい料理は、参加

の皆様大変ご好評をいただいた。

このイベントを成功に導いてくださった多くの皆様に感謝申し上げます。



シャディさんによる美味しい中東料理  
Delicious Palestinian dishes made by  
chef Shadi Bashiyi.

## 4. Charity event

by Koji ASANO

### “Israel - Palestine - Japan friendship night”

On 19th July, we held a charity event in Tokyo for the “Peace Bridge for Japan” project. First of all, we offered a moment of silent prayer for the victims of both Israeli and Palestine. No more violence! No more blood-shed! We had the honor of attendance of a diplomat of the Israeli Embassy in Japan and an Israeli and a Palestinian were with us.

Ms. Noriko IEDA (Soprano singer) and Ms. Ryoko TAKITA (Pianist) willingly offered performance. The hall was almost full with the audience. We enjoyed the brilliant and splendid soprano and wonderful Piano. After the concert, we offered to the audience a buffet of Palestinian food made by Mr. Shadi BASHIYI, owner of “AL MINA”, Palestinian restaurant. The buffet consisted of the most popular Israeli / Palestinian dishes: Falafel, hummus, etc.

We would like to express our gratitude to all.



イスラエル大使館の外交官ニール・ターク氏と井上弘子理事長。  
Mr. Nir Turk of Embassy of Israel and Hiroko Inoue of “Helping Children in the Holy Land” .



司会を務める篠原双葉  
Futaba Shinohara, Japanese participant, acting as MC at the  
“Israel - Palestine - Japan Friendship Night” .



家田紀子さんによる演奏。  
Performance by Ms. Noriko IEDA

# 4 プロジェクトの経過 Daily Reports of the Project

## 経過報告

川橋 天地

### 第一部 大槌町での活動 8月5日(火)～11日(月)

#### 8月5日(火)

イスラエルのテルアビブ空港飛び立ったイスラエル、パレスチナの若者たちは、5日午前中に東京駅で日本人グループと合流、夕方5時半に大槌町のカリタスジャパン大槌ベースに到着した。30時間以上の長旅だった。到着早々のミーティングでは、現地スタッフの亀岡さんから達者な英語で、ベースでの生活の心得について細かな説明がなされた。テレビ電話以外では初めて直接会って話した私たちはすぐに仲良くなり、プロジェクト成功に向けて一致団結して動き始めた。

#### 8月6日(水)

実質的に活動初日となった2日目は、車で旧町役場をはじめとする、震災以前の町の中心地を訪問した。英語でかつて町がどのように広がっていたか、津波がどのように襲ってきて人々の命を奪っていったのかを皆真剣に聞き入っていた。

午後はカリタスベースに戻ってみんなでシェアリングの時間。イスラエル・パレスチナの学生たちが自らの経験を絡めて大槌町の印象を語っていた姿が印象的だった。その後、旧町役場の保存に賛成派、反対派、中立派の3者のグループ分かれてディスカッションを行うUNゲームに挑んだ。それぞれが、そ

れぞれの決められた立場にしたがって議論していた。

#### 8月7日(木)

大槌川の河川敷で菜の花畑を作っていたら金山さんのプロジェクトに全員で参加。金山さんが自作の紙芝居で震災直後の様子を生々しく語ってくださった。美しい川が津波の被害で瓦礫の山となり、多くの人々が地元の学校に避難し、互いに助け合っていたこと、高校生たちが小学生たちを助けて率先してボランティアを行っていたことなどだ。

その後、河川敷清掃活動に参加し、皆で川遊びをした。震災ボランティアで来ているのに遊ぶのは不謹慎に思えるかもしれないが、震災以前の本来の川の姿に戻りつつあるということなのだろう。

ベースに戻った後は、みんなで近所にお住まいの及川ご夫妻のお宅に訪問し、震災直後の様子のお話を聞いたり、一般に公開されていない津波のビデオを見たりした。及川ご夫妻は遠い異国の地から来たイスラエル・パレスチナの学生たちにとっても親切に接して下さり、みんな真剣に話に聞き入っていた。改めて津波の怖さを感じた。

#### 8月8日(金)

大槌小学校を訪問し、子供たちと交流した。私



大槌川で菜の花プロジェクトの作業の合間に休憩。この河川敷には、数多くの犠牲者のご遺体が流れ着いた。  
Break during the work for Nano-hana Flower Project (planting field mustard) at Otsuchi River. Many victims were washed ashore to this riverbed.

私たちは模擬店の売り子として参加し、子供たちと仲良く遊んだ。お昼ご飯では、大槌ベースの方々が作ってくださったあんかけ焼きそばを食べながら交流した。そのさなか、モール、ワシーム、ニコラスの3人がウクレレで即興バンドを組み、歌った様子にみんな大喜びであった。

午後は車で公衆銭湯に。イスラエル、パレスチナには銭湯がないため、初めての経験に大満足の様子。夜には手巻き寿司パーティーをした。イスラエル・パレスチナの学生は本場の寿司に大喜びで、日本文化を感じることの多い一日であった。

## 8月9日(土)

大槌町内で行われるイベント「大槌ありがとうロックフェスティバル」に、要員ボランティアとして参加、車の誘導を中心に地元の人々と交流。仕事以外の時間は、アーティストの演奏を聴いたり、屋台でほたてや牡蠣を食べたり充実した時間を過ごす。ボランティアをする中で、地元出身のボランティアの方から、震災当時の様子や、地元の名産品のお話などを聞く機会があり、とても有意義な時間だった。イスラエル・パレスチナの参加者も地元の海産物に舌鼓を打っていた様子。

夜には交流会のための歌やダンスの練習。交流



菜の花プロジェクトのために河川敷整備  
Cleaning up and maintaining the riverbed for Nano-hana Flower Project.

会準備に本格的に取り組んだ。

## 8月10日(日)

大雨が降り続く中、夜の交流会に向け、朝から準備に大わらわ。前日、大雨のため列車が遅れて夜遅くに到着したパレスチナ料理店主のシャディさんが、交流会場の桜木町保健福祉会館内の調理場で陣頭指揮を執り、大人組が手伝ってパレスチナ料理の準備。若者たちはダンスなどのリハーサルに励んだ。

交流会では、地元の郷土芸能「向川原虎舞」「白澤鹿子踊り」を地元の若者たちが披露、日本人グループは「南中ソーラン」を踊った。大雨が降る中、100席ほど用意した会場はかなりの人で埋まって



いた。

「花は咲く」の合唱が終わると食事の時間。中東の料理を珍しそうに味わい、質問する姿があちこちで見られた。終了近くには盆踊りの輪ができ、地元のお年寄りの「押してー、押してー…」などの音頭に合わせてイスラエル、パレスチナ、日本の若者たちも輪に加わっていた。海外組は、着せてもらった浴衣が気に入ったようだったし、似合っていた。

## 8月11日(月)

大槌町での最終日は午前中、仮設住宅を訪問して、住民の方々と風船バレーを楽しんだ。お年寄りも子

供も皆一緒に、大きな声を出して思い切り体を動かす楽しいひと時であった。一番元気なはずの私たち若者も汗だくになって、本当に楽しい時間であった。

午後はお花をプランターに植えたり、及川ご夫妻宅を訪れお別れのあいさつなど。花は後に、現在整備中の避難路に移され、私たちのプロジェクトの名前が付くとのこと!! 及川ご夫妻は私たちを再び温かく迎えてくださり、奥様お手製のプレゼントを全員にくださるなど、親切な心配りに皆心を打たれた。

次の活動地東京へ向け、夜11時ごろ、夜行バスで大槌町を出発した。

## 第二部 東京での活動 8月12日(火)～17日(日)

JICA 東京国際センターでの1日は以下のようなものであった。

7:30 朝食

9:00 午前の活動:

ワークショップ/ミーティング/シェアリング

9:15-10:30 休憩

10:45 午前の活動続き

12:15 昼食

13:30 午後の活動:

ワークショップ/ミーティング/シェアリング

15:00-15:30 休憩

15:30 午後の活動続き

17:00 東京での自由時間

(JICAでの夕食は18:30から)

22:00 門限

異なる人災である戦争について思いをめぐらせた。午後は自由時間になったので各自観光に出かける。

## 8月13日(水)

午前中は、大槌町でのプログラムを振り返るとともに、印象に残ったことを語り合った。まずは4つの小さなグループに分かれて、次に大きな輪になって互いの話を聞き共有した。イスラエル・パレスチナの参加者がしきりに、大槌町で受け取ったことや学んだことへの感謝を口にしていたのが印象的であった。

次に、昨日行った東京大空襲の資料館について。まず、大空襲をより深く知るために、グループに分かれてリサーチをした後でみんなの前で発表し合い、そして、また大きな輪に戻って感想を語り合った。井上理事長が、自身が体験した平塚空襲のことも話し、皆真剣に聞き入っていた。

午後は、シミュレーションゲーム。大槌町でも行ったUNゲームと呼ばれるもので、アフリカの難民キャンプでの資源開発事業について、賛成・反対・調停の3つの立場に分かれてディスカッションを行った。

## 8月14日(木)

午前中から夕方までは、ゲームや振り返り作業を

行い、夕方からは自由行動になったので渋谷、原宿へと出かけていった。

この日最初の活動は、イス取りゲーム。このゲームが世界共通だとは知らなかったので、みんなで楽しく盛り上がった。続いて、4チームに分かれての生き残りゲーム。飛行機が極寒の地で不時着したというストーリーで、与えられた12アイテムを重要度に沿って優先順位付けし、正解の順位と合っているポイントを競い合うルールだった。15分という時間でコンセンサスに達するのは本当に難しく、意見をぶつけ合いながらチームの意見をまとめていくのは貴重な経験になった。

続いて、シェアリングの時間。我々が生まれてから今まで、イスラエルとパレスチナの状況は穏やかな時も不安定な時もあった。現地ではイスラエルとパレスチナ両サイドが交わることは非常にまれで、すぐ近くに住んでいても互いの状況を十分に理解しているとは言いがたい。

このシェアリングの時間には、「イスラエルとパレスチナの状況はあなた個人の生活にどんな影響を与えてきたか」というテーマで考えや思いを話してくれた。日本にいてはわからない、さらにこれまでの11日間の楽しそうな彼らの様子からはとても想像できない、心の底からの気持ちを聞くことができた。全てを理解することは難しいかもしれないが、11日間過ごしてきた友人たちの姿を想像してみることができたことが、日本人参加者には貴重な体験になった。

そして最後に、「絆ゲーム」。感謝を伝えたい相手に紐を投げていく。紐が縦横に行き来した結果、大きな蜘蛛の巣のような形になった光景は素晴らしいものであった。

## 8月15日(金)

翌日に迫る報告会の発表準備、レポート作成、そして最後のシェアリングに一日を費やした。まず、

- \* 写真を通し活動内容をプレゼンテーションする
  - \* どんなことを考え、何を学んだのかを自分の言葉でスピーチする
  - \* 音楽に乗せて思い出ムービーを作る
- の3班に分かれて準備にとりかかった。

また、プロジェクト終了後に作成される報告書のためのレポートを各人で書いた。

最後のシェアリングのテーマは「プロジェクトを振り返って」。イスラエル・パレスチナの学生は、母国での状況が悪化している中で、最初は、このプロジェクトに参加するのはやめたほうがいいかもしれないとか、イスラエル人とパレスチナ人は互いに会うのは不安だという思いがあったという。しかし大槌町での生活で家族のように仲良くなり、人とのつながりや平和の素晴らしさを学んだと語ってくれた。帰国後は、周りの人たちに自分の体験を伝えていくという。

日本人参加者からは、何気ない日常の大切さや、若者同士の交流が心を開くことへの実感などが聞かれた。

## 8月16日(土)

午前中は報告会の準備に費やした。

1時から、来場者を迎えるために会場である大ホールでテーブルや椅子、食べ物、国旗の準備を始めた。14時から17時に開催された報告会のプログラムは以下のとおりである。

- ◎挨拶・自己紹介
- ◎参加者によるプレゼンテーション
- ◎ボランティア活動に関する感想披露
- ◎写真と映像視聴
- ◎来場者との分かち合いと交流
- ◎日本人参加者による南中そうらん
- ◎合唱「花は咲く」
- ◎来場者参加型の盆踊り
- ◎閉会

夜には中華料理レストランに向かい、お別れ会が行われた。早朝すぐに母国に帰るメンバーもいたため、名残惜しい中、みんなで思い出を共有しあった。

## 8月17日(日)

最終日に東京周辺で観光と買い物を楽しみ、18日(月)以降、日本人参加者は解散、イスラエル、パレスチナの参加者はそれぞれのフライトスケジュールで帰国した。

## Activities in Otsuchi / August 5 - 11

### **Tuesday, August 5, 2014**

Israeli and Palestinian youth, who left Tel Aviv on August 4, arrived in Japan and met the Japanese participants at Tokyo Station the next morning. It was 17:30 on Tuesday 5 when we reached CARITAS JAPAN Otsuchi Base. It was a long way for them, taking more than 20 hours from home. Immediately after arrival, there was a meeting in which Mr. Kameoka, a staff of the base, instructed about rules of the life in the base. Although it was the first time for us to see each other, except for some Skype talking, we connected immediately, and decided to do our best for the success of the project.

### **Wednesday, August 6, 2014**

On the Second day, we visited the center of Otsuchi Town by car, where there was the core of the town before the earthquake happened. All of the participants listened carefully what Otsuchi town used to be, how the tsunami destroyed it and killed many citizens.

In the afternoon, we came back to Caritas Base and shared our feelings about the visit. It was impressive that Israeli and Palestinian youth expressed their feelings through examples of their experiences back in their countries. We divided then into three groups to play the UN role-playing game on the topic of whether the town hall should be demolished or not. Each group concentrated to play their own roles.

### **Thursday, August 7, 2014**

We took part in the "Nanohana" project, started by Mr. Kaneyama to clean the riverside and plant turnip blossoms (rapeseeds) after the earthquake happened. Mr. Kaneyama explained what happened before and after the earthquake and tsunami through a picture presentation and how the local people helped each other.

Then, we cleaned the riverside and enjoyed bathing in the river. Although it seemed imprudent to play in the river, as many people lost their lives in it.

After coming back to the Base, we visited Mr.

and Mrs. Oikawa's home, and listened to their experiences and watched videos about the tsunami. They were very kind with us and we listened carefully to what they were sharing with us. We felt terror of tsunami afresh.

### **Friday, August 8, 2014**

We visited Otsuchi summer school and interacted with local children. We joined their festival and played with them. At noon, we ate noodle thickened with powdered kudzu made by the staff of Otsuchi Base. During lunchtime, Mor, Nicolas and Wassim played ukulele and sang songs to entertain the children that enjoyed it very much.

In the afternoon, we went a public bath. For Israelis and Palestinians, that do not have them back in their countries, was the first time but they seemed to enjoy the experience. At night, we held a sushi party. They enjoyed very much to eat sushi. It was a typical day to feel the traditional Japanese cultures.

### **Saturday, August 9, 2014**

We participated in the "Otsuchi Rock Festival" as volunteers and interacted with local people. Except during the shifts of volunteer job that lasted about one hour each, we enjoyed listening to bands playing and eating local food. During the volunteer activity, we could listen from the local volunteers about what happened just after the earthquake and about special local products. Israeli and Palestinian youth also enjoyed eating delicious local food.

At night, we had dinner and practiced for the exchange event.

### **Sunday, August 10, 2014**

We held the "Cultural Exchange Party" with people from Otsuchi-cho. Everybody was busy in the morning preparing for the party. Mr. Shady, the owner-chef of a Middle Eastern restaurant, who arrived at the base late the night before, took the lead in cooking Israeli and Palestinian foods. Adult staffs helped him in the kitchen of the Otsuchi Community Center, where the party was held, while



大槌小学校の子供たちと初対面のごあいさつ  
 "Nice to meet you!" to the kids of Otsuchi Elementary School.



大槌町での「文化交流会」で「花は咲く」を、日本語・英語・アラビア語・ヘブライ語で歌う3カ国の若者たち  
 The youth from three countries singing "Flowers will bloom" in Japanese, English, Arabic and Hebrew at the cultural exchange event in Otsuchi-cho.



「大槌ありがとうロックフェスティバル」でテント設営  
 Setting up tents for "Otsuchi, Thank You Rock Festival".

young guys rehearsals of dance, song etc.

In the exchange event, local youth performed Mukogawara Tiger Dance and Usuzawa Deer Dance. Japanese volunteer students performed Soran Bushi dance. Although it was raining heavily, around a hundred chairs were prepared and most of them were occupied.

After the last dance performance and the chorus of "Hana-wa-saku" song, the mealtime started. We saw people curiously tasting Middle Eastern foods and asking questions to the group members. When the ending time got close, Israelis and Palestinians started a ring of Bon dance, joined a little later by the audience and dancing under instruction "push, push, ..." by local old woman. Those who were from abroad were pleased wearing Yukatas that suited them well.

### Monday, August 11, 2014

On the last day in Otsuchi town, we visited a temporary housing and enjoyed playing balloon volleyball. It was an enjoyable event to exercise with elderly people and children living in the temporary housing.

In the afternoon, we planted flowers and visited Mr. and Mrs. Oikawa's house to say goodbye. The flowers we planted will be moved to the evacuating road, which will be named "Peace Bridge Road", after our project. Mr. and Mrs. Oikawa welcomed us again and gave us presents handmade by Mrs. Oikawa.

## Activities in Tokyo / August 12-17

At 11 o'clock PM, we left from Otsuchi-cho on a night bus to Tokyo.

### Tuesday, August 12, 2014

The group arrived at JICA Tokyo international center, in the early morning of Tuesday 12 of August after 9 hours trip by bus from Otsuchi Caritas base camp. Despite the tiredness, a small briefing was held about life and facilities in JICA and about the free time in Tokyo. After we checked-in and drop the luggage in the rooms in JICA, we visited The Center of the Tokyo Raids and War Damage, to learn how catastrophic the air raids were and how Tokyo recovered from the war. We thought carefully about the damages caused by wars are and how different they are compared to natural disasters such as earthquakes and tsunami.

In the late afternoon, a small orientation meeting was organized to explain the rules of the second part of the project and the general program. The days in JICA were organized as follow:

- 7.30 Breakfast
- 9.00 Start morning activities:  
workshop/meeting/sharing
- 9.15-10.30 Break
- 10.45 Second part of morning activities
- 12.15 Lunch
- 13.30 Start afternoon activities:  
workshop/meeting/sharing
- 15.00-15.30 Break
- 15.30 Conclusion of afternoon activities
- 17.00 Free time in Tokyo  
(Dinner in JICA 18.30)
- 22.00 Curfew

### Wednesday, August 13, 2014

In the morning session, we looked back at our project in Otsuchi-cho and talked about the moments that touched us the most. First, we divided into four small groups and shared our feelings. It was so impressive that Israeli and Palestinian youth appreciated what they learned in Otsuchi-cho.

Second, we researched figures regarding the Tokyo air raids starting from the information we had during the visit of the day before. We investigated through documents in the Internet divided into small groups; we shared with other groups the

discoveries and expressed their impressions. Mrs. Inoue talked about Hiratsuka Air Raid she experienced during her childhood, which moved us.

In the afternoon, we played the UN role-playing game again. We divided into three groups and discussed about a sample topic.

### Thursday, August 14, 2014

From morning to evening, we enjoyed games and discussions and then we went to Shibuya and Harajuku.

The first game was musical chairs; despite it is very famous all over the world, Japanese participants played it for the first time and we enjoyed it very much. After that, we divided into four groups and played the "survival game". This game is about a group of people that survived the crash of a small plane in a very cold and isolated place and managed to save 12 items. The task is to put the items they have in order of importance for the survival of the group. It was so hard to agree about the importance of the items, but it gave us good opportunities to conclude on one opinion through discussion.

After the game, we had time to understand more the lives of Israelis and Palestinians through a sharing moment. Since too many years, the relationship between Israel and Palestine is conflicting; in their countries, it is so difficult for them to interact with each other and for this reason, they did not understand the other side.

During the sharing time, Israeli and Palestinian youth talked about how the situation of conflict influenced their daily life. We, as Japanese, listened carefully to their true feelings despite it was something hard to understand as we live in Japan and which we couldn't imagine, even after living together in Otsuchi-cho. Although it was so difficult to understand their feelings completely, it was a very impressive experience for Japanese students to imagine our friends' daily lives.

Finally, we enjoyed the "Bond Game". The participants were sitting in a circle and one of the participants was holding a wire. After thanking one of the participants and explaining why, the wire would pass to the next participant who, in turn, would say something nice and thank another participant. The main goal of this game was to be aware of the pleasant actions of people towards



8月16日支援者の方々への「報告会」でそれぞれの体験を語る。  
Presenting individual experience to the project supporters at the symposium on August 16th.



「報告会」でグループに分かれて、分かち合い。(東京 JICA)  
Sharing in the groups at the symposium (JICA, Tokyo)

us, and to show gratitude for that. At the end of the game, a wire connection was made between all the participants, a connection of gratitude, appreciation and respect. KIZUNA.

### Friday, August 15, 2014

We spent most of the day preparing for the Symposium, making reports and sharing feelings.

First, we divided into three groups to prepare three different activities for the Symposium: presenting our project through power point and pictures, make a presentation including personal feelings about the project and make a photo movie with music. After everyone finished with his own activity, we had time to start writing the report to be included in the present book.

The last sharing theme was "how do you feel just after the project finished?" Israeli and Palestinian youth said that at the beginning they thought they should refrain from participating in this project. Furthermore, some of them were afraid to meet the other side. However, they became friends soon and learnt the importance of the bond and peace. They said also that they would be sharing their "Japanese experience" back in their countries in order to be peace bridges between Israel and Palestine. Japanese participants said that they learnt how daily life is important and how youth interactions are significant.

### Saturday, August 16, 2014

The morning was entirely dedicated to the preparation and organization of the Symposium.

At 1 o'clock the group started preparing the big hall with tables, chairs, food and flags to welcome the guests. The symposium was organized as follow:

- \* Welcome & introduction;
- \* Presentation of the participants;
- \* Explanation and sharing of the volunteer activity;

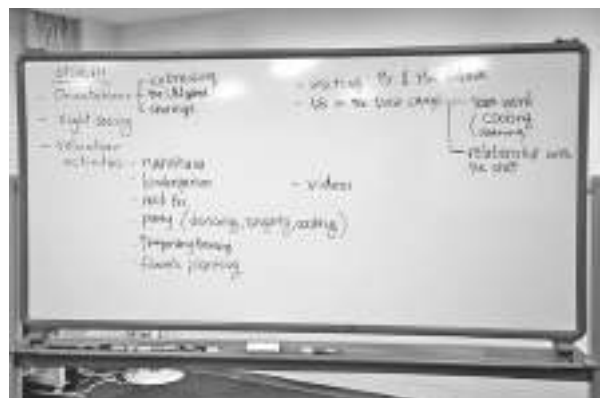
- \* Photos and video;
- \* Sharing and interaction with the public;
- \* Dance performed by Japanese participants: So-Ran;
- \* Song: Hana-wa-Saku;
- \* Dance with the public – Bon-odori;
- \* Conclusion.

At night, we held the farewell party at a Chinese restaurant. Some of the Israeli and Palestinian youth had to go back to their countries early the next morning, so we shared good memories with each other.

### Sunday, August 17, 2014

The last day of the project, three participants left to Tel Aviv while the others enjoyed sightseeing and shopping around Tokyo.

From the day 18, all the participants left according to their schedule.



JICAでのワークショップ。大槌町でのボランティア活動と共同生活について振り返りや分かち合いを行った。  
Workshop at JICA. Reflecting back on and sharing about volunteer activities and community life in Otsuchi-cho.

# 5 収支決算 Balance Sheet

プロジェクト会計報告 (2014年4月~9月)  
Project Financial Report (April 2014 - September 2014)

## 収入の部 Revenues

単位:円 Unit: ¥

| 費目 Line item                | 摘要 Descriptions   | 金額 Amount |           |
|-----------------------------|---|-----------|-----------|
| 支援金等<br>Contributions, etc. | 一般寄付金<br>Private donation                                     | 1,387,521 | 4,585,560 |
|                             | ヨハネパウロ2世財団 寄付金<br>Financial support (John Paul II Foundation) | 654,464   |           |
|                             | チャリティーイベント収入 (総額)<br>Charity event revenue (total)            | 566,399   |           |
|                             | 参加費 学生、スタッフ、他<br>Project participation fees (students, staff) | 482,500   |           |
|                             | READYFOR 寄付金<br>READYFOR                                      | 1,494,676 |           |
| 自己資金<br>Own funds           |   | 12,343    | 12,343    |
| 合計 Total                    |   |           | 4,597,903 |

支出の部 Expenditures

単位:円 Unit: ¥

| 費目                                      | Line item                        | 摘要                   | Descriptions   | 金額        | Amount    |
|---|----------------------------------|----------------------|--|-----------|-----------|
| 旅費<br>Travel expenses                   | 国内旅費<br>Domestic travel expenses | 交通費 (列車、夜行バス、レンタカー他) | Transportation (Shinkansen & train fare, rent-a-car and other travel expenses) | 502,862   | 967,754   |
|   |                                  | 滞在費 (宿泊費・食費など)       | Acommodation (Lodging・Meals)   | 464,892   |           |
|   | 海外旅費<br>Oversea travel expenses  | テルアビブ～成田 8名          | Tel Aviv-Narita for 8 persons  | 1,228,142 | 1,328,142 |
|   |                                  | ミラノ～成田 別便 1名         | Milano-Narita for 1 person   | 100,000   |           |
| 人件費<br>Personel expenses                |                                  | 事務運営費                | Administrative expenses  | 858,000   | 1,203,000 |
|   |                                  | イスラエル・パレスチナ事前準備費     | Preparation in Israel / Palestine  | 235,000   |           |
|   |                                  | 謝礼金                  | Remuneration   | 110,000   |           |
| 会議費<br>Conference expenses              |                                  | 施設使用料                | Rental fee of seminar room & hall  | 39,300    | 232,741   |
|   |                                  | 交流イベント (大槌町)         | Event fee at Otsuchi-cho   | 86,765    |           |
|   |                                  | 報告会 (JICA東京)         | Miscellaneous expenses for symposium   | 4,569     |           |
|   |                                  | 大槌町 (下見)             | Preparation at Otsuchi-cho   | 23,630    |           |
|   |                                  | 事前研修                 | Preparatory seminar  | 61,672    |           |
|   |                                  | 諸準備 (面接・実行委員会)       | Miscellaneous expenses for interviews and executive committee                  | 8,875     |           |
|   |                                  | 事後研修                 | Post seminar   | 7,930     |           |
| 印刷・複写・製本費<br>Print / Copy / Bookbinding |                                  | パンフレット・しおり、コピー       | Leaflets, brochures and booklets   | 2,150     | 402,150   |
|   |                                  | 報告書作成                | Making report  | 400,000   |           |
| 通信・運搬費<br>Communications / Delivery     |                                  | 通信費・宅配費              | Communications / delivery  | 33,629    | 40,629    |
|   |                                  | 報告書発送                | Report shipping  | 7,000     |           |
| 消耗品費<br>Consumables                     |                                  | 各種生活雑貨               | Sundries   | 21,857    | 59,057    |
|   |                                  | Tシャツ                 | T-shirts   | 37,200    |           |
| 雑費<br>Sundry expenses                   |                                  | 振込手数料                | Transfer fees  | 7,416     | 43,856    |
|   |                                  | その他                  | the others   | 36,440    |           |
| チャリティーイベント費<br>Charity event expenses   |                                  |                      |  | 320,574   | 320,574   |
| 合計                                      |                                  |                      |  | Total     | 4,597,903 |



# 6

## 参加者の声

## Feedback from the Participants

### 青年参加者の声 / Voices of the Young Participants



#### モール・ニクソン Mor Nikson

- イスラエル 男・社会人 23歳
- Israeli 23years old Employee

初めはこのプロジェクトに参加することを恐れていた。それは私の国イスラエルで起きている状況、すなわち紛争のためだ。私たちは状況が悪化する前に、何とか1回だけ事前研修開催にこぎ着けた。参加者は皆素晴らしい人々だった。

私たちイスラエル人は、パレスチナ人と初めて空港で出会ったとき、どのように感情を表現し、反応したらよいのか、よくわからなかった。飛行機に乗るまでに、ガザで起きている状況に関していくつか、ちょっとした会話をした。その会話は、自分の意見や考え方が正しいと互いに主張する議論になりうるものだった。ここで両者が気づいたことがある。一つには、私たちは事態の詳細を知らなかったということ。もう一つはプロジェクトが始まる前に、この議論が原因で険悪な雰囲気以最悪の始まりを迎える可能性があったということだ。そのため仲違いしないように、良い化学反応を起こすように、まずは友達になることから始めた。それからは冗談も自然と飛び交うようになった。日本に来てからも新しい小さな家庭を築くように寝食等を共にし、すぐにリラックスして、問題の妥協点を見いだすことも出来た。私たちの出自や言語は関係なかった。たとえ文化が違っ

ても、音楽、冗談、映画等共通の趣味をもち合わせていることがわかった。日本人であろうと、ユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒であろうと、そんなことは本当に関係なかった。

大槌町は私がこれまで訪れた中で、最も美しい場所の一つだと思う。このような美しい場所で大震災や津波の被害が起こったことは考えられない。例えば遠目には町と美しい山々と木々が解け合っていると感じていたが、町役場跡地に近づくにつれ、そこには津波に呑まれた建物の骨組みだけが残されていることに驚いた。

屋上に乗り上げた船の写真で有名なあの場所に自分たちが立ち入り、実際に被害に巻き込まれた人の話を聞いた。報道された津波のビデオも見た。あるご夫婦が撮影した生のビデオも見た。そしてそのご夫妻は私たちを自宅に招待して、あの日起きたことについて説明して下さった。こうして、少しずつ東日本大震災の情報を集めることができた。

NHKの東日本大震災復興支援テーマソング『花は咲く』を、日本語、英語、アラビア語、ヘブライ語の4言語で練習した。人々の苦しみに寄り添うと同時に前向きな気持ちや明るい希望も感じ、この曲を歌うことで心が動かされた。

どんな場面も私たちを一つの集団として関係を強固なものにするために役立った。特に印象的だったのは、大槌川周辺の瓦礫や雑草を取り除いた後に川

に入ったことや、仮設住宅の人々と風船バレーを通じてふれあえた時だ。彼らへの支援として、ただそこを訪れたに過ぎない。それでも住人は喜んでくださったし、感謝していただくことができた。そういうことを通じて、この小さな支援がいかに大切なことかということがわかった。彼らから、そして彼らを感じる幸せという気持ちから、ふだんの生活の中で何があるろうと、立ち向かい続けることを学んだ。

学童保育に行ったときには、子供たちが心を開いてたくさんの笑顔を振りまいてくれたおかげで元気をもらった。私たちは子供たちと歌い踊り、一緒に遊んだ。とても楽しく、彼らにもよい刺激を与えられたと思う。

このプロジェクトは私に多くのものを与えてくれた。まずは日本初訪問であったこと。そしてユダヤ教徒である私にとって、アラブ人やキリスト教徒、日本人と同じ集団に属するというのも初めての体験だった。異なる文化を理解し、学ぶことが必要だった。日本人の多くはハグの文化はないし、私は日本食を口にしたことはなかった。それでも共に生活してみると、想像していたよりも互いによく似ていると感じた。

At the beginning I was afraid of taking part to this project, due to the situation and the war going on back home. We managed to have only one seminar and everyone were nice, but it was held before the situation got worse.

When we first met at the airport, none of us really knew how to feel, how to react or how it was going to be; on the way to the plane there were few, peaceful, small talks about what was going on in Gaza that led us to an argument in which everyone tried to defend his own opinions and thoughts. Both of us, Israelis and Palestinians, realized that we didn't have enough details and that, starting this talking before the beginning of the project, before getting to know each other, could have made us start in a bad way or even compromising the success of the project by taking sides or turning against each other.

We decided instead to try to be friends first, following the good chemistry we felt since the beginning and in this way the jokes came naturally.

So, like starting a new small family, we had to sleep, cook, eat, clean and take care of the

そして最も重要なことは、生涯にわたる友人を作れたことだ。彼らとは貴重な体験や感情、そして忘れられないものを共有した。私たちは本当に楽しむことができた。それは皆がそれぞれの個性を發揮して、「小さな家族」に貢献したからだと思う。私たちは素晴らしいものを築き、大槌の皆さんを援助することができた。

私たちはこれから自国に戻り、ふだんの生活が再び始まる。それぞれが自分の道を歩んでいく。このプロジェクトを通じて、異なる意見をもった人々に対する尊敬と寛容な気持ちを学んできた。一人ひとりに対して、一人の、人間として敬意を表することを学んできた。最初に見たり聞いたりした印象だけで誰かを判断しないことを学んだ。その人の行動や気持ちに隠された意味について、理解することが必要なのだ。生まれ育った場所や宗教、異なる文化とは関係なく、私たちは誰もがとてもよく似ている部分がある。自分の人生に熱意を、生きることへの意欲をもっているのだ。そして世界中の人々への平和を望んでいるのだ。

アーメン。

house together, quickly we all had the good will to participate and to compromise for the cause; it didn't really matter where we came from or what language we were speaking. Even due to our different cultures, we found interesting the fact of enjoying the same things like music, jokes, movies or hobbies and weather we were Japanese, Jewish, Muslim or Christian, it didn't really matter.

Otsuchi is one of the most beautiful places I've ever seen in my life. It was hard to think that in this peaceful place something bad happened. For example when we went to the town hall, which at first glance looked blended with those beautiful mountains and trees, I realized that right in front of me there was a damaged building that survived the tsunami.

Slowly we started gathering pieces as we went to the place where there is the house of the famous picture with the boat on its roof; as we heard the story from people who survived and were actually there, as we saw videos of the tsunami and even as we saw a recording from a couple that hosted us in their house and explained us more deeply what happened.

We learned the song "Hana wa saku" in 4 languages and it was very emotional for me to sing this song dedicated to people's pain but also good will and hope.

All the situations helped us to find the way to strengthen our relationship as a group; I really liked when we jumped in the river, after pulling grass and collecting rocks or when we played volleyball in the temporary housing with the residents. I understood how important it was just to be there to show the residents our support as we succeeded to give them some joy and they were so grateful and respectful; I also learned from them a lot from their happiness and to continue in the struggle for a normal life no matter what.

When we went to the primary school I was full of energies after the children opened their hearts to us and laughed with us; we started singing, dancing, and playing together, and it was so joyful to be there and I could feel I was making the difference to them.

This project gave me a lot; first of all I've never been in Japan before and never been in a group with Arabs Christians and Japanese. I had to learn and understand the different cultures and learned that we are more similar

to each other then I thought, most of the Japanese were not used hugs as greetings and I never eat traditional Japanese food before...

First of all and the most important thing is that I have made new friends for life, we shared precious moments and feelings and it's something you can't forget. We really enjoyed each other because everyone shared his peculiarity and donated it to our little family; we made great things together and helped to show support, care and to help Otsuchi's community.

We are now going back to our houses and to our daily life, and everyone in his own way, has everyone with his own way, has learned a lesson of tolerance and respect towards who is different and may have a different opinion, to be respectful to everyone as persons and human being. We learned not to judge someone at first sight or by his opinion and that we need to understand his behavior and what stands behind his feeling. All of us, despite our different culture, where we grow up or our religion are very similar, with passion for life and will for living and peace is what we want for people all over the world  
Amen.



## ガル・ババ Gal BABA

- イスラエル 女・社会人 23歳
- Israeli 23 years old Employee

プロジェクト期間中、私は多くのことを学んだ。私たちはとても仲良く、温かい家族の中にいるかのように感じていたので、大槌ベースでの生活は快適で楽しいものだった。私たちは異なる文化と生活習慣を持っていたが、まるで何年も互いに知っていたかのように

に、皆貢献し合い、助け合い、一緒に笑ったり料理をしたり、掃除をしたりした。

実際、私たちイスラエル人、アラブ人、日本人は全く互いを悩ませることはなかった。私はプロジェクトの友人たちを平等な人間として、個性ある一人として愛している。一緒に楽しい時間を過ごし、多くの

素晴らしい人たちに出会った。そのおかげで私はとても嬉しく、幸せを感じた。

ボランティア活動でも満足できたし、楽しかった。津波から生き残った人々のさまざまな話を聞いたとき、私は彼らとの強い絆を感じ、そうした状況に自分を置いて想像するように努めた。

菜の花プロジェクトの金山さんのお話を、津波の舞台となった川を背景に聞いたとき、私はとても怖くなった。穏やかで美しい川が大きな破壊をもたらし、人々の心に恐怖を広げている。金山さんは、町の子供たちが、春に美しい黄色い花が花咲く様子を見に川に来られるように、そして皆に希望を与えるために働いていらっしゃった。

小学校でのボランティア活動中では、いろいろな問題をしばらく忘れることができた。私たちは子供

たちが笑ったり幸せだと感じたりするのを手助けした。子供たちは、興味をもったことに関して私に尋ねるのをためらうことはなかった。私たちは笑いあい、共に楽しい時間を過ごしたが、この同じ子供たちが幼いにもかかわらずとても辛い経験をしたことが思い出されました。子供たちが生きる楽しさを失わず、幸せに育っていることは、私に勇気を与えてくれた。

仮設住宅を訪問しているときには、私は大槌町の真の強さを見た。絶え間なく笑い、笑顔で歌っている愉快な人々が、あの日に家を失ったり、ひょっとしたら家族をも失ったりしている。私たちと仲間として風船バレーをしてくれた人々は、私に何が真の力か、幸せやどうやって苦しいことを忘れるのかを教えてくれた。その日は私にとってプロジェクトでもっとも充実した一日だった。

穏やかな海に面した大槌町で数日を過ごすと、この美しい海が一瞬でなにを起こしうるかを忘れるよ

During the project I learned a lot of things. Life at the Otsuchi base was comfortable and fun because we all got along really well and I felt like we were in a warm loving family. Although we had different cultures and each had different habits, we all contributed and helped as if we've known each other since many years; we laughed together, ate together, cleaned together.

The fact that we are Israelis or Arabs or Japanese did not bother us at all. I love my friends from the project as equal human beings and each one with its individuality. We spent a lot of hours having fun together and I met a lot of great people. This is why I am very glad and very happy.

The volunteer activities were satisfying and enjoyable at the same time. When I heard various stories of different tsunami survivors, I felt an instant connection with them and I tried to imagine myself in their situation.

When I heard the story Kaneyama-San, with the same river of his story as a background, I was terrified. The same quiet and beautiful river caused so much destruction and spread fear in the hearts of people. That brave man works very hard so that the children of the town could come to the river in spring to see the beautiful yellow flowers bloomed and to give new hope to everyone.

うになるかもしれない。私たちが見た震災ビデオは私を現実に引き戻し、何が起きたのかを深く理解させてくれた。海のそばに住み生活し、泳ぎ、漁をしていた人々は、おそらくひどく裏切られたように感じただろう。この穏やかで青い海があの時、行手にあるすべてを破壊した。自分が愛する海がそのようなことをすると想像してみたとき、私の心は傷ついたり、恐ろしさと悲しみで胸がいっぱいになった。それゆえ、私は住民の方々に、楽しいひと時を提供できたことをとても嬉しく思う。

大槌町での経験の後、私は「平和」という言葉が人によって異なる意味をもつのだとわかった。その言葉は私にとっては別の意味を持つ。私にとって「平和」は、他者を理解し、違いを受け入れることを意味している。もしあなたが平和な状態にいるなら、それは周りにいる人たちと共に平和な状態にあるということなのだ。

During the volunteer work held at the kindergarten, troubles were forgotten for a moment. We helped the kids to laugh and be happy. They did not hesitate to ask me questions about things that intrigued them. We laughed and we had a lot of fun together until I remembered that the same children, who was laughing and having fun, went through a very difficult experience despite his young age. It was encouraging to see that they did not lose the joy of living and to grow up to being happy human beings.

I saw the real strength of the people of Otsuchi during the visit at the temporary houses. Those joyful people, who did not stop laughing, smiling and singing, lost their homes and perhaps their families that tragic day. Those people, who were playing balloon volleyball with us as equals, taught me what is real power, taught me to be happy and how to forget. That one was for me the most satisfying day of the project.

After few days in the town, close to the calm Ocean, you begin to forget what this beautiful sea can do in a second. The video we saw brought me back to reality and to a deeper understanding of what happened. Those people, who lived near the sea all their lives, swam, fished and spent time next to it, probably felt very betrayed. The calm blue

sea destroyed at that time everything that stands on his way. When I try to imagine that my beloved sea does this, it hurts my heart and I am filled with fear and sadness. So I'm glad therefore I could give them a moment of joy and relaxation.

After the experience in Otsuchi I realized

that the word "peace" has different meaning from person to person. That word has another meaning for me. "Peace" means understanding the other, accepting the different. If you are in peace with yourself you can be in peace with those around you and everyone else.



## ヘン・シエール

- イスラエル 女 20歳
- Israeli 20 years old

日本に来る前は、津波がどれほど大きな被害をもたらすのかを私はよく知らなかった。大槌町を訪れたとき、私は津波による損壊に驚いた。しかし、私はまだそれがどう起こったのかを理解できていなかった。私たちが市役所にいたとき、なぜ人々は山へ避難する

ことができなかつたのかと、誰かがガイドの方に尋ねたことを思い出す。その方は、津波がおこる前は、その村には家がたくさんあり、まっすぐに進むことができず、山へたどり着くためには大きな遠回りをしなければならなかつたことを想像する必要があると答えた。なぜそれほど多くの人々が亡くなり、なぜ彼らの避難が間に合わなかつたのかを、私が理解し始めたのはまさにその時だつた。

津波の映像を見た後、私は自分自身に問いかけた。「これが私の家族だとしたら？これが私に起こっていることだとしたら？私はどうするのだろうか？」ビデオを見ている間、目から涙がこぼれはじめた。私は、結局のところ私たちは皆人間であるのだと思つた。私たちは皆、傷つくことなく平和に暮らしたいと願っている人間なのだ。

川へ行って、河川敷に菜の花を咲かせる活動をしているある漁師さんの話を聞いた時には、漁師さんが、村の人々のたくさんの遺体と並んで彼の親友の遺体を見た後に、自分のために悲しむよりも何か行動しようと思つたということを知り、私は本当に心を打たれた。このことから、家を破壊され友達を失つた人がどれほどの力を持っていたのかわかる。亡くなった人々を忘れないために花を育てるこの活動に、

## Hen SHER

私は参加することができて嬉しかつた。

雑草を抜き、石を拾う活動の後に、その漁師さんはリラックスするために川へ入つても良いと言つたので、私たちは全員一緒にその川に飛び込み、作業から離れてリラックスした。

大槌小学校にボランティアへ行つた日は、はじめは私たちは子供たちが外国人にどう反応するのか分からなかつたし、交流するための共通の言語を持てなかつた。私たちがボランティア活動を始めてから子供たちが私たちと遊び、話し始めるのに2分とかからなかつた。その光景はただ素晴らしかつた。その活動のおわりには、彼らは走つて私たちに抱き付いてきて、私たちを離さなかつた。その時に、私たちは子供たちを助け、何かを与えているだけではなく、同時に、私たち自身のことも随分助けているのだと分かつた。

大槌町での最後の日に、私たちは仮設住宅を訪れた。そこに到着したとき、私の頭は「津波が起こる前、彼らの生活はどのようだつたのだろうか？」と考えることでいっぱいだつた。到着して仮設住宅を見たとき、それは美しくさえ見えた。その場所はとても清潔できちんとしていた。建物に入つたとき、私たちは少し恥ずかしがりやな4人の小さな女の子に会つた。私たちはすぐに彼女たちに話しかけ一緒に遊んで、朝の体操を教へてもらつた。その後、数人のお年寄りの方々がやつてきて、私たちと一緒に風船バレーボールをした。最初の試合では、私は二人のチャーミングなお年寄りと一緒にプレーをし、他の二人はディマのチームと対戦した。私が疲れ始めても彼らは疲れもなくバレーをし続けていて、私はこの人たちがどれほどの活力を持てているのか信じられなかつた。

私は座って彼らを見ていると、彼らがどれほどゲームを楽しんでいるのかが分かった。なかには隣りに座って私たちに話かけてくれる人もいた。もし私が彼らだったならば、私はこのように生活続ける気力を持ってないだろうと思った。家を失ったり、おそらく家族や親しい友人までも失ったりと、とても恐ろしい体験をした後でも彼らは生活をし、人々と交流し続けている。それを見るのは素晴らしかった。

一人の女性が私たちに、自分は第二次世界大戦が起こっているときには子供だったと話した。彼女は私たちの国の戦争について知っていて、私たちの気持ちを理解し、私たちにすべてがうまくいくように願ってくれた。私は彼女のように、イスラエルからこれほど遠くに住んでいる人が私たちの国の状況について知ってくれているので、とても嬉しかった。彼女が私たちのことを気にかけてくれており、私は感激した。

大槌ベースでの生活は、大きな一つの家族の生活のように感じられた。初めの日、私たちは4つのグループに分けられ、毎日、異なる仕事をした。誰かが協力しなかったり、他の人を助けなかったりということは決して起こらなかった。全員一緒に食事をとることは、大きな一つの家族の中で生活しているように感じられた。まだ知り合っていない人々との共同生活だったが、とても自然に感じられた。またこのプロジェクトに参加する以前は、私はパレスチナ人と話

Before I came to Japan I didn't really know how big a tsunami is.

When they took us to visit the town I was surprised of all the damages done by that the tsunami, but I still couldn't understand how it happened. I remember when we were at the Town Hall, someone asked the guide why people couldn't escape to the mountains; she answered that we needed to imagine that before the tsunami hit, the village was full of houses and you could not run straight, having to make instead a huge detour to get to the mountains. Just then I began to understand why so many people have been killed and why they could not escape in time.

The day after we saw a video and during the video I told myself: "What if it was my family? If this was happening to me? What would I do?" During the video the tears

started pouring from my eyes and I thought that eventually we all are human; we are all human beings who want to live in peace without getting hurt.

When we went to the river and heard the story of the fisherman it really touched me to know that after seeing the body of his best friends with a lot of bodies of other people from his village, he decided to do something rather than feeling sorry for himself; this shows how much strength the person whose house was destroyed and his friend was killed really had, to get up and plant flowers in memory of those who have been killed, I was glad to be a part of it.

After all the hard work of moving the weeds and rocks out of the way, the fisherman told us we could go into a little creek to relax and all of us together jumped

す機会を持ったことがなかった。私は、アラブ人があまり住んでいない、イスラエルの中心地域に住んでいるので、アラブ人の友人もいなかった。ゆえに、私は彼らに会う機会を持たなかったのだ。飛行機に乗る前、私は自分がユダヤ人であるため、彼らが私を非難するのではないかと少し心配していた。しかし、まさに最初の日に、私たちが互いに抱きしめ合い、私たちの年代なら皆が好きなものや、皆がすることといった普通のことについて話し始めたときに、その考えは消えた。

このプロジェクトは、私に自信を与えてくれた。また、結局すべての人々は同じように苦しみを感じ平和を求めているから、両国の間に共生は可能なのだと理解させてくれたと感じている。

私はこの旅からとても多くのことを学んだと思う。もし私がこのプロジェクトに参加していなかったならば、私はパレスチナ側の人々と出会い、話を聞くことはなかっただろうし、彼らは何を考えていてどう感じているのかを知ることはなかっただろうと確信している。パレスチナの側から、彼らが私たちをどのように見ているのかを知ることは本当に興味深かった。

ここにいる私たちは皆、使命感を持っていると思う。両者はいつも考えが一致するわけではなかったにも関わらず、私たちは互いに理解しようとした。一緒に、私たち自身、家族や、未来の子供たちにとってのより良い未来を築いていこう。

into the creek and just relaxed from all the work.

The day after we went to volunteer to a school. In the beginning we did not know how they will react to foreigners, and did not have a common language to communicate. When we started the volunteer work, it did not take more than two minutes before the children began playing with us and talking to us, and it was just amazing to see. At the end of the activities they ran and hugged us and just wouldn't let us go. Just then I realized that we did not only help and give them something, we also helped ourselves quite a bit at the same time.

On our last day in the village we were taken to visit a temporary housing. When we got there I was flooded with thoughts. "How did their lives look like before the tsunami?"

When we arrived we saw the entrance to the structure and it looked beautiful! The place was so clean and tidy and when we entered the building, we saw four little girls who were a little shy. We immediately started talking to them and play with them and they taught us their morning exercises. After that, a few elderly people came to play ball games with us. I played the first game with two charming older people, and two others played against other people and Dima. I could not believe how much energy these people have, when I started to lose my strength, they kept on playing without any problems.

By looking at them while I was sitting, I saw how happy they were and how much they were enjoying the game; some of them even sit on the sidelines and talk to some of us, I thought that if I were them I wouldn't have the strength to go on living like this. After going through something so terrifying, losing their homes and maybe even family members or a close friend, they just continue living and communicate with people and it is an amazing thing to see.

One of the women told us that she was a child during World War II, and she knows about the war in our country and understands our feelings, and she hoped that everything would work out for us. I was so happy that someone like her who lived so far away from Israel knew about the situation

in our country and to know that she cares about us definitely touched my heart.

Life in the Base Camp felt like that of one big family. On the first day they divided us into four groups having different tasks every day. It never happened that someone did not cooperated or helped the others. Having meals all together felt like living in one big family and the symbiosis with people I knew only for few days felt so natural.

Before participating in this project, I never got the chance to talk to a Palestinian.

I don't have any Arab friend because I live in the center of the country where there isn't a large population of Arabs, and so I did not have any opportunities to meet any of them. Before the flight I was a little bit worried whether they were going to judge me because I am Jewish. But that feeling disappeared on the very first day when we all hugged each other and started talking about the ordinary things that everyone likes or does at our age.

I feel that the project has given me confidence and understanding that there can be co-existence between the two sides because in the end, all people felt the same pain, and everybody wants peace.

I believe that I have learned so much from this journey.

If I hadn't participated in the project I'm sure that I wouldn't have met or heard the other side and I wouldn't have known what they think or how they feel; that is something that really interested me. To know how they look at us, from the other side.

I'm sure that each and every one here has a sense of mission and despite the two sides not always agreed on certain things, we tried to understand each other and together build a better future for us, for our families and our children in the future.

# マイス・エルシード Mais ERSHIED

●パレスチナ 女・高校3年生 17歳  
●Palestinian 17years old 12th grade

大槌町に到着してまず印象的だったのは美しい自然であった。大槌町は、完璧な場所に思われた。しかし、私はすぐに、何か欠けているように感じた。パズルをしているときにどうしても見つからない数ピースがあるような、そんな感覚だった。そのピースは、津波が大槌町の方々から奪っていったものだった。私が立っているその場所は3年前、とてつもなく暗く、希望を失った場所で、私が感じていた物足りなさは、幸せ、希望、そして安心という、生きていくうえでなにより大切なものだったと気がついた。

大槌町に滞在し、住民の方とお会いしていく中で、大槌町はもはや暗い場所ではなく、明るい未来への希望をもった街だとわかっていった。そして住民の方は、どんな状況でも、何歳であっても、復興に向かっていく強さがあることもよく理解できた。これらに気づき得たのは、仮設住宅でのボランティア活動のときであった。ご年配の方々と風船バレーボールはとても楽しく、また、辛い経験をされたはずの皆さんがずっと笑顔でいらっしゃったのを見て嬉しく思った。

彼らとの交流によって、それまで自分の生活の一部であったあらゆるものを失うということが何を意味するのか、理解することができたと思う。

大槌町での被災地視察活動は有意義でありながらとても辛いものだった。テレビで見たことのある場所を訪問するのは非常にいい体験であったが、私は各場所で悲惨な津波を体験した人々がどれほど苦しんだかを思わずにはいられなかった。実際に津波が襲って来た時、家族を探している時、家族の無事を確認したいと願う時、持ち物や財産の全てを失った時、実際に経験した危険や起こり得た危険のことを考えた時、人々がどう感じたかを容易に想像できて、私にはとても辛かった。

津波被害のたくさんの写真や映像を見ると、ガザでの状況を考えずにはいられなかった。瓦礫や失われた物、愛する人々の奪われたいのちの数々……。大槌町の津波被害も、ガザの状況も、どちらもとても悲しいことであることに違いはない。しかし、両者の間には大きな違いがある。ガザは人が作り出した喪失や悲しみに苦しんでいる。自然をコントロー

ルすることはできないが、人は自分の行動を選び、人の命を尊重することができるのである。

このプロジェクトは、国境を超えた大きな善意の輪であり、その輪をさらに大きくしていきたいと思う。私たちパレスチナ人とイスラエル人は復興のために助けを必要とする日本の方々を支えるべくやって来た。そして、ボランティア活動を通し、パレスチナ人とイスラエル人は共に働き、平和の橋を架け、一つ屋根の下に暮らし、共に生きることは可能なのだと知った。大槌町の方々を笑顔にし、復興への希望と強さを与えることができたなら、とても嬉しいことだと思う。そしてさらに、ここからも善意の輪が大きくなっていくことを願っている。

アラブ人である私は、以前にもユダヤ人の友人と交流したことはあった。私は、2歳の時にユダヤ人とアラブ人の子どもが共に通う幼稚園に行き始めて以来、平和を創る旅を始めたといえるだろう。そして「ハンドインハンド」という、同じくユダヤとアラブの共同学校に12年通った。自分以外の人を尊重し、受け入れることの価値を教えられながら育った。パレスチナ人でもイスラエル人でも、関係ない。国籍でその人自身の価値を判断されることがあってはいけないのである。人は必ず他者を尊重しなければならない。これまでさまざまなプログラムに参加し、何年もそのような考え方や価値を周囲の人に伝えてきた。これからはその活動を止めることはない。いつか、全ての人々が他の人を見て「あの人はイスラエル人だ」「この人はパレスチナ人だ」というのではなく「目の前にいるこの人も、自分と全く同じように人間なんだ」と言える日が来ることを願っている。

このプロジェクトに参加する以前は、この活動がこれほど楽しいものだと想像すらしていなかった。最も素晴らしく、私の人生に影響を与えた2週間だったといえる。パレスチナ人、イスラエル人、日本人、さらには愛すべきイタリア人も含む、国籍を超えた





特別な家族となる新しい友人たちとすぐに仲良くなった。みんなで誰かを支えること、みんなで素晴らしい時間を過ごすこと、私たちが経験しなかった悲しみにさらされた人々に何かをもたらすこと、それらすべてが有意義な経験だった。このプロジェクトで私

The first thing I noticed when I arrived Otsuchi-cho was the beautiful nature. Otsuchi-cho looked like a perfect place to live in. Such a peaceful place. But I realized that something was missing; there was a piece in the puzzle that I couldn't find. A piece that the tsunami took away with everything that people of Otsuchi-cho have ever owned. After a while I realized that the place I was standing in was a really dark and hopeless one 3 years ago and that the piece I was looking for to complete my puzzle was one the most important ones: the one representing happiness, hope and safety.

During our stay in Otsuchi-Cho and the meetings with the residents of Otsuchi-cho I realized that the town does have hope for a better future and that they are strong enough to rebuild their lives no matter what and no matter how old they are; I realised it during one of my favorite volunteer work at the temporary houses. I enjoyed very much to play volleyball with and against seniors, I had so much fun and I loved seeing smiles on their faces the whole time, despite everything they have been through at their age. While playing with them I understood the true meaning of losing everything you have ever had in your entire life.

I loved and at the same time hated sightseeing in Otsuchi-cho. I loved living the places I once saw broadcast on television, but I hated it too because I always remembered the sufferings of the people who've been through the horrible tsunami. I hated being able to imagine their thoughts at the moment when the tsunami hit, looking for family members, wanting to make sure all are alive and safe, losing everything you owned, thinking about the danger you were in and that maybe that one could have been your last moment.

Seeing the different pictures and videos, made me think of the situation in Gaza, the wreck and the amount of losses, whether talking about belongings or beloved ones. Although both cases were really sad there was a major difference between them, the power of nature. Gaza suffers from losses and sadness caused by human beings. We can't control the nature, but people can control their actions and respect the lives of other human

個人は、世界のどこにいても助けを必要とする人を支えることができる人間へ成長した。人を楽しませ、笑顔にすることほど気持ちのいいことはない。ぜひ、これを読んでいるあなたも試してみてほしい。失うものは何もないのだから。

beings.

I think that this project is a big international circle of good actions and paying them forward. We Palestinians and Israelis made our way to Japan to help people who needed it in rebuilding their lives and by that we realized that we can work together, that we can actually build a peace bridge and share the same house and live together. I hope that us putting smiles on the faces of Otsuchi-Cho residents will give them hope and strength to rebuild their lives and pay our help forward by helping other people in need and so on.

As an Arab, this is not the first occasion to spend time with Jewish friends, my peace build journey started at the age of 2 years old by going to a mixed kindergarten that has Jewish and Arab kids together, and by attending "The Hand in Hand" school for 12 years. I was raised in an environment where respecting and accepting the other human beings is an important value. It doesn't matter if you're Palestinian or Israeli, no one has to be judged for the nationality or religion. People respect the others no matter what. I've been taking part in different programs, I've been spreading this value for years and I'm not going to stop it now; hopefully one day, we are all going to look at each other and say "oh, he's a human being exactly like me" instead of saying "oh he's a Palestinian" or "oh he's Jewish".

I never assumed that being part of this project would make me so happy. These have been two of the most amazing and influential weeks of my life. I made new friends who instantly became part of a very unique family, a big international family that includes Palestinians, Israelis, Japanese and a lovely Italian. It felt so good to help people all together, share special moments together and bring back something to people who weren't as lucky as we are, at a certain point of their life. I think that this project made me a better person, someone who will help others in need, anywhere in this world. I realized that making people happy and putting smiles on their faces gave me the best feeling in the world. Try it; it won't hurt you, I promise! :)

# ワシム・アラミ Wassim ALAMI

●パレスチナ 男・高校生 17歳  
●Palestinian 17years old 12th grade

2011年3月11日に日本で起きた大震災と津波について私が初めて耳にした時、驚きはしたもの、なにか特別な思いを持つことはなかった。しかし、岩手県大槌町で1週間のボランティア活動を体験した今、自然の持ち得る力がどれほど大きいのか、そしてあの美しい波がどれほどの被害をもたらしたのかを知った。私たちは4メートルの波が町全体を襲い、数秒のうちに全てを消し去ってしまう映像を見た。それはとても恐ろしいものだった。私は未だに、このような事態が自分の家族に起きたらどうなるだろう、と考えている。そして、あの悲惨な状況は、ガザでの状況と重なる。

大槌町を含む東北地方で起きた惨事とガザでの惨事の唯一の違いは、前者が自然災害である一方、後者は人の手によって引き起こされているということだ。もちろん大槌町の方々はたくさん苦しまれたはずだが、今でも彼らがより安全な土地へ移り住むことより、災害が起こり友人や家族を亡くしたその土地に住み続けることを望んでいるという事実は衝撃的だった。

ボランティア活動は大変ではあったものの、楽しかった。そして、集団行動や相互の助け合いなど多くのことを学んだ。なにより、人生には山や谷もあるということを理解した。

私は17歳だが、学童保育で20人以上の子供たちを笑顔にすることができた。彼らが必要としていたのは安心や愛を感じる抱擁であり、抱擁によって

"When I first heard about the earthquake and Tsunami that occurred in Japan, on Friday 11th of March 2011, I was surprised but did not have any special feelings. Now that I spent a week volunteering in Otsuchi, I realized how amazed I was by the power of nature and how such beloved and beautiful waves may cause an immense destruction.

We have watched videos showing how the four-meter high wave took over the city and made it disappeared within seconds.

All of this got me scared. I still wonder: "what if this happened to my family?" It reminded me of the situation in Gaza.

子供たちは私たちのことを覚えていてくれるかもしれない。抱きしめるといっては些細な行為だが、その抱擁が子供たちを幸せな気持ちにさせたのだ。

仮設住宅訪問では、同じように、ご年配の方々に笑顔にすることができた。

そして、最終日にはプランターに花を植えた。これから作られる避難経路にはプロジェクト名をつけた桜の木が植えられ、このプランターが樹々のあいだにおかれるという。これを見て住民の方々は、たった1週間で家族のようになることができた私たちをこれからも覚えていてくれるのではないだろうか。共に笑い、食事を作り、掃除をし、たくさんの時間を共にした私たちへご褒美だと思う。

平和とは、とても力強い言葉である。ある人が「意思のあるところに道はある」と話していたように、自分たちが意思を持って平和を実現することが重要なのだと思う。私たちみんなが、敵だとすら思える相手と話し、歩み寄り、そして相手をゆるすことができれば、平和は実現するかもしれない。

今回の2週間の経験は、自分がいかに恵まれているかに気づかされたという意味で私の人生を変えた。人は変わることができる。その事実こそが、平和を実現するうえで最も重要なことだと思う。

The only difference is that the tsunami is a natural disaster while the war on Gaza is a man-made damage that can be stopped.

The suffering on Otsuchi residents' faces is obvious. It's inspiring to see how they still have hope and their will to live in this place where disasters happen and where they have lost friends and family members instead of going to a safer place.

The volunteer work was hard, but fun. We have learned a lot: how to work in groups, to always support our team and most importantly, we've seen the dark face of life.

As a 17 year old, I was capable of making more



than 20 children smile, during the visit at the kindergarten. All they needed was a simple hug that made them feel safe and loved, that would make them remember me, remember us. Although it was a small gesture, it made them happy.

By visiting the temporary housing, we managed to make elderly people smile this time.

I believe the flower planting was a gift for my mates and I. It is their way to thank us, to remember me and my friends who became like a family and whom I laughed, cooked, cleaned and

shared memorable moments with.

Peace is a strong word. It is important to achieve it by ourselves as someone once mentioned: "when there is a will there is a way".

If we all communicate with our enemies, if we compromise and if we are able to forgive them, we might achieve peace.

This experience will change my life for the better, for it made me realize how lucky I am. People can change, and that is one of the main keys to achieve peace.



## ニコラス・ガザウィ Nicolas GHAZZAWI

●パレスチナ 男・高校生 17歳  
●Palestinian 17 years old 11th grade

私の姉はこのプロジェクトにすでに2度参加した。イスラエル人とパレスチナ人が、それぞれ苦しみがありながら、津波の被災者の方々をお手伝いするこのボランティア活動について、姉から聞いた時から私も参加したいと思っていた。私は参加可能な年齢の17歳になる

のを心待ちにしており、ついにその時がきた。私は大槌町の人々を手助けしに行くチャンスをつかみ、パレスチナから来た若者としてどれくらい役立てるのかを考えた。2014年8月5日(火)、私は日本にやってきた。当初はイスラエル人と一緒に作業をするのを不安に思っていた。でも実際には彼らはすぐに私の友人になった。

私の体験を少し分かち合いたい。非常に多くの幸せなこと、悲しいこと、笑えることから泣けることまでたくさんの異なる感情を経験した。小学校の子供たちは、私の幼い時の出来事や、いつでも無邪気に幸せでいることの大切さを、美しい笑顔で思い出させてくれた。仮設住宅でラジオ体操や風船バレーをしているとき、私は被災者の方々を笑わせたり、幸せな気分させたりすることで彼らを手助けしたと思うので、ある意味いい気持ちだった。でも、同時に被災者の方々の笑顔によって、彼らと同年代の、亡くなった私の祖母とその笑顔を思い出したことで、肉親を失う辛さを思い、とても悲しく感じた。

しかし、人生は続いていくものだし、愛する家族を失った後でも自分の人生は前に進んでいき、また家族はそれぞれの道を歩む。これこそが人生なのであり、常に幸せでいられるわけではないのだろう。例えば、私たちが訪れた旧町役場にも、津波が襲いかかり、そこに集まっていた120人のうち生き残ったのは15人だけだったと聞いた。私はとても衝撃を受け、120人がいのちを失う要因はなんだったのかと自問した。恐怖心で彼らは逃げられなくなってしまったのだろうか。どうしてだろう。

2日後、海のそばでロックフェスティバルがあったが、そこは津波に襲われた場所だった。私たちは駐車場でフェスティバルに来た車の整理を手伝った。共通語なしで地元の日本人とどれくらい交流できるのか、興味深かった。また、ダンスをしに来たのにステージの前でためらっている人たちをどのようにダンスに巻き込んでいけるかわかったのも、面白かった。彼らはただ誘われるのを待っていたのだ。

大槌ベースでの生活に関しては、我が家にいるように感じたというしかない。私たちはどこから来たかや、どのような関係にあるかにかかわりなく、小さな家族のようで、ともに料理をし、掃除をし、時間を共有し、雑魚寝をした。私がそうした時間を後になってとても懐かしく思うだろうと強く確信している。

ボランティア活動の最後に、山への新しい避難経路の一部が「平和の架け橋」と命名されて、両脇には私たちが植えたばかりの花のプランターが置かれるだろうと聞いて、私はとても嬉しかった。

次に、JICAで過ごしたプロジェクト第2部に関して話したい。東京への帰り道、私は、それがこのプロジェクトの中でどういう位置づけなのか、「ボランティア活動」は終わったのに、JICAで何かすることが残されているのだろうかという疑問に思っていた。

大槌町でのボランティア活動の間、私たちはお互いの関係に悪影響を与えたくなかったので、紛争に関して話さないようにしてきた。しかし東京に到着してから、2日目のプログラムが始まってすぐ、私たちは相手側であるイスラエルの苦しみについて聞き、私たちの側の話を聞いたことがないイスラエル人に私たちパレスチナの話聞いてもらう機会があった。私たちが互いの話を中断することなく、ただ尊敬をもって聞き、理解しあうこのやり方は、本当に素晴らしかった。この体験のシェアリングの時間をもつことができ、私はよりいっそうイスラエル参加者のこと、彼らの考え方や苦しみを尊重し、理解できたと思う。

概して、JICAでのプログラムは楽しかった。なぜなら素晴らしいアイスプレイングゲームを通して、自分たちの気持ちを共有し、互いをよく知り、互いの絆を深め、人間性に気づかされたり、聞いたり分析したり話したりする力を養うことを、学んだからだ。私は多くのことをこのプロジェクトから学んだと思う。より良い人格を構築すること、自分のコミュニティの中でより良い人になること、理解をさらに深めること、しゃべるよりもまず聞くことなど。

一つ付け加えておきたいことがある。もっと前に述べておくべきだったが、少しためらいがあった。それ

Since the time I heard from my sister about the volunteer work of helping the survivors of the tsunami to overcome their tragedy and losses, by seeing Israelis and Palestinians united to help them despite the problems and tragedies we go through, I really wanted to be part of this project. I was waiting to turn 17 to be accepted, so the time I strongly wished, finally came. I had the chance to do my share in helping the people in Otsuchi, for how much is possible to do as a young boy from Palestine. On the 5th of August 2014 I was there, anxious to start my work hand in hand with my Israeli fellows, who quickly became my friends.

I would like to shortly share my story with you; I experienced plenty of different feelings from happiness to sadness, from laughs to tears. I felt very happy when we were volunteering

は東京大空襲戦災資料センターを見学した時、私はまるでガザについての博物館を訪れているような気がしたということだ。残念ながら、第2次世界大戦中の東京の写真の第一印象は、ガザの市民の犠牲に関してインターネットやテレビで見たニュースでの写真を見た時と同じだった。

そのうえ、私は、この戦争によって殺されたイスラエルの市民にも重ね合わせた。誰も自分自身を神とみなすことはできないし、神に与えられた他人の命を奪うことはできない。

ご存じのように、今、イスラエルではアラブ人とユダヤ人の間で問題があり、そのため私は正直に言うところな難しいプロジェクトは実現不可能かもしれない、キャンセルされるかもしれないとずっと思っていた。幸い、このプロジェクトは実現し、イスラエル人とパレスチナ人との間で絆や深い人間関係を構築できるという希望を取り戻させてくれた。

私は、これから平和を伝えていく者として、私の住む社会や国で、最大限努力をしていきたいと思う。私はこのプロジェクトがこれからも続けられ、イスラエル人とパレスチナ人との間の平和に貢献してほしいと望んでいる。また、「平和」とは、籠の鳥のように閉じ込めておくべきものではなく、外に出て自由に羽ばたいていく必要がある。プロジェクトで「平和の種」をもらった私たちは実りの多い人間へと成長し、家族や友人や学校で平和を広めていかなければならない。ありがとうございました。

with the summer school kids, as they reminded me about when I was child and how beautiful it is to be innocent and happy all the time, with a beautiful smile on your face no matter what. When we were at the temporary housing doing the morning exercises and playing volleyball I felt good somehow, because I was helping someone suffering, by trying to make him happy and smile; at the same time seeing them smiling and laughing made me feel very sad as I remembered my grandmother (that was around their age), her smile and her laugh, and knew how hard it is to lose someone so dear. But life goes on and, as I moved forward with my life after I lost my beloved ones, they found their way of going on. This is life and you can't be happy all the time; for example, when we went sightseeing and we were standing

in the exact place where the tsunami happened, I was told that only 15 of the 120 people were gathered at the town hall survived. I was shocked and I asked myself what were the reasons that stopped those 120 people from surviving the impact? Was it fear that made them unable to escape? Why?

After two days there was a rock festival next to the sea, in another place hit by the tsunami. We went there as a volunteer group to help the way of cars to the parking of the festival; in my opinion it was interesting to see how we were able to communicate with the Japanese local volunteer without having a common language to speak. It was also fun to see how we were able to involve the few people that were attending to come dance with us in front of the stage, as they were just waiting for a push to have fun.

As for the life at the base camp, I have to say that I felt like at home; we were a small family, cooking, cleaning, sharing time and sleeping together no matter where we came from or what was our relation; I am pretty sure that I will miss those moments very much. To conclude with the experience of the volunteer work, I was so happy to hear that a section of the new escape route to the mountain will be named "Peace Bridge for Japan" and that on its sidewalks there will be the flowers we planted on our last day.

I would like now to talk about the second part of the project we spent in JICA center. On our way to Tokyo I was wondering how this part of the project would be, the volunteer work was finished, what was still left to do in JICA? During the volunteer part in Otsuchi we were all keeping ourselves from talking about the conflict as we didn't want it to affect our relationship; once we reached Tokyo and started our second day's activities, we had the chance to hear the other side sufferings, and to let the Israelis, who never heard our side of the story, listen to us. It was really amazing the way we listened to each other without interrupting, simply listening, respecting, understanding; the staff was afraid that it would create problems between us but I for me, this sharing moment made me respect and understand more the Israeli participants, their way of thinking and their sufferings.

In general the program in JICA was fun as we shared our feelings and played together beautiful ice breaking games that really helped us to get to know each other more, to strengthen the bond between each one of us, to discover our personalities and to improve the ability of listening, analyzing and then speaking. I think I gained a lot from this project: to build my personality better, to be a better person in my community, to be more understanding and to always use my ears before my mouth.

I would like to add one thing, which I should have mentioned before, but I hesitated a bit: at the Center of the Tokyo Raids and War Damage, I felt like I was visiting a museum about Gaza. Unfortunately the first impression I had when I saw the pictures of Tokyo during the war was the same I had looking at the pictures on the social media or watching the news about the loss of all the civilians in Gaza, in my country. My respect goes also to all the Israeli civilians who were killed because of this war; nobody has the right to make himself God and take the lives of others that was given by God. As everybody knows now there are problems between Arabs and Jews in the state of Israel and I honestly thought that this project would be very difficult, or even impossible to realize, I was expecting it to be cancelled at any moment. Fortunately the project took place and I think it gave us back hope that it is always possible to rebuild the bond and relationship between Israelis and Palestinians. I will try as much as I can to be a peacemaker in my society and then in my country, I hope; and I hope this project will continue and succeed in making peace between Israelis and Palestinians. I also hope that we, the seeds of this project, will grow being fruitful people, to spread peace among our families, friends and schools because peace is like a bird that can't be kept in a cage; it needs to go out and fly to be free. For this reason, peace is a word that needs to be freed from just being in our hearts, it needs to go to the others. Thank you, Nicolas.

# ディマ・タドロス Dima TADROS

●パレスチナ 女・大学生 20歳  
●Palestinian 20 years old Sophomore,univ.

## A notion with more angles

日本で、私たちは短いながらも充実した日々を過ごした。それは、「平和の架け橋プロジェクト」の私たち全員にとって、一生ものの体験だっただろう。最初から最後まで、私たちの助けを必要とするかもしれない人々へ小さな親切をするために、チームとしてどのように共働するのかを学んだ。大槌町にいる間、そこに住む人々と一緒に、いくつかの活動に参加した。コミュニティのための清掃の手伝いから、学童保育の子どもたちを楽しんでもらうこと、仮設住宅で暮らすお年寄りに決まりきった日常から脱してもらったことだった。そして、大槌町の大切な人々との感動的な活動の数々も忘れない。大槌町での滞在の最中、個人的な気づきがあった。それは。真の幸せと満足感を体験するためには、時に他人を第一に考えることがとても大切であるということだ。真の幸せと満足は他の人々に喜びを与え、私たちの心を彼らに開くことによるのみ得られる。

平和の架け橋プロジェクトは、私たちの心に世界をより偏見なく理解するための橋をかける土台

## A notion with more angles

Our few yet very rich days in japan were definitely a life experience for each and every one of us in the Peace Bridge Project group. From start to finish, we learned how to work together as a team in order to do simple acts of kindness for people who might have required our caring support. During our week in Otsuchi, we got to engage in several activities with the people living there: from helping to clean a field for the community, to bring joy to kindergarten children and breaking the daily routine of elderly people living in temporary houses, not forgetting other several touching activities with the precious people of Otsuchi. In the midst of it all I personally discovered how important it is sometimes to put the others first, in order to experience the true happiness and satisfaction that comes only through providing the joy to others and opening our heart to them.

であると私は考える。言い換えると、私は他人の視点からの話に耳をかたむける機会を得、さらに彼らの立場にたって考えることができたのだ。結果として世界は私が思っていたよりも広いということに気づくことができた。そして結局、私たちは全員ただ「人間」である、ということを感じることができた。私たちは皆、語るべき話を持っていて、そしてこの一つきりの世界を共有しており、喜びと苦しみを通して私たちは結びつくのだ。

ある賢者がかつてこういった。「太陽は全ての人々に与えられる。それはわずかな人々だけを照らすのではない。ゆえに、自然が私たちの身分や状態に無関心であるのと同様に、私たちは私たちが全員平等であることを知る必要がある。私たちは変わらないことに目を向けることが必要なものであって、強い風によって吹き飛ばされてしまうようなことに左右されることはない」と。

The way I see it today, Peace Bridge is the foundation for building a bridge to our minds, to help give us a more open-minded interpretation of the world. In other words I actually got the chance to listen to others' standing points for once, and to be in their shoes even for a second. Consequently, I am now more aware that the world is larger than what I might perceive of it after all, and in the end we all are simply HUMANS; we all have a story to tell and we all have an entity in this world yet, above all, through our joys and sufferings in this life we get united.

And as a wise person once said "The sun was given to all. It does not shine on the few. So, just as nature is indifferent to our station or situation, we need to know that we are all equal. We need to focus on the things that are constant and not place our values on things that can be blown away with the next great wind."





## 舎川 春佳 Haruka TONEGAWA

●社会人 23歳  
●Japanese 23years old Freelancer

ほかの参加者たちが、訪問した岩手県大槌町の美しさや人々の温かさ、平和の大切さや3カ国の若者の共同生活と交流についてはたっぷり良い事を書いているだろうから、私くらいは少々斜に構えてもよいだろうと、本音を書いてみることにする。

今回のスタディ・ツアーで得

たのは、私が参加前に期待も予想もしていなかったことばかりだった。期待していた事とは、ボランティアによって東北の被災地に貢献したという充実感や、イスラエル・パレスチナの若者の、ぶつかり合いを経ての相互理解だ。しかし震災から3年後のほんの短期の被災地訪問で大きなことなんてできず、イスラエル・パレスチナの若者たちは日本行き飛行機の中で互いの間の問題について話さないと決め、その話題なしに仲良く日本で共同生活をし、大きな議論も巻き起こることはなかった。そのような不意打ちを食らった私はプロジェクト中間々とするはめになったが、そこから得た結実は紛れもなく尊いものであった。

勉強会のため自腹で何度も上京し、楽しいボランティア活動を少しずつ体験し、ツアー出発当日、突然任命された写真係の、あまりわかってもらえない精神的肉体的疲労を感じ、充実感と責任感と虚無感の狭間で考えたのは「利他心」についてだ。何が人に無償で行動させるのだろうか。楽しそうな皆の後ろから前からいそいそと撮った写真を、睡眠時間を削って編集し発信する中で、私は「与える」ことに疲れ始めていた。どうして私ばかりと、どす黒い気持ちが渦巻いたこともこの際告白しておく。確かに今回、私は努めて与える側に立ったかもしれない。しかしふと周りを見れば、大槌町の及川夫妻やロックフェスのスタッフの方から多くの親切をいただいた。日本ではあまり感じることはない、少々暑苦しい(しかしそれが心地良い)西洋・中東流の愛情表現も受けていた。私の作品への手放しの賞賛や、皆で味わう料理の数々だって一つひとつ感謝すべき恵みなのに、どれだけのものを受け取ってきたかを考えずして不満ばかり生みだしていたのだ。

東京に帰ってきてからの最後のシェアリングの場面で、マイルスが言っていた「これからもっとボランティア活動に関わりたいと思う。もちろん何も求めずに。私たちは、ボランティアができるほどに恵まれているのだから」という言葉は、私の心に直接飛び込んできて、ぐさりと刺さり、そのまま留まっている。今回の大槌町訪問で私たちは、ごく平穏な日常生活を享受するありがたさを再認識させられたはずだ。その気持ちを忘れるわけにはいかない。

また、アイデンティティについて考えさせられた。ユダヤ人は今回3人いたが、それぞれ家系の出自が違い、容貌も違う。それでも同じユダヤ人を名乗る。それだけでも日本人という、明確なアイデンティティが保持できる民族との違いに驚くのに、何気ない会話の中でユダヤ人の歴史について「もうこれは一種の呪いだと思う」という言葉を聞いた時には日本人である私には想像できないものを彼らは抱えているのだと感じた。

一方イスラエルでユダヤ人の隣人の中で育ったパレスチナ人は、学校のクラスメイトや隣人とは快適な関係を保つものの、壁に書かれているパレスチナ人への攻撃的な言葉を日常的に目にするなど、自分が周りとは違うという事を否が応でも認識させられるという。本当のイスラエル人ともパレスチナ人とも言い切れないその立場に置かれたら、私はどう感じるのだろうか。未だにわからない。

そして、イスラエル・パレスチナ問題が他人事ではなくなった、ということ最後に挙げたい。私は動画制作と写真編集に追われて、ツアー期間中にレポートを書き終えることが全くできず、しかもツアー後は燃え尽きて灰のようになり、その回復期間を経てこれを書いている。その間にも参加者同士では連絡をとりあっており、ある日帰国したメンバーから、「自分のすむ町にミサイルが落ちた」とSNSに書き込みがあった。もうそれを見た瞬間、心配でいてもたってもいられなくなった。これが、井上さんの言う「他人事ではなくなる」感覚だろう。あの人があそこにいる…もし彼・彼女が、もし事件に巻き込まれたら、と思うとそれだけで辛い。他人事でない感覚をもつと同時に、彼らは毎日このような思いを抱えて生きているのだと実感

した。井上さんの言うことは結局正しい。友人には幸せでいてほしいと願い、そのために何かしたいと思うのが人の性だ。ただ、それをどう具体的に昇華させるかは、私たち若い参加者が自分の頭で考えてこれからの行動に拠るのだろう。悶々とさせておいて、それを解消したいがゆえに行動を自発的に起こさせる、というのが井上さんの真の狙いなら、それでいい。敢えてその思惑のなすがままになろうと思う。

2週間、ただただ楽しい青春の時間が過ぎていった。思い返してまばゆく思う。これから先、全員が同

I expect that the other participants have already written very beautifully about the scenery and the warmth of the people in Otsuchi town, Iwate, about the preciousness of peace and about the beautiful sense of community and cultural exchange, that three countries' youths (4, counting Italian staff Stella) have built during our time together. I am not going to try to duplicate their efforts. Instead, I want to give you what I hope is a unique perspective, by sharing an honest account of my inner thoughts, and the ways in which this tour defied my expectations- I greatly benefited from this tour, but not in the ways I expected. The things I expected were to feel a sense of fulfillment and contribution by doing volunteer activity in the damaged area in Tohoku, which I had not been to for 3 years after the earthquakes and the tsunami and to support mutual understanding between Israeli and Palestinian participants through hard discussion about their countries' issues. However, this turned out not to be the case as our stay in Tohoku was too short to accomplish anything big and the Israelis and Palestinians were already on good terms with each other when we met in Tokyo. On the airplane on their way to Japan, they mutually decided not to discuss the conflict and throughout the project, we lived and worked happily together without any dispute. I was initially somewhat disappointed that I did not have the opportunity to make a difference, but later the experience yielded precious and unexpected fruits.

My experiences got me thinking about "altruism." I spent a lot of money and time to reach Tokyo various times for the pre-study part of the project; I experienced various easy and fun "volunteer activities" in Otsuchi town; and had the fatiguing but fun experience of being suddenly nominated as the official photographer for the tour

じ場所に集結することはないかもしれないが、ふと雨上がりの緑を見たとき、テレビで大槌町が、イスラエルが、パレスチナが取り上げられたとき、私はきっと彼らを思い出す。共に過ごした日々を想いを馳せながら、再び日常生活への感謝を思い出し、友人たちの幸せを願う。私たちのツアーが大槌町やイスラエルやパレスチナに与えたインパクトなんて微かなものだ。しかしこの経験は、人として大切なことを日々呼び覚ます鍵として、私の、そして参加者皆の心に残り続けるのだろう。

on the morning of our departure. What makes people work as volunteers? Frankly speaking, I was getting tired of "giving" while taking photos of my friends enjoying themselves with my high spec but heavy DSLR, and sacrificing sleep in order to edit and upload the photos on the Internet. Why do I have to give so much more than the others do? However, I realized I had been fully repaid by the participants with passionate hugs and earnest compliments on my work, by the old couple having invited us all to their house in Otsuchi town, and by the staff of Otsuchi "Thank-You Rock Festival" with their candid sharing of their real experience during the short time we spent together.

All of the dishes we tasted together and the serene, beautiful scenery of Otsuchi town were also blessings, but I did not realize how much I was given and I just complained. At the final sharing session of the workshop in Tokyo, a girl said, "When I get back to my country, I am going to volunteer as much as I can because I am so blessed that I have opportunities to volunteer." The words came to my heart directly and stuck there. The experiences in Otsuchi have taught us that. We should not forget it.

Moreover, the project made me think about identity. There were three Jewish participants, all of different origin and appearance. It was a wonder for me to see that they all identified themselves as Jews because Japanese people have a homogenous appearance and it is easy to distinguish Japanese from other people. In addition to that, one of them once said in casual conversation that the history of Jews is a sort of a curse - to hear that made me realize that I, as a Japanese person probably have no idea of the burdens they carry with them. Meanwhile, a Palestinian with Israeli nationality told me she grew up with Jewish neighbors. She interacts with



classmates and neighbors in Israeli culture without thinking about the person's race. At the same time, however, she is constantly reminded that she is different from the surrounding people by offensive anti-Palestinian graffiti on the wall. If I were she, and could identify myself as neither genuine Israeli nor genuine Palestinian... I cannot imagine how I would feel.

Finally, let me tell you that the Israeli-Palestinian conflict is no longer "somebody else's affair" to me. Due to my work editing and compiling photos and video from the tour, it is now after the completion of the project that I am writing this report. Even now, the participants still keep in touch with each other on social networks. One day a person in Israel wrote, "2 missiles struck near my house last night but we are all safe." As soon as I saw the post, I got so worried about my friends in Israel. Ms. Inoue, the president of the NPO, earlier told us it is important to take the notion "never-someone else's problem" to our heart in order to build peace. She is right. Thinking of our beloved people in the conflict area

makes me feel very uneasy. This feeling also made me realize that they live with this kind of feeling every day. It is human nature to will happiness for the people we love and to feel like doing anything for the sake of their peaceful life. However, if we actually want to achieve that peace and happiness, the youth of our generation must apply our minds to the issues we face and turn that sentiment into concrete action.

Those 2 weeks were purely joyful time and I feel dizzy when I remember those days. TV and other media will remind me of the Israelis and Palestinians with whom I became close. Again and again in my daily life, I will remember with gratitude our time living together in the Tohoku area and I will continue hoping for the happiness of all the people I met there. We had little impact on Otsuchi or peace building between Israel and Palestine. Nevertheless, the experience will remain the participants' minds as a key to recall the essence of human happiness.



## 川橋 天地 Tenchi KAWAHASHI

- 大学3季生 21歳
- Japanese 21years old Junior, univ.

今回のプロジェクトに対する感想を述べさせていただく前に、イスラエルとパレスチナ情勢が深刻な緊張状態にある中、プロジェクトを支援してくださった関係者の方々にはじめに感謝申し上げたい。開催が危惧されるほどの情勢ではあったが、無事に例年どおり

全員来日し、大槌町でプロジェクトを行えたことは大きな意味をもっていたと思う。

私が参加しようと思った理由は、中国留学から帰国直後で、日本での生活を再開するにあたり、この夏、今一度「震災復興」と「戦争」について向き合いたかったからだ。「震災復興」は、以前何度か訪れていた東北被災地域がどのようになっているのか、現地の方々はどのような思いで暮らしてらっしゃるのかを知り、少しでも力になりたいと考えたため、「戦争」は紛争相次ぐイスラエル・パレスチナの学生と交流し、報道が相次ぐパレスチナ問題について、生の声を聞き、

深く知りたいと考えたからである。

「震災復興」という点では、大槌町の完全な復興にはまだまだ途方もない時間がかかると改めて実感させられた。大きな瓦礫はもう片付いていたが、以前訪れたときと同様に建物は基礎部分以外津波でほとんど流され、一部の建物を残してその跡地が広がっている様子が非常に印象的だった。震災から3年半という月日が流れていても、未だに町の復旧作業は大きくは動かず、被災者の方々は終わりのない不安を抱きつつ仮設住宅暮らしが続く。月日の経過とともにマスコミでの報道は非常に少なくなり、なかなか改善されていかない状況が、震災を風化させてはいけないという気持ちを強くさせた。

一方で、仮設住宅や小学校、菜の花プロジェクト、大槌ロックフェスティバルなどで地元の人々と交流し、話をしていくにつれ、大槌町の地域コミュニティの絆の強さ、人々の温かさを感じ、希望も感じた。仮設住宅の人々は私達の参加した風船バレーのようなイベントで積極的に交流し、都会のような希薄な人間関係ではなく、隣近所が家族ぐるみで付き合う様子や強

いつなかりに気持ちを動かされた。また、私たちが参加したロックフェスティバルのボランティア活動は、地元の若い人たちを中心に運営されていて、大槌町の町おこしや震災支援への感謝を表明しようとする姿が印象的だった。私が一緒にボランティアをした地元の方は、高校卒業後20年近く都会で暮らしていたが、地元で貢献したいという気持ちから昨年戻ってきて運営に携わっている方だった。地元を活気づけたいと奮闘している彼らこそが震災復興の担い手となる人たちであり、その姿に私まで勇気づけられた。イスラエル・パレスチナという遠くの国から来た若者を温かく迎え入れてくださり、震災当時のことを語り、平和な日常生活を送ることの大切さを語ってくださる様子はとても感動的だった。

「戦争」という点では、東京に戻ってきてからの東京大空襲戦災資料センター訪問や、イスラエル・パレスチナの学生たちが語る故郷の様子が、現代の日本と大きく違う世界で心に強く残った。イスラエルやパレスチナの様子はテレビやネットのニュースくらいでしか知らなかったが、イスラエル・パレスチナの学生が語

Before stating my feeling about the project, I would like to thank all of the people involved in it. Although the relationship between Israel and Palestine is under extreme tension, all of the Israeli and Palestinian participants could visit Japan and take part in the whole program. I owe this success to you.

The reason why I participated in the project is that I wanted to face the recovery from the earthquake and warfare, after the exchange program I had in China. I wanted to visit again the places affected by the earthquake and tsunami, to learn how it is the situation now and contribute to help the local people. In addition, I thought it was a good opportunity for me to interact directly with Israeli and Palestinian students. I had never met Israelis and Palestinians before, so I wanted to know better what happened in their countries.

From the point of view of the recovery from the earthquake, I felt that it took so much time to reconstruct Otsuchi-cho after the earthquake happened. Although big amounts of debris were taken away, almost all of the buildings and houses were wiped away by the tsunami. Only the basements of the houses are left in Otsuchi-cho, as the last time I visited. Three and half years passed since the earthquake happened, but the recovery

るところによれば、検問によって学校に通うにも何時間も余計にかかり、自爆テロの危険から人ごみは避けるように生活しなければならないという。仲良くなった人たちの語る日常生活であったため、より強く印象付けられた。私は、他の多くの日本人と同様に今までイスラエルやパレスチナについてはほとんど縁がなく、授業やニュースで目に触れることはあってもやはり遠い世界の出来事としか考えられなかったので、その状況が急に身近に感じられた。日本も東京大空襲のような第二次世界大戦で悲劇を経験したが、そうした悲劇も過去のこととして忘れ去られつつある。しかし、イスラエル・パレスチナをはじめとする世界各地で起きている紛争や戦争は決して過去のものではなく、同世代やそれよりもっと幼い子供たちも含め、今でも多くの人々がこうした悲劇に巻き込まれたり、ひどく心を傷つけられたりしている。日本で普通に暮らしていたら知らなかったことを、イスラエル・パレスチナの学生たちの話をとおして実感させられたことが、今回の大きな経験の一つであった。

did not advance well. Victims are living until now in temporally housing. As the time passes, the mass media stopped broadcasting news related to the earthquake and tsunami anymore. Memories of the earthquake are gradually fading, but local people have to keep living in severe condition. I felt I should not forget this tragedy even if mass media stop broadcasting it.

Meanwhile, when I met and interacted with local people in the temporary housing, the elementary school and the rock festival, I felt there were strong connections within local people that is helpful to rebuild the town. Indigenous people living in temporally housing often participate in activities to make strong relationship with their neighbors. They treat their neighbors like family members; they support each other and their community. I was moved by their strong bonds. Furthermore, in the rock festival, the young people that are managing it impressed me. They took part in it as volunteers in order to contribute to make their hometown vital and to express appreciation for the supporters. The man I did traffic control with said that he worked in Tokyo for 15 years after graduating from high school, but last year he came back to Otsuchi to contribute to the recovery of his hometown. The younger generation growing up in Tohoku must be playing an

important role in reconstructing former towns. They warmly welcomed our volunteer visitors from Israel and Palestine, explained what happened in March 11 and told us how important daily life is. I was moved by their attitude and by the strong ties within the local community.

Regarding the warfare, I was strongly shocked when Israeli and Palestinian participants talked about their daily life. After we visited Tokyo Air Raid Museum, they said they have to take 2 hours for an inspection every day in their country. They have to refrain from going to the crowd to avoid suicide bomb attack. Although I knew what happened in Israel and Palestine through Japanese newspaper or

TV, their experiences were so lively that they made me feel like close incidents. Japan also experienced tragic moments during World War II, but Japanese people gradually forgot this history. However, there are so many conflicts and wars not only in Israel and Palestine but also all over the world. Many young people and children are involved in these tragedies, hurt by them physically and psychologically. Since I did not have opportunities to hear about such experiences in Japan, interacting with Israeli and Palestinian students reminded me such serious realities. It was one of the biggest experiences for me to learn what peace is, through Israeli and Palestinian friends.



## 中尾 有希 Yuuki NAKAO

●大学3年生 20歳  
●Japanese 20 years old Junior, univ.

本レポートでは、第1に被災地を訪れて感じたこと、第2にイスラエルとパレスチナの若者たちとの交流を通じて考えたことを記す。

大槌町に到着してまず感じたことは、「東京と時間の流れが違う」ということだ。東京に住んでいると、もう震災があっ

たことを思い出させるようなことはほとんどない。少なくとも、私の周りにいる人々は、震災の前後で生活が変わった人はほとんどいない。けれども、大槌町の様子は、かなり違った。被災した建物がそのまま残っていたり、工事が進んでおらず更地がたくさんあったりして、時間がものすごくゆっくりと流れている気がした。「ここはまだ震災の中にあるのかもしれない」と思わされた。特に印象的だったのは、釜石の公衆浴場へ行く途中で見た、いくつもの瓦礫の山だ。集めたものの、それ以上処理は行われなかったらしい。ただ忘れ去られたように静かにそこにある様子が、復興は進まないのに人々の意識から消えてゆく、震災そのものの行き場のなさや重なって、とても切なくなった。

被災地を訪れて感じたことがもう一つある。それは、初めて「個」が見えたということです。テレビや新聞による情報は、被災者の個々にフォーカスするものではない。よって、一つひとつの人格は、その唯一無二

な性質を消されて無機質な記号でしかなくなってしまう。しかし、被災地へ赴いて、建物を見たり、被災者の体験談を聞いたり、被災直後の生々しい写真を見たりすると、亡くなった1万5千人以上の人々、いまだ行方不明の人々、大切な人も物も奪われた人々のそれぞれに、ストーリーがあったということがわかる。この感覚は、イスラエルのホロコースト記念館を訪れたときと同じだった。「犠牲者 600 万人」というただの数字の中に「顔」を見つけてあげるのだ、と記念館のガイドが話していたことを思い出す。私が大槌町で経験したことは、それと同じだった気がする。特に、前述したように、震災が歴史の一部になりつつある中で、もう一度震災を見つめなおす大切な機会になった。

大槌町においては、イスラエル、パレスチナ、日本の関係はなく、全員が被災者の悲しみに思いを馳せ、一日も早い復興のために心を合わせて祈った。みんなで一緒にふざけて大笑いしたり、うるさくして怒られたりもした。しかし、JICAに帰って来て、彼らの話をゆっくり聞いてからは、彼らは紛争地から来たのだということを実感した。特に、個人の紛争に関する体験のシェアリングでは、個人差はあれ紛争によって影響され、恐怖を感じながら日常生活を送っているのだということが伝わってきました。生まれてから平和な状態の中に生きてきた日本人の若者は、平和は常に存在し続けるものではなく、努力して維持していくものなのだということを忘れてしまう。

言い換えれば、平和の問題に関して鈍感だ。だから、イスラエルとパレスチナの若者の話を聴くことで、平和な日常の脆弱性と、平和構築・維持の難しさを再確認した。

平和の実現は難しい、だが同時に、2週間けんかも全くなく楽しく過ごせたことは、対個人で良い関係を結ぶことは可能であるということを表している。国、宗教、民族同士の大きな紛争に対しては、私たちは無力だ。けれども、その大きな流れに飲み込まれず

The first thing I realized when I entered the town of Otsuchi was that the flow of time there, was much slower than the one of Tokyo. People living in Tokyo hardly recall about the earthquake. The earthquake did not affect many people's lives. However, the atmosphere in Otsuchi was fairly different. Some of the devastated buildings were kept and there was a vast plain area because of the delay in reconstructions; the view made me feel that the time had stopped since 3.11. I thought that the afflicted area was still in the middle of the disaster. What especially struck me were gigantic piles of rubbles that I saw on the way to the public bath in Kamaishi. They were collected and piled, though quietly remaining there, as they were forgotten. The view of the piles overlapped with 3.11 itself, which is disappearing from people's minds in spite of uncompleted recovery, and I felt really sorry for that.

Secondly, for the first time I was able to see the victims as individuals. Information from TV and newspapers treats victims as a mass and does not focus on individuals. Therefore, each personality loses its uniqueness and is ascribed to meaningless signals. However, by visiting the actual places to see destructed buildings, hearing about victims' experiences and seeing graphic photographs, I could understand that all victims, those who died, those who remain missing and those who lost their beloved ones, had different stories. I remembered that I had the same feeling when I visited the Holocaust museum in Jerusalem this March. The museum guide said: "the aim of the museum is to retrieve the faces of six million victims". What I experienced in Otsuchi might be the same thing, as the attempt of the Holocaust museum. It was a meaningful occasion to remind myself of the disaster, especially when 3.11 is gradually

に、小さな平和を作っていくことはできる。今回のプロジェクト成功はその証拠だ。マザーテレサは、平和を実現したいのなら、帰って家族を大事にしろと言った。まずは、家族、友人間でのささやかな平和を。そしてそれがいずれ大きな平和につながることを、参加者全員が強く望んでいるし、そのために働くことを希望している。今回のプロジェクトで学んだことはたくさんあったが、厳しい状況下でも希望を見いだせたことが、最も大きな実りであった。

becoming a part of the history.

In Otsuchi, regardless of nationalities, all participants prayed together for the alleviation of grief and the prompt reconstruction of the town. We laughed together, cried together and sometimes upset the staffs together for being too loud at night. In JICA, however, stories that Israelis and Palestinians told us reminded me that they were from a conflict zone. Especially, when they shared their personal experiences of having troubles because of the conflict I clearly understood that their daily lives were somehow negatively influenced, and they led their lives with fear. Japanese youngsters, who had lived in a peaceful environment their whole lives, barely understood that peace is not what naturally exists but it is what should be sustained with great efforts. In other words, Japanese students - of course including me - are insensitive to the issues of peace. Therefore, Japanese participants were reminded of the fragility and preciousness of daily life and the difficulty of making and sustaining peace.

It is hard to realize peace, and yet at the same time, it is possible to build good interpersonal relationships. The fact that there were no fights among the participants during the project proved it. We are too weak to solve huge conflicts within states, religions and ethnic groups. However, we can resist the big flow of hatred and create small peace between persons. Mother Teresa said: "What can you do to promote world peace? Go home and love your family". Let us first create a small peace within our families and friends so that it can grow to a bigger one. All the participants believe in the power of actions and they desire to work for peace in their own ways. Among numerous lessons I acquired through the project, the greatest fruit was the hope for peace we discovered under the current harsh situation.



## 大場 夏希 Natsuki OBA

●大学4年生 22歳  
●Japanese 22 years old Senior, univ.

私は大学で民族紛争や平和学を専門にしており、学問として「紛争解決」に関心を持ってきた。また、これまで何度か震災ボランティアに行く計画を立てたものの実現せずに3年半を過ごしてしまい、これが大学生活で最後のチャンスだと考えた。この2つを主な理由として

本プロジェクトへの参加を決めた。本レポートにプログラムからの学び全てを書き尽くすことは困難だがその一端を記したい。

プロジェクト直前、ガザに関する報道が連日大きく取り上げられており、これから会うことになる新たな友人にどう接すればよいのか迷いながら当日を迎えた。東京駅で対面した彼らはイスラエルもパレスチナも関係なく打ち解けており、私には見分けがつかないほどだった。たった数時間の新幹線の中で話は弾み、年の近い若者は国籍なんて関係なくこれほど簡単に仲良くなれるのだと率直に感じていた。しかし、この時私が見ていたのは彼らのほんの一部分だったように感じる。

大槌町でのボランティアや一軒家での共同生活を経て個人の人間性が見え、また徐々に紛争に関する本音に触れる機会が増えていった。このプロセスは非常に貴重な経験だった。誰かが食器洗いをしていると必ず手伝う人、少し暗い雰囲気になった時におどけて場の空気を変える人など、多様な個性が光り、相互に受け入れ、一人ひとりに居場所があった。そんな生活の中で、イスラエル、パレスチナ、日本の区別が生まれるのは紛争状況に関するニュースが小さな声で話題に上る時だけだった。紛争の話をする時、主語は私やあなたではなく、政府や犯人、だった。私たち一人ひとりの間に紛争なんてないのだと確信した。

1週間ほどの大槌町での生活を終えた頃、イスラエ

Just before the project started, the news report about the escalation of the tension between Israel and Palestine repetitively showed up on TV. These media reports made me unsure if all of us could get along. Despite the concerns, Israeli and Palestinian

ル・パレスチナの間で政治的課題は避けようという自主的な合意があったことを知った。目の前のボランティア活動に集中する生活は「平和で天国のような場所に休暇に来ているようだった」と表現した人もいた。それほど、紛争が彼らの母国の日常になっているのだと気がつき大きな衝撃を受けた。同時に、これほど相手のことを気にかける温かい心の持ち主たちの国の間で、なぜ闘いが続けられるのかと疑問をもたざるを得なかった。そこで改めて、紛争は個人の間にはなく、もっと大きな、得体の知れない存在の間にあるのではないかと感じるようになった。

大槌町での経験は私に、人間の繋がりの温かさを教えてくれた。海と山に囲まれた美しい土地、隣人の顔の見える生活は、神奈川で生まれ育ち東京の大学に通う私にはとても新鮮だった。津波の映像で目にした場所を実際に通り過ぎててもなお、4年前、そこに真っ黒い壁のような津波が押し寄せ多くの命や生活が奪われたのだとは信じ難かった。震災の経験談を聞けば聞くほど自分をその立場に置くことの難しさを知り、私にはなにもできないことをじれったく感じた。

イスラエル・パレスチナの友人との2週間、そして大槌町でのボランティアを通し、ある大きな学びと将来への課題を得た。私は中東で起きている紛争の当事者ではない。神奈川で生活している限り大槌町の復興に携わることもない。どちらの場合にも「部外者」かもしれない。しかし、だからといって何もできない訳ではない。どう頑張っても当事者になれない自分の存在を受け入れ、私の「関わりたい、役に立ちたい」という意思を喜んでくれる人がいた。今回の経験から、私が相手を気遣う限り、私にもできる事はあるという大きな希望を得られた。今後、私の取り組みが当事者である人々にどんな影響を与えられるのか、どのように関わっていくことができるのか、という問いに対する答えを自分なりに追求して行きたい。

participants looked very close when I first saw them at Tokyo station. As we introduced ourselves to each other in the train, I could immediately sense that the countries of origin or the religions did not prevent us from bonding. Now looking

back, after two weeks, I can say that the impression I had at the time was correct, but I realized that it was not quite the entire story.

Through experiencing all the volunteer works, cooking meals and sharing food and bedrooms, I was able to look at each personality without any label regarding their nationality. Everyone with different personality and identity could find a place for her/his own in the group. I truly appreciate that we got along very well and there were no fights. Therefore, I almost forgot that their countries were in conflict against each other. Only when some of them murmured about the ongoing situation back in the countries, I realized that they are actually going through hard time.

One thing I have noticed is that when they talked about the war, they assumed that the enemy was an ambiguous, intangible entity to fight against, instead of imagining their actual friends sitting in front of them. The Israeli - Palestinian conflict is not a conflict among individuals. It is a conflict among unclear large bodies, which might attack people and their family. Such a conflict does not need to prevent any friendship between individuals.

Life in Otsuchi-cho opened my eyes about how

beautiful it is to live in a close-knit community in a beautiful sight surrounded by nature. As I grew up in the city area where neighbors are almost strangers, I even felt jealous for such a calm and simple life. It is not hard to understand why people stick to their homeland despite the risk of Tsunami after 3.11. It is simply because life there is full of energy and hope.

Those two weeks gave me an insight and generated a new question regarding my life. The insight is that I can still be welcome to make the difference in an issue I am not directly involved, as long as I have a will. Until I volunteered in Otsuchi-cho, I was not sure about how residents would feel about us coming in, doing small volunteer works and leaving after a week. I do not think we made a huge difference, but the people looked happy while spending time with us. Making someone else happy by expressing love and care is the whole point of life according to me. The question that arose in me is about the position from which I would like to make the difference: Should I belong to a larger organization to have a broader influence, or should I be an individual worker? I will try my best to find the right answer.

## 齋藤 鉄也 Tetsuya SAITO

- 大学2年生 19歳
- Japanese 19 years old Sophomore, univ.

今回このプロジェクトでは、前半の岩手県大槌町と後半の東京で2つの「平和の架け橋」を築いた。

前半のボランティア活動で築いた、被災者との平和の架け橋。印象に残っている場面は3つある。

まずは菜の花プロジェクトの金山さん。金山さんは被災翌日から大槌川周辺の瓦礫を取り除き、菜の花で川周辺をいっぱいにする活動をされている。そして同時に自分の経験に基づいて、紙芝居で震災を伝えている。私は震災当時、大槌町から遠く離れた東京におり、食べ物も電気も十分にあった。紙芝居の中で自分と同じ、震災当時高校生だった避難者の子どもたちに関して言及される場面があった。同じ高校生で被災者でありながら、小中学生の震災孤児ら、下級生の世話役として被災初日からボランティア活動を行っていたと聞いた。当時私は何もできなかったことが今でも悔やまれる。毎年春の川沿いには鮮やかな菜の花の黄色が広がるそうで、次の春に

はぜひ訪れたいと思う。

続いては大槌町で被災した及川夫妻。このご夫妻宅ではテレビで放送されない津波映像を観て、津波がどれほど恐ろしいものかを見せつけられた。及川さんの言葉で最も印象に残っているのは「黒いカーテン」という表現だ。ここで初めてわかったのは、津波はふだん浜に打ち寄せる小さな波とは根本的に違うものだということである。後に釜石にある銭湯に行く途中で、ビデオで見た場所が現れた。目の前に広がる瓦礫を見て、大きな防波堤を根こそぎ壊して町をさらった津波とは何かを学んだ。そして訪問の最後に『花は咲く』を四カ国語で披露したときに及川さんが見せた、くしゃくしゃの笑顔が印象に残る。



そして最後は、ロックフェスでの交通整備で一緒に仕事をしたボランティアスタッフ。彼は津波に流されたが電信柱につかまったことで助かったそうだ。そしてこの震災を経験して、震災以前抱いていた「この町を早く出たい」という思いから、この町の復興を自分の手で成し遂げたいという気持ちへの変化が起きたそうだ。震災が住民の心にかに大きな傷跡を残したのかと胸が締め付けられた。彼と話す中で、仮設住宅に日中残される年配の方々や、移転を余儀なくされた結果起こった地域共同体の崩壊など、今後解決していかなければならない課題が見えた。今後ボランティア活動は、瓦礫の撤去作業など目に見えるものではなく、被災者との対話で初めて見えてくる、目に見えない問題の解決が必要とされることが予想される。今回の活動をきっかけに、再び東北と平和の架け橋」を築いていきたいと思った。

This project was really challenging for me. In this project, I built two "Peace Bridges" in Otsuchi-cho and Tokyo.

I built the one bridge with the victims of Tohoku in the first part of the project. Three things impressed me so much during the volunteer activities. First, the story told by Mr. Kanayama who started a program called "Nanohana" was meaningful to me. Following the story about his painful activity, which consists in removing debris of the disaster from the river and planting flowers, he mentioned the story about some high-school students. According to his story, the high school's students did volunteer activities in order to evacuate children and most of them became orphans because of the earthquake, on the same day. When I listened to the story, I felt sorry because those high school students and I are of the same generation. Furthermore, it was regrettable that I could do nothing for them except for watching the news on TV from Tokyo. I hope "Nanohana" will bloom and spread in the next spring around the river.

The second thing that impressed me was to watch the video of Mr. and Mrs. Oikawa, which were not broadcasted on TV. In those videos, Tsunami was described as a big "black curtain" that swallowed the whole city including the prevention wall and many houses. Visiting the city, seeing the broken walls and on the way to the public bath in Kamaishi-Shi next to Otsuchi-cho I finally understood how Tsunami was terrible to them. When we sang to Mr. and Mrs. Oikawa the song "Flower Will Bloom" as gratitude for showing us the video and their hospitality, I was

後半の活動では、イスラエルとパレスチナの若者の間に「平和の架け橋」を築いた。彼らの話を聞いてわかったことは、テレビの前に座ってみるニュースで報じられる場面が全てではないということだ。歴史がそうであるように、報道もまた制作者側の意図がみられる。もちろん紛争中ではあるものの、市民同士は双方ともに互いに仲良くできていることがわかった。前半の大槌町での活動で心をゆるし合えたから、本音で語り合い「平和の架け橋」をかけることができたのかもしれない。しかし私が思うに、彼らの心にはすでに「平和の架け橋」がかかっていたのではないかと思う。国や宗教に関係なく、同じ人間として接することで今回の対話が成功し、今年もまた「平和の架け橋」を築くことができたと信じている。

able to see their carefree smile and their faces that impressed me a lot.

The last impressive thing is about a person of the staff of the rock festival I had the chance to volunteer with. He used to dislike his own hometown and tried to leave there until the earthquake happened. However, the disaster made him finally notice the good things of his hometown. According to his experience, he saved himself by grabbing a pole though he swallowed into the Tsunami. In his testimony, the population and the connections of the town faced many problems. I found that a problem concerns the elderly that remained alone all day long after the collapse of the community center because of the tsunami and earthquake. The most important thing is the volunteer activity that connects people, in order to remake communities. In order to resolve the invisible problems, we need to keep on doing volunteer in the long term. The Peace Bridge has yet to come.

On the second part of the project, we made a "Peace Bridge" between Israelis and Palestinians. Judging from their stories things shown from the media are influenced by the positions of the authors. By taking part in this project, participants can probably solve the problem from the bottom despite the conflict. Although they were able to get along with each other thanks to the activities, I would rather say that they had it already in their minds. As a conclusion, I believe we were able to make a "Peace Bridge" regardless of their nationality or religion.

# 植田 陽香 Haruka UEDA

●大学2年生 20歳  
●Japanese 20 years old Sophomore, uviv.

夢のような2週間だった。書きたいことはたくさんあるが、最も伝えたいことについてだけ書こうと思う。それは、実際に現地に行き、現地の友人を持つことの重要性についてである。

私は、春のスタディツアーで、イスラエル・パレスチナを訪れ、両国に素敵な友人ができた。それゆえ、両国の紛争に関する報道を見るたびに、大変胸が痛み、彼らが無事であること、彼らが安全に暮らせることを心から願った。「どこか遠い国の話」ではなく、「友人の国の話」だからこそ、これほど自分のことのように考えることができたのだと思う。大切な友人の平和のために自分もできることをしたい、ということが、自分がイスラエル、パレスチナ問題に関わっていくうえでのモチベーションだ。

今回、被災地である大槌町を訪れたことに関しても同じことが言える。震災が起こったとき、私は山口県に住んでいたので、震災の報道を見ても、あまり実感がわかず、「どこか遠い場所の話」に感じられていた。しかし、今回、大槌町を訪れ、一週間生活し、ボランティア活動を通して被災者の方々と交

I spent two amazing weeks with my dear friends. I have many things I would like to write but I will just share the best things and moments. It is very important to go actually to the spot and make friends there.

I joined the study tour last March. I visited Israel and Palestine and I made amazing friends from both sides. I was so shocked when I heard the news about the conflict. I hoped, from the bottom of my heart, that they were all fine and safe. For me, the conflict was not "something happening in far countries", but "what was happening in my friends' countries". For this reason, I considered the conflict as a problem directly related to me. My motivation to join this kind of peace project is the will of doing everything I can for my friends' peace.

The same happened when I visited Otsuchi-cho, which was damaged by the earthquake. When the earthquake happened, I was living in Yamaguchi. Though I saw

流したことにより、東北を以前よりずっと身近に感じることができるようになった。ボランティア活動では、むしろ自分が大槌町の方々からたくさん学ばせていただいたと思う。大槌町で、たくさんの素敵な人々と出会えたことにより、私にとって、被災地である東北は、「どこか遠い場所」ではなく、「友人の住む場所」に変わった。自分が役に立てることはあまりないかもしれないが、それでも、被災地に今後も関わっていききたいという思いが生まれたのは、メディアを通して情報を得るだけではなく、実際に被災地に足を運んだからである。

この平和の架け橋プロジェクトを通して、築いたイスラエル、パレスチナ、日本の友人との絆や、自分と東北のつながりを大切に、今後も、平和の為に、自分にできることをしたい。

the news about the earthquake, I could not imagine what was really happening. However, staying in Otsuchi-cho for a week and communicating with local people through the volunteer activity, made me feel much closer to the disaster area, Tohoku. By working as a volunteer, I learned a lot from people living there. Meeting nice people in Otsuchi-cho made me consider Tohoku as "the place where my friends live", not as "somewhere far from me". I will probably not be able to help the suffering people, but I decided to keep my relationship with Tohoku after this project; this because it is not just something I have watched on television, but it is a place I visited and people I met.

I want to treasure the bonds I have created with my dear friends and the connection between Tohoku and me; I would also like to do my best to facilitate peace.







### ステラ・ペドラッツィーニ Stella PEDRAZZINI

- イスラエル・パレスチナグループ引率責任者
- Responsible of the Israeli and Palestinian group

今年のプロジェクトはさまざまな理由で特別なものだったと言える。最初から多くの事情で、「平和の架け橋 in 東北」の実施は危ぶまれてきた。ビザ取得には諸々の問題がつきまとい、ガザからのロケット攻撃とイスラエル軍の爆撃は激しさを増すばかり、テルア

ビブ空港は閉鎖されるかどうか最後の瞬間までわからなかった。それに、イスラエルとパレスチナの参加者の間で、共同生活の間にどんなトラブルが起こるかもわからず、その上、大槌町でのボランティア活動の場はもうあまりないのではないかという危惧もあった……。これら全てにもかかわらず、今回もプロジェクトは成功裡に終わることができた。それが可能になったのは、テルアビブの日本大使館や、大槌町のカリタスジャパン、そしてこのプロジェクト実現のためにご協力くださった全ての人々のおかげであった。そして主に井上理事長の力、積極性と平和に対する信念に負うところが大きい。

私にとって、イスラエル・パレスチナの若者たちのボランティア活動の引率者として来日は4回目、また大槌町では3回目となった。初回と同じようにこの素晴らしい役目を与えられたことは本当に名誉なことだと感じた。大槌町はゆっくりと復興しており、町の本格的な再建の前に、準備段階の工事を進めている。あの大好きだった色彩豊かなカリタス大槌ベースの建物は解体されていた。その土台の上に立った時は心が痛かった。しかしこの地域の嵩上げ工事を始めるためには、それは必要なことだったのだ。

過去2年の経験から言って、町の復興に貢献できるようなボランティア活動は少なくなっていると知っていた。しかし、少なくとも大槌の方々に私たちの関心と共感を示すことはできた。彼らは、「そんなに

遠い国から来てくれて、一緒にいてくれるだけでも嬉しい」と言っていた。しかし、私たちの方こそ、たくましく生きておられる勇気のある方々にお会いできたことが嬉しかったし、光栄であった。

例えば金山さん、この方にお会いしたのは2度目である。「菜の花プロジェクト」はまだ継続されていた。彼が、地震や津波の前後のことについて心を込めて話してくださっている時の彼の輝く眼差しも健在だった。この大槌川での悲惨な体験、そしてその悲しい記憶にもかかわらず、彼は3年半にわたって、この地に犠牲者たちの生きた証を残すために毎日汗を流し続けている。

私は、及川ご夫妻のお姿の中に、もう一つの強さの証を見た。お2人はご自宅を私たちに解放して下さっただけでなく、そのお心も開いてくださった。お2人の詳しいお話に耳を傾けている時、人間は大自然の力の前にどれほど無力であるかを、またしても痛感して、辛かった。私はお話を聴きながら何回も震えた。例えば、津波がますます迫ってきた時のお話や、食べ物も飲み水もなかった避難所での詳しいお話などだ。とくに、ご主人が、津波によるトラウマのために長い間、大好きなピアノに触れることさえできなかつたと聞いた時、とても胸にこたえた。

学童保育で出会った全ての子どもたちの希望に満ちた生き生きした眼差しや、あの仮設住宅で風船バレーと一緒に興じたお年寄りたちの、あの大きな災害にも負けない強さなども忘れることはできない。

毎年のように大槌町での日々はあつという間に終わり、プロジェクトの第2部が始まった。大槌での滞在中、参加者たちは、自分たちを「国際家族」と称して、絆を強め、次のステップのための良い基礎を創っていた。東京での最初の体験は、「東京大空襲戦災資料センター」見学で、参加者たちはみんな心を揺さぶられた。JICAでの日々は、プロジェクト第1部で培われた参加者たちの心の一致と互いの理解をさ

らに深めるため、大いに役立った。

私は今このレポートをイタリアの我が家で書いている。これがおそらく東北のための最後の活動だったと思うととても悲しくなる。しかし、大槌町の方々に

For many reasons I can say that the project this year has been a special one. Since the beginnings, many factors threatened the fulfillment of this edition of the "Peace Bridge for Japan". Starting from the troubles with the Visas, the war in Gaza, the uncertainty until the last moment about the closure of Tel Aviv airport, the possible problems or fights between Israeli and Palestinian participants while living together or the only few volunteer works left to do in Otsuchi.. Despite everything, we had the grace of making also this edition a success. It was possible just thanks to the cooperation of the Japanese Embassy in Tel Aviv, to the efforts of Caritas Japan in Otsuchi-cho, to the dedication of all the people that worked at the realization of the project and mainly thanks to Ms. Inoue, her power, her positivity and her true faith in peace.

It was my fourth time being responsible for Israeli and Palestinian youth and the third time volunteering in Otsuchi-cho, but I felt honored as the first time to be given once this amazing opportunity. Otsuchi-cho is slowly recovering and implementing the rehabilitation plan before starting to rebuilt the town. It was painful to stand on the remaining basement of the colorful and beloved Caritas Japan base, but demolition was the only possible way to start the works of elevation of the land.

Due to the previous years' experience, I knew that the volunteer work and our contribution to the town recovery would be less, but at least we could show our interest and our sympathy to the people of Otsuchi. They were very grateful for our presence, for have been coming from far away to spend some time together, but I can say that it was all our pleasure and honor to meet such strong and courageous people.

One example is Mr. Kanayama, whom I had the fortune to meet for the second time. The "Nanohana" project is proceeding, but the light in his eyes while he was talking about the moment preceding and following the earthquake and tsunami was still the same.

知ってほしい。たとえ来年は日本でのプロジェクトが行われなくても、私たちは決して皆様を忘れることはないし、皆様の素晴らしいふるさとが完全に復興するように心から祈り続けていることを。

Despite the painful moments and memories the river gave him, since three and a half years he is working hard every day to leave a tangible sign of the victims' lives on this land.

I found another example of strength in Mr. and Mrs. Oikawa, who opened the doors of their house and of their hearts to us. It was painful to hear the details of their story and to realize once again how human beings are completely powerless in front of the power of nature. I was shaken by many parts of their story like: the moments the tsunami was getting closer, or the details of life in the community center without food or water; but when Mr. Oikawa said that he could not go back to play the piano since the tsunami because of the trauma he had, it touched me a lot.

Not to forget the strength and hope we found in the eyes of all the kids in the kindergarten and those of the elderly who, despite the tragedy they lived and their temporary accommodations, came to play volleyball with us.

Like the previous years, quickly came the moment to leave Otsuchi-cho and to start the second part of the project. I can say that during the stay in Otsuchi the group became very united, defining themselves as an "international family" and building a good base for the next step. The first experience in Tokyo was in the Centre of the Tokyo Raids and War Damage, and it was very touchy for all the participants. The days in JICA were very fruitful for the consolidation of the relationships in the group created during the first part of the project and for the mutual understanding or comprehension of "the other".

I am now writing from my house in Italy and my thought that this was probably the last edition for the people in Tohoku makes me very sad. It is important for the people in Otsuchi to know that even if next year we are not having our project in Japan, we will always remember you and pray for the full recovery of your amazing land.



## ヤクーブ・ガザウィー Yacoub GHAZZAWI

- イスラエル・パレスチナグループの若者リーダー
- Leader of the Israeli and Palestinian group

このプロジェクトの前に、まず考えたことは、私たちの国の厳しい情勢により、この年のプロジェクトはとても難しくなるだろうということだった。しかし、前年の経験から、困難な状況を扱うこのプロジェクトのやり方についても信頼していた。

この理由から、私は、今年のプロジェクとも、2つの異なる視点から見て成功だったと言える。

第1に、母国の困難な状況にもかかわらず、イスラエルとパレスチナから若者を連れて来て、彼らに協調して共に生活させたこと。また第2に、彼らの間にどのように友情が築かれ、互いを尊重したのかを理解することによって、私は彼らの絆がどれほど強くなってきたのかわかったからだ。ゆえに、全体として、このとても困難な状況にもかかわらず、そのようなやり方で、どうやってプロジェクトを成功させるのだろうか？という考えをもった。考えられる唯一の答えは、平和に、隣人と協調して生きたいと望む多くの人々や若者がいるということだ。イスラエル人やパレスチナ人は一緒に行きたくないと言おうと、それは誤りだ。歴史的に、ユダヤ人とパレスチナ人はいつだって隣人であり、唯一変わったことは、その名前だけだ。

プロジェクトそれ自体を振り返ると、今年の大槌町での経験は、私にとって、さまざまな感情が入り混じったものになった。復興がなされるのがどれほど遅いのかを見ることは辛く、どれほど多くの時間を、人々は仮設住宅で未だに過ごさなければならないのかを知り、彼らがどれほどの多くの時間をまだ苦しまなければならないのかと考えた。また、土地の嵩上げのために、お墓を移したと知り、私は、津波が起こる以前も、以後も、亡くなった人々は休息できないのではないかと思った。個人的に心を打たれたことは、取り壊された昨年ベースキャンプを見たことだった。そこで美しい思い出や、私たちがどれほど多くの幸せな時間や悲しい時間を共有

したのかを思い出すことは悲しかった。それでも、地域の人々の笑顔を見たあとは、ほほえむこと、苦しみを乗り越えることはどれほど難しいのか私は理解しているが、彼らはそれをしたのだと知った。とても多くのものを失った人でもなお、このように笑顔になれることを見て、私は力をもらった。どんなことが起ころうと、笑顔になれることは私に勇気をくれた。

今年のベースキャンプでの生活については、一緒に掃除し、料理し、同じ部屋を共有し、共に働く大きな幸せな家族のような生活だったと表現できる。私たちは、プロジェクトの責任を担うスタッフと参加者の若者との間に、美しい、相互に尊重しあう関係を築くことができた。

大槌町での滞在はあっという間に終わり、ベースキャンプを去らなくてはならない時がやってきた。それは私たち全員にとって辛いことだったが、私たちは東京に向かい、個人的には、2つの理由から、この時を心待ちにしていた。1つ目の理由は、私はこのプロジェクトにおいて、この東京での活動が最も重要だと考えていたからだ。2つ目の理由は、今年始めて、第2次世界大戦の時の東京大空襲戦災資料センターを訪れることになっていたからだ。私は、東京に、どれほど多くの死傷者がいたのかを初めて知り、衝撃を受けた。友人や家族を失ったことによる苦しみを知ることは、良い体験ではあったが、同時にとても辛いものでもあった。

最後に、私が初めから待っていたのは、ワークショップやシェアリングで、このプロジェクトは成功だと私に思わせてくれる時である。JICAでの滞在中、小さな問題が起こり、私が以前言ったように、若者たちは、誰に言われずとも、問題に向き合って共に立ち上がり、それにどう対処したらよりよいのかについて話し合った。また、紛争がどのように彼らの生活に影響を及ぼしているのかについてのシェアリングの時間にも、彼らが、尊重しあって、互いの話を妨げることなくよく聞いているのを見て、私はとても嬉しかった。それぞれの経験を自由に話し、互いに聴き合うための時間もとることができた。

私自身は、このプロジェクトと共に成長し、私自身

2005年からどれほど変わったのか気づいた。私は今や、全くの別人で、以前よりずっと大人になり、責任感ももてるようになった。この理由から、私はまず、弘子さんとイブラヒム・ファルタス神父に感謝を述べたい。弘子さんは、私を支えてくれる、人生におい

The first thought I had before the project, was that due to the hard situation back in our countries this year's edition would have been a very difficult one. On the other hand I have always had faith in the purpose of the project in the way the project deals with hard situations according to the previous years' experiences; for this reason I can say that the project of this year was a success from two different perspectives. First of all by bringing students from Israel and Palestine together despite the hard situation in their home countries and making them live together in harmony and second by seeing how friendship was built between them and how they were standing up for each; it showed me how strong the relation was getting. So generally, the idea is: how can a project be successful in such a way despite the very hard situation? The only possible answer is that, there are many people and youngsters who want to live in peace and harmony with their neighbors. Whoever says that Israelis and Palestinians don't want to live together is wrong; historically Jews and Palestinians have always been neighbors, the only thing that changed was the name.

Now let us go back to the project itself: the experience in Otsuchi of this year was a mixture of feelings for me. It was hard to see how slow the reconstruction was going on and, seeing how much time people still need to stay in the temporary housing, made me think how much more they need to suffer; also seeing that they moved the graves to raise the level of the land, made me think that neither the dead people could find rest before and after the tsunami. One personal thing that touched me was to see the base camp of last year demolished, it was such a sad feeling to remember the beautiful memories we had there and how many happy and sad moments were shared in there; nevertheless after I saw the smile on the local people's faces I understood how difficult it is to smile and to overcome the pain, but they did it. It gave me strength to see how people who lost so much can still smile and gave me the courage to smile no matter what. As for the life in the base camp

て大切な人で、私にとって家族であり、イブラヒム神父は、2005年のこのプロジェクトに参加する機会をくださった人だ。私はこのプロジェクトが続くため、そしてその成功のためにできることは、もっともっと協力できればと願っている。

this year, it can be described easily as the one of a big happy family cleaning together, cooking, sharing the same room, working together with such a happy spirit; we created also a beautiful relationship of mutual respect between the staff responsible of the project and the students.

Suddenly the time to leave the base camp arrived. It was hard for all of us, but we were heading to Tokyo and personally I was looking forward to this moment for two main reasons: the first one is obviously because I consider this one the most important part of the project and the second because this year for the first time we were going to visit the museum dedicated to the bombardment of Tokyo during World War II. I was surprised to know how many casualties there were in Tokyo and shocked to realize that nobody ever talked about it, ever!!! It was a nice and very hurting experience at the same time, to see the suffering caused by the loss of friends and families. Finally, the moment I was waiting for since the beginning came; the part of workshops and sharing and the moment in which I realized that the project was successful. A small problem happened during our stay in JICA and, as I said before, the students stood up together facing the problem and agreeing on how it was better to deal with it, without anyone telling them; also during the sharing time about how the conflict have affected their lives from the begging till now, I was very happy to see how they were listening respectfully to each other, attentively and without interrupting, each one took his time to share his experience freely.

As for myself, growing up alongside of the project, made me realize how much I changed since 2005, I am a totally different person now, much more mature and responsible; for this reason I would like to thank first of all Ms. Hiroko for being such a supportive and important person in my life and definitely a family for me, and Father Ibrahim Faltas for giving me the opportunity to be part of this project back in 2005. I hope I can do more and more for the continuity of the project and its success, in any possible way.



## 浅野 耕二 Koji ASANO

- NPO法人 聖地のこどもを支える会 スタッフ
- Staff of NPO Helping Children in the Holy Land

### プロジェクトの意義

プロジェクトを通して、常に自分へ投げかけていた一つの問いがある。それは、「このプロジェクトを実施する価値はあるのか?」との問いだ。私たちのプロジェクトは、支援者からの貴重な寄附金で成り立っている。また、「READYFOR?」での支援金集めを通じ、その大変さと支援金の重みを感じた。よって、この問いが常にあった。

しかし、この問いに対する正直な答えは、「まだ判断できない」である。なぜ判断できないのかは、このプロジェクトの目的に因る。その目的とは、「ボランティア活動を通して3か国の若者が相互に理解し、友情を育む。そして、将来の平和を担う人物に育てる。」である。この目的を達成できたかどうかを、二つに分けて考えてみた。

最初に、「3か国の参加者が相互に理解し、友情を育む」ことができたかだ。

率直な感想としては、互いに理解できたかは疑問だが、全員がとても仲が良くなれたと感じた。しかし、それが一時的なものなのか、母国に帰ってからも続く関係なのかは判断できない。

次に、「将来の平和を担う人物に育てる」ことができたかだ。

参加者の中には、実際に平和に携わるような道に進

みたいと希望する者もいた。しかし、成果として感じられるには長い目で見なければ判断できない。

以上が、「このプロジェクトを実施する価値はあるのか?」の問いに対して、「まだ判断できない」と答えた理由である。

もちろん、私個人としては、多くを学ぶことができ、価値があった。しかし、当団体、イスラエル・パレスチナ・日本、また支援者の方々にとって価値あるプロジェクトにしなければならない。そのためには、プロジェクト後も、参加者との繋がりを継続し、また彼ら同士の繋がりを維持・促進できるように働きかける必要があると感じる。そして、少しでも彼らの成長を、また彼らの国の平和の一端を担えたらと思う。

最後に、プロジェクトを終えた今、今年の参加者へ望むことが2つある。

1つ目は、スタッフの立場としての望みだ。それはプロジェクトの目的の通り、彼らがこの先さらに成長し、未来の平和を担う人材になってくれることだ。

2つ目は、一人の“友達”としての望みだ。それは彼らが平和にそして幸せな生活を送れる、ただそれだけが望みだ。そんな彼らに、将来また笑顔で再会できることを楽しみにしている。

ご報告を終えるに当たり、私が当団体に携われたこと、また今年もプロジェクトを無事に実施できたことに喜びと感謝の念を感じている。3か国の参加者をはじめ、支援者の皆様、協力・応援して下さった多くの皆様、感謝申し上げます。

### The meaning of our project

During the project, I always questioned to myself: "Is our project worth to do?" I made myself this question many times, because we could realize these projects thanks to the donation of the supporters; I felt how difficult it is to collect funds and consequently how important they are, especially during the requests of donations through the crowdfunding program "Ready For".

However, my answer to the question is that I cannot judge whether it is worth or not, because

of the purpose of our project. The purpose is to help Israeli and Palestinian and Japanese youth to recognize each other, to make good friendships and to become people who make peace. I intend to describe this concept, dividing the idea into two.

First, it is about whether they could recognize each other and become friends; honestly, I doubt they could recognize each other but I felt that they could make good friendships. Nevertheless, I cannot judge the long lasting friendships after the project.

Second, it is about whether they will become

people for peace. Some participants said: "I want to work for peace". However, I cannot know the outcomes now. It needs about 10 or 20 years to judge it.

For these reasons, I conclude that I cannot judge right now. Of course, the project is very valuable for me. However, we should make it valuable for our organization, for Israel-Palestine-Japan and for our supporters. Therefore, we must keep in touch with them and make an effort to enhance friendships between them after project. In addition, we would like to help them in during their growth and to spread peace

in their countries.

Finally, I would like to express two wishes to the participants after project. First, as a staff member, I wish they become people for peace, as purpose of this project. Second, as a friend, I wish that they have a happy and peaceful life. I am looking forward to meeting all of them again soon.

As I end this report, I would like to thank each of you, participants and supporters, with all my heart for your cooperation; I am very happy to be a stuff of this organization and to achieve this project.

## 田制 則子 Noriko TASEI

- NPO法人 聖地のこどもを支える会
- Director of NPO Helping children in Holy Land

### 一つの家族のように

今年大槌町で、私たちのプロジェクトを陰で協力してくれた及川さんご夫妻の事は、忘れる事が出来ません。宿の提供から始まり、全員をご招待を受け、お茶をいただいた。

ヤクーブのピアノ伴奏で歌を唄い、帰りには奥様手作りの作品をいただき、ボランティアの疲れも忘れ、満ち足りたひと時でした。「平和のつどい」には浴衣の着付けを及川さんのお友達が大量で手伝ってくださり、これこそ民族、世代を超えた交流ではないかと。

### We are one family

During our stay in Otsuchi this year, Mr. and Mrs. Oikawa are the couple I will not forget. They did us many favors: some staff could sleep over their house, they invited all of us for tea, and we sang all together accompanied by Yacoub with piano, still more, Mrs. Oikawa gave each of us a lovely hand-made souvenir. It was a beautiful time of relaxation and refreshment. For the event of "Peace Meeting", her friends as well as Mr. Oikawa came along to help us wearing yukatas. It was a nice and joyful scene of living interchange beyond races and generations, I thought.

The words from a Palestinian girl, who grew up through the time of conflict, are

紛争の中で育ったパレスチナの若者が、なんの不安もなく、一つの家族のように仲良く生活し、「生きてきて一番幸せです」と。そして震災に遭われた大槌町の人々が前向きに生きている姿を見て、「私も前向きに生きていく」と語った言葉が深く私の心に残った。

紛争のない平和な未来をつくる。道は遠くても前進しようと、大量の支援者に感謝します。

left deep in my heart: "Here in Otsuchi, both Israeli and Palestinian, stayed together just like one family without a bit of fear nor uneasiness. This has been the happiest time in my life. As I saw those local people in Otsuchi who had survived the big disaster, I decided to live on stiff and strong. Let's step forward to build a peaceful world beyond conflicts and wars." With many thanks to all the supporters.





## 福島 貴和 Kiwa FUKUSHIMA

●信州善光寺玄證院住職  
●Shinshū Zenkō-ji, Genshō-in, The Buddhist chief priest

### 『平和は難しい』

この原稿を書き始めた（8月28日）朝刊に、パレスチナ自治区ガザで戦闘を続けたイスラエルとイスラム組織ハマスなどの武装勢力が26日、長期停戦に合意したことが報じられた。

6月12日にイスラエルの少年3人がパレスチナのイスラム組織により誘拐され殺害されるという事件が起き、その報復としてユダヤ人によるパレスチナ少年の殺害事件が続いて両者の衝突が激化し、8月には、ガザにおける死者が1600人を越える事態となっていた。従って、今年度の東北支援は、両者の戦闘の真ただ中に行われたことになる。

遡ること5月、イスラエル・パレスチナからの参加者選抜のところから参加させていただいた。いくらイスラエルに平和を作ろうというプロジェクトであっても、実際に戦闘が始まってしまう、停戦の見込みが立たないままで、若い人たちがはるばる日本へ来るのだろうか、という心配が先に立っていた。実行委員会の中での議論も、この時期プロジェクトが計画どおりできるのだろうか、いぶかる雰囲気だったと記憶している。

「この時期だからこそ行う意味がある」という井上理事長の最終判断で、プロジェクトの実施が決まったが、告白すると、私は心配だった。

半信半疑のまま、8月5日大宮駅で東京からの皆様と合流した。列車に乗り込むと、本プロジェクトの参加者の一群がすぐ目にとまった。今年で、「平和の架け橋」東北支援の旅は3回目だったが、前2回と雰囲気が異なることがすぐにわかった。険悪などとは言わないまでも、気まずい雰囲気が多分漂っているに違いないという、

### “Peace is difficult.”

Today's newspaper, 28th of August 2014, reports that Israel and Hamas officials reached a ceasefire agreement before two days, after the intense conflict in Gaza strip. On June 12th, three Israeli teenagers were kidnapped by some Palestinian Islamic entity. Reportedly, Israeli side retaliated

私の期待?とは裏腹に、なにか異様に陽気なのだ。後に聞いたのだが、成田空港からずっとその雰囲気は変わらなかったという。

先ずは一安心。大槌町へと向かった。昨年と比べて、被災地はすっかり落ち着きを取り戻しているなど感じた。今年は残念ながら、2年続けてお訪ねした仮設住宅へ行けなかったのも、住民の方々の心の落ちつき具合まではわからなかった。当然のことながら、ボランティア活動は、依然と比べてやや低調だった感じは否めない。しかし、今年はなんとといっても、日本の参加者を含め紛争地域からの参加者たちが、いかに有意義な共同生活ができるかが、最大のテーマだったと思う。

細かい点を言えば、きりがないのだが、概ね彼らは、私の期待以上の付き合いができていたように思う。紛争の真ただ中にもかかわらず、お互いに、理解しようという気概は感じられた。ただ、本当に、相手の立場に立って、理解しようとしていたかは、わからない。彼らには酷な要求かもしれないが、ケンカをしている者同士が理解し合い、和解し、平和に持ち込むのには、本当に相手の立場に立てるかどうかが初期のポイントだと思う。

今回のプロジェクトが、紛争中に行われたことで、真の平和を構築するにはどうしたらよいか、仏教の立場では何が言えるのか、真剣に考えてみた。しかし、お釈迦様の平和の考え方（教え、実践方法を含め）を、日本人に説いても、満足に理解していただけない中で（当然、仏教界の怠慢が原因）、文化や、宗教が異なる外国人に対しては、今述べた、「相手の立場に立つ」と説くことが最大限、今の私に言えることかなと思う。そして、このことは、2年前に感じた「いのち寄り添う」精神にかなうことでもあると思った。

仏教では、路傍の石から人まで、全てに尊い「いのち」が宿っているのだ。

of the kidnapping by murdering a Palestinian boy. These matters intensified badly the tension between the two sides, resulting in more than 2,100 casualties in Gaza strip by August. Thus, we can say that our project was in the midst of both physical and mental hostility between Israelis and Palestinians.

In May, before everything happened, I started

working for the project, with the first role as an interviewer in the selection of Israeli and Palestinian participants. After a while, the situation in Gaza exacerbated as mentioned above. This made me concerned if the prospective participants still wanted to come to Japan, to be a part of the Peace Bridge project without knowing if the war would end anytime soon. I remember well that the anxiety penetrated among the staffs, not knowing if the project could continue or not. The sentence: "it is meaningful to carry out the project because of the hard situation," said from the president Ms. Inoue, settled the course of action. This is how we decided to take this challenge, but again, to be honest, I was not yet sure at the time.

On the 5th of August I took the Shinkansen (bullet train), where all the participants from three countries were supposed to be on board from Tokyo station. By seeing the group of youngsters, our participants, I have realized that the atmosphere among them was different from the one there was between the participants last year. Despite my thought about participants feeling awkward between each other's or stern, indeed, they looked unusually happy. Later I heard that they were like that since they arrived at Narita airport.

With some extent of relief, we reached Otsuchi-cho. The town looked much more organized and calm than the year before and therefore, our group did not have a lot to do as volunteer works. Since I did not have an opportunity to visit temporary

housing this year, as I did a year before, I could not tell if the residents were feeling better than before. In any case, this year's biggest concern of this year's project was if young participants including Japanese could live together soundly.

As a whole, trying to ignore trivial issues, the youth did a lot better than my expectations. They seemed to try hard to understand each other, despite their countries were fighting each other. However, it remained questionable if they put themselves in the other side's shoes. Although it may be too harsh to expect from the youngsters, I believe that in order to transform the fight into mutual understanding, to reconciliation, and to peace, by putting yourself in other person's shoes, is of primary importance.

I have been thinking what we require to build real peace in the middle of fighting just like in the situation we had this year, especially from a perspective of Buddhism. In fact, it is difficult to make understand, even to Japanese, the idea of peace building according to Buddha; it is even harder to explain it to people who do share the culture and religion. Therefore, what I have written above is the best I could take away from this year's experience. I believe this is a common value with the spirit of "life come together and support each other," that I learned two years ago.

In Buddhism, it is said that all things in universe have a life, from a tiny stone on a street to human beings like us.



及川ご夫妻のお宅で、被災当時の体験を聴く  
Listen to Mr. and Mrs. Oikawa's experiences at the time when they were struck by the disaster.



# 7 名簿 Name List

## プロジェクト参加者

### 責任者

井上 弘子  
(NPO 法人 聖地のこどもを支える会 理事長)

### イスラエル／パレスチナ同行スタッフ

ステラ・ペドラッツィーニ  
(ヨハネ・パウロ II 世財団理事長代理)  
ヤクーブ・ガザウイ

### 日本側 スタッフ

井上 弘子 (実行委員長)  
浅野 耕二 (実行委員)  
田制 則子 (実行委員)  
福島 貴和師 (実行委員・長野善光寺玄証院住職)

## Project Participants

### General Representative

Hiroko INOUE  
(President of NPO Helping Children in the Holy Land)

### Responsibles of Israeli and Palestinian Delegation

Stella PEDRAZZINI  
(Representative of John Paul II Foundation)  
Ya'coub GHAZZAWI

### Japanese Staff

Hiroko INOUE (Director of Executive Committee)  
Koji ASANO (Executive Committee)  
Noriko TASEI (Executive Committee)  
Rev. Takakazu FUKUSHIMA  
(Executive Committee /  
Nagano Zenko-ji, Gensho-in,  
Buddhist chief priest)

## 青年参加者

### イスラエル

ヘン・シェール (女)  
ガル・ババ (女)  
モール・ニクソン (男)

### パレスチナ

マイス・エルシード (女) (イスラエル国籍)  
ワシム・アラミ (男)  
ニコラス・ガザウイ (男)  
ディマ・タドロス (女)

### 日本

中尾 有希 (女) (実行委員)  
大場 夏希 (女)  
川橋 天地 (男)  
舎川 春佳 (女)  
植田 陽香 (女)  
齊藤 鉄也 (男)

## Young Participants

### Israel

Hen SHER (F)  
Gal BABA (F)  
Mor NIXON (M)

### Palestine

Mais ERSHIED (F) (Israeli Nationality)  
Wassim ALAMI (M)  
Nicolas GHAZZAWI (M)  
Dima TADROS (F)

### Japan

Yuuki NAKANO (F) (Executive Committee)  
Natsuki OBA (F)  
Tenchi KAWAHASHI (M)  
Haruka TONEGAWA (F)  
Haruka UEDA (F)  
Tetsuya SAITO (M)

大槌町中心部を見下ろす。震災後3年以上たっても復興は遅々として進まない。当時町の人々は、津波が押し寄せ町を破壊するのを、この高台から見た。Looking down the center of Otsuchi-cho from a hill. Reconstruction has been proceeding at a sluggish pace though more than three years have passed since the great disaster. At that time, people saw the huge tsunami rushing to and destroying their town from the hill.



## 協力団体、協力者

### イスラエル、パレスチナの共催団体

ヨハネパウロII世財団

(理事長 イブラヒム・ファルタス神父)

### 日本での協力団体、協力者

協賛 独立行政法人 国際協力機構

#### 協力

在日イスラエル大使館

在日パレスチナ常駐総代表部

カリタス・ジャパン大槌ベース

カトリック長崎教会

株式会社フランストラベルセンター

#### チャリティー・イベント

家田 紀子 (藤原歌劇団)

瀧田 亮子 (藤原歌劇団)

シャディ・バシイ (神田アルミーナ)

#### 実行委員会

井上 弘子 (実行委員長)

稲垣 佐江子

浅野 耕二

篠原 双葉

中尾 有希

福島 貴和

田制 則子

## Collaborators

### Co-organizer in Israel/Palestine

John Paul II Foundation for the Middle East

(Fr. Ibrahim Faltas, President)

### Collaborators in Japan

Cooperated by: Japan International Cooperation Agency

#### Cooperated also by:

Embassy of Israel in Japan

General Mission of Palestine in Japan

Caritas Japan Otsuchi Base

Ecclesiastical Province of Nagasaki

France Travel Center S.A

#### Charity Event

Noriko IEDA (Fujiwara Opera)

Ryoko TAKITA (Fujiwara Opera)

Shadi BASHIYI (Almina Kanda, Tokyo)

#### Executive Committee

Hiroko INOUE (Chair person)

Saeko INAGAKI

Koji ASANO

Futaba SHINOHARA

Yuuki NAKAO

Takakazu FUKUSHIMA

Noriko TASEI

順不同

(In random order)

# 支援団体と支援者 / Donators

## 一般支援団体 (8団体) Organizations

|                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| カトリック夙川教会            | 聖フランシスコ病院修道女会姫路修道院 |
| イエスのカリタス修道女会 井萩第二修道院 | 株式会社レデス            |
| お告げのフランシスコ姉妹会 ナザレ修道院 | 木村 洋行(株)           |
| カルメル修道会カルメル山の聖母修道院   | 日本海洋掘削株式会社         |

## 一般支援者 (124名 内匿名希望4名) Individuals

|             |            |                  |                                  |                 |
|-------------|------------|------------------|----------------------------------|-----------------|
| 青山 博子       | 川村 直道      | 谷山 正恵            | 道又 賢一                            | 山田 真理子          |
| 安達 智恵子      | 川本 和子      | 田畑 孝子            | 三宅 英美子                           | 山田 康子           |
| 新 圭子        | 菊池 正子      | 戸井 利子            | 宮野 美智子                           | 山名 正彦           |
| アントニオ・ツゲル神父 | 木村 浩之      | 遠山 満 神父          | 村岡 秀子                            | 尹 得漢・マリア        |
| 飯島 喜久江      | 木村 副見      | 中嶋 寿美恵           | 村上 和                             | 吉川 英子           |
| 池永 廣美       | 熊谷 マリ子     | 長坪 光             | 森本 明子                            | 吉川 八重子          |
| 池端 千代       | 黒滝 津哉子     | 中原 由美子           | 山内 春治                            | 吉田 とし子          |
| 石田 知子       | 小池 章子      | 中村 ミツノ           | 山岡 慶子                            | 吉田 三代江          |
| 伊藤 勝子       | 小出 宏子      | 中山 公子            | 山口 良子                            | 米嶋 洋子           |
| 伊藤 多恵子      | 小久保 俊三     | 西田 百合子           | 山田 エミ                            | 渡部 朋子           |
| 井上 千賀子      | 小坂田 さち子    | 野田 寛             | 山田 剛・路子                          | 渡部 美佐子          |
| 岩崎 正幸       | 小林 久美子     | 野村 英司            |                                  |                 |
| 江波戸 晴夫      | 小村 エミ子     | Harvey Paul A.S. | <b>READYFOR? (33名)</b> (ハンドルネーム) |                 |
| 遠藤 恵美子      | 近藤 節子      | 箱田 昌平            | <b>Crowdfunding</b>              |                 |
| 遠藤 香恵子      | 西藤 幸子      | 波多野 輝栄           | 炭谷宇紀子                            | まちゃみ            |
| 大泉 広・照子     | 相良 敦子      | 服部 夕紀            | のりちゃん                            | 村上コウチャン         |
| 大崎 桂子       | 佐久間 進      | 浜岡 ミエ子           | Shuhei Takeyama                  | ドンボスコ           |
| 太田 啓子・梶野 陽子 | 佐々木 郁子     | 林 敏恵             | Koji Asano                       | YOSHI           |
| 太田 輝男・恵子    | 佐々木 俊之     | 原 和枝             | Hiveronique                      | Yukino Morimoto |
| 太田 晴子       | 鈴木 志帆子     | 日紫喜 満章           | cosmos                           | Tomoyo Hiraki   |
| 太田 恵        | 高島 友子      | 福島 貴和            | Shigehiko                        | Mitsumoto Kousi |
| 大八木 汎子      | 高島 文枝      | 福瀬 くに子           | Matsumura                        | Yuuki Nakao     |
| 岡 晶子        | 高野 千草      | 福田 幸子            | 美食社                              | hepoko          |
| 岡崎 三枝       | 田口 穰一郎・幾子  | 藤岡 素子            | Masaya Kumagai                   | 奥田晃之            |
| 奥村 聡        | 子          | 藤原 伸子            | 友定奏絵                             | 齋藤友紀恵           |
| 奥脇 慎子       | 武井 博・範子    | 古屋 敦子            | gabu                             | Nobuyoshi       |
| 桶屋 理恵子      | 竹谷 純子      | 古屋 恵子            | イケダ                              | Matsumoto       |
| 忍見 春枝       | 竹原 芳子      | 細工藤 真理           | Futaba Shinohara                 | Satoru Asakino  |
| 小野 有五・妙子    | 立林 久美      | 堀口 明美            | Yuki Taniguchi                   | Michel          |
| 柿崎 ゆか子      | 田中 節子      | 牧瀬 翠             | おかたく                             | Haruhiko        |
| 川上 満富・園子    | 田中 典子 テレジア | 増満 由美子           | 濱田壮久                             | Kawashima       |
| 川口 茂        | 田辺 知之      | 松田 喜代子           | Nelly                            | きわさん            |
| 川口 節子       | 谷 すみえ      | 溝井 光子            |                                  |                 |

# PROJECT REPORT

イスラエルーパレスチナー日本

平和の架け橋プロジェクト in 東北 2014 報告書



## 編集スタッフ

井上 弘子  
佐藤 克裕  
浅野 耕二  
安田 美知子  
ステラ・ペドラッツィーニ  
渡邊 禮子

## Editorial Staff

Hiroko INOUE  
Katsuhiro SATO  
Koji ASANO  
Michiko YASUDA  
Stella PEDRAZZINI  
Reiko WATANABE

## 翻訳協力

井上 弘子  
ウィリアム・ネルソン神父  
ステラ・ペドラッツィーニ  
ルイジ・オルランド  
舎川 春佳  
中尾 有希  
磯部 雅子  
川橋 天地  
植田 陽香  
齋藤 鉄也  
大場 夏希

## Translation Staff

Hiroko INOUE  
Fr. William NELSON  
Stella PEDRAZZINI  
Luigi ORLANDO  
Haruka TONEGAWA  
Yuki NAKAO  
Masako ISOBE  
Tenchi KAWAHASHI  
Haruka UEDA  
Tetsuya SAITO  
Natsuki OBA

## 写真提供

舎川 春佳  
井上 弘子  
佐藤 克裕

## Photographers

Haruka TONEGAWA  
Hiroko INOUE  
Katsuhiro SATO

平和の架け橋プロジェクト in 東北 2014 実行委員会

### NPO法人 聖地のこどもを支える会

〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX 03-6908-6571

URL <http://seichi-no-kodomo.org>

E-mail [ispalejpn@google.com](mailto:ispalejpn@google.com)

### John Paul II Foundation for the Middle East

Hebron Jerusalem Street 475, P.O.Box 24 Bethlehem

TEL (972) 2 274 55 57

FAX (972) 2 275 24 97

URL [www.jpil.ps](http://www.jpil.ps)

E-mail [info@jpil.ps](mailto:info@jpil.ps)

発行日 2014年12月1日



NPO法人  
聖地のこどもを支える会



John Paul II  
foundation

